

# バカとペルソナと召喚 獣

まつき～

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

両親の転勤によって鳴上悠は文月学園に転校することになった。

そこで待っていたのは：

これはバカとテストと召喚獣とペルソナ4のクロス作品です。

主にバカテスト主体で進めていきます。

そして作者の初投稿作品になります。

ちなみに作者は文才0です。

それと、更新は不定期です。

苦手な方はご遠慮ください。

それでもいいという方はどうぞ。

# 目次

1 2	1 1	1 0	0 9	0 8	0 7	0 6	0 5	0 4	0 3	0 2	0 1
D ク ラ ス 戦 3	D ク ラ ス 戦 2	D ク ラ ス 戦 1				キ ャ ラ 設 定				プ ロ ロ ー グ 2	プ ロ ロ ー グ 1
90	80	68	62	54	44	33	26	19	13	6	1

2 5	2 4	2 3	2 2	2 1	2 0	1 9	1 8	1 7	1 6	1 5	1 4	1 3
A ク ラ ス 戦 2	A ク ラ ス 戦 1				B ク ラ ス 戦 5	B ク ラ ス 戦 4	B ク ラ ス 戦 3	B ク ラ ス 戦 2	B ク ラ ス 戦 1			
235	225	216	206	194	181	171	162	150	141	132	118	107

3 8	清涼祭編 8	359
3 7	清涼祭編 7	349
3 6	清涼祭編 6	339
3 5	清涼祭編 5	332
3 4	清涼祭編 4	322
3 3	清涼祭編 3	315
3 2	清涼祭編 2	304
3 1	清涼祭編 1	294
3 0		286
2 9	林間学校	277
2 8		267
2 7	Aクラス戦 4	257
2 6	Aクラス戦 3	245

3 9  
清涼祭編 9



# 01 プロローグ1

悠 side

季節が春になりひと月たった4月のはじめ。

鳴上悠は友人に見送られながら一人電車に乗った。

今日から文月市にいる叔父さんの所にすむことになったからだ。

なんでも、両親が海外に転勤することが決まってしまったらしい。

両親共に海外転勤もなにか変だがそこは気にしないでおう。

『次は文月、文月です。お降りの際は…』

電車のアナウンスが聞こえた。

どうやら目的の駅に到着したみたいだ。

「お、どうやらあの子みたいだな。おーい!!」

駅のホームを出てすぐに俺を呼ぶ声がした。

「お久しぶりですね。叔父さん」

「ああ。何年ぶりかな？それにしても、大きくなつたな。写真で見るとより男前じゃないか」

「お陰さまで。ありがとうございます」

そんな話をしていると、叔父さんの後ろから一人の女の子が出てきた。

「そういえば、悠君はまだ知らなかったな。紹介するよ。この子は俺の娘で、菜々子って言うんだ」

「……」

「よろしく、菜々子」

「……よろしく……」

それだけ言うと、すぐに叔父さんの後ろに隠れてしまった。



「すまないな。菜々子は人見知りでな、特に初対面だとこれなんだ」

「そうなんですか」

「まあ、立ち話もなんだから、早いところ車にのって、俺の家にも行こうか」

俺はこくりと頷き、叔父さんの車に乗った。

そして、疲れていたのかすぐに寝てしまい、気がついたら家についていた。

「よっほど疲れていたようだな」

「すいません。慣れない電車だったもので」

「まあ気にするな。そろそろ引越しの荷物もくるだろうからな。それまでは話でもしていようか」

「そうですね。ああ、そういえば」

俺はふと思いついたことを聞いてみた。

「次にいく学校では振り分け試験と言うものがあるって聞いたんですけど、いつだかわ

かりますか？」

そういうと、叔父さんは驚いたような表情になって、

「姉貴から聞かなかったのか？」

「振り分け試験があるとしか言ってませんでしたね」

そういうと、叔父さんは手を頭に当てて、少し困ったような表情を浮かべていた。

そして数秒たって、こう言った。

「振り分け試験は、昨日あったんだ」

少しの沈黙の後、叔父さんから「引越しが終わってから、1回学校の方に行ってみるといい」と言われたので、荷物を素早く運び終えたあと、文月学園の方に行ってみたが、振り分け試験を受けることは出来ないと言われたので、すぐに叔父さんの家にとんぼ返りすることになってしまった。

後で母親に話を聞いたところ、振り分け試験の日程を教えることまではすっかり忘れ

ていたらしい。

高校2年のクラスはどうやら決まってしまったみたいだ。

## 02 プロローグ2

カヲル side

今日の振り分け試験から1人この文月学園にやってくるらしい。

事前にこの部屋に来るように連絡を入れたはずなんだが、一向に来る気配がない。

「(コンコン) 学園長、高橋ですが」

「入りな」

「失礼します」

「高橋先生、転校生はまだなのかい？」

「はい。どうやらこの振り分け試験を欠席してしまったみたいです」

堂島の奴、しっかり伝えるように言っといたんだがね…。

「じゃあ転校生はFクラスということだ」

「構わないさね。それに、今は試験中だからカンニングする奴がいるといけないからすぐ戻りな」

「はい。失礼しました」

バタン…

「まったく近頃の若い奴は…」

そういいながら一枚の書類をとった。

「鳴上悠…ねえ。問題を起こすような輩じゃなけりやいいんだがね…」

余談だが、もう一人振り分け試験の欠席者がいたらしい。

まあ、そつちはどうでもいいさね。

明久 side

(これが難しいと噂に聞く振り分け試験か…確かに難しい)

僕は振り分け試験の真つ最中だった。

(でもこの程度なら、5問に1問、いや、3問に1問は解ける!!)

流石は雄二!!

はじめは不良にしか見えなかったけど、神童と呼ばれてただけあってとても教え方が上手だ。

この調子なら…。

ガタン…

不意に後ろの席から倒れるような音がした。

テスト中だからよくないけど、後ろを振り向いてみると…

「ひっ、姫路さん!!」

床に倒れている姫路さんがいた。  
顔を見るとうつすら赤みを帯びている。  
おそらく熱があるのだろう。

「大丈夫、姫路さん？」

「はあ、よ、吉井君？」

「吉井、席につけ。姫路、試験中の退席は無得点扱いとなるが、いいかね？」

「はい、構いませ」「ちよつと先生!!体調を崩して退席するだけで0点は酷くないですか？」

「うるさいぞ吉井。観察処分者のお前が生意気なことを言うんじゃない!!」

「せ、先生、私つ、退席します」

「姫路さん……」

「そうか、それならすぐにここから出るように」

この発言には流石の僕も怒った。

「吉井、貴様まで何をやっている？」

「何って、姫路さんを介抱してあげているだけですよ」

「貴様も無得点に「構わないですよ」何？」

「さ、行こう、姫路さん」

「吉井君、すいません…」

担当の教師は止めようとしてたみたいだけど、僕は構わず姫路さんに肩を貸し保健室に向かった。

あくあ、今年はFクラスかあ。

まあ教室出ちやったし、仕方な「おーい、吉井」

後ろから声が聞こえた。

「何やってるの陽介？」

「いや、遅刻しちまつてな。テストうけらんねーしどうするか考えてたところに見えたから呼んだんだよ」

「なるほどね」



何やってるのさ陽介はといたかったが、今はいいや。

「それより早く保健室にいかねーか？姫路もそろそろやばそうだぞ」

「あつ、いけない」

僕たち3人はすぐに保健室へ行つた。

ドアを開けると、すでに先客がいたようだ。

え、先客？

「おつ、天城に里中じゃねーか」

「あれ、花村に吉井君。それと瑞希？どうしたの？」

「どうやら姫路さんが熱を出しちゃつてね。里中さんと天城さんは？」

「こつちもそんな感じ。雪子が熱を出しちゃつたのよ」

「ごめんね、千枝」

「ということは、里中たちも途中退席か」

「そういう陽介は遅刻だけどね」

「そこは別に触れなくてもいいだろ」

「花村は相変わらず運がないわね」

「それ以上俺の心に傷を作らないでくれー!!」

そんな話をしながら姫路さんをベッドに寝かせて、この時間の試験が終わると同時に教室に鞆を取りに行った。

そういえば、雄二たちになんて伝えたらいいんだろう…。

悠 side

1学期の始まる日になった。

今日から転校してきたという形になるので、文月学園の学園長に指示を受けることになっっている。

一回叔父さんの家から行ったかいがあったのか、いつもより早めにでたが何事もなく着きそうだ。

ガシャン!!

「うおっ、いってー!!」

何事もなくという言葉は禁句だったのだろうか。

目の前を自転車を通り過ぎたと思ったらふらついて、電柱に突っ込んで股間を強打したようだ。

「大丈夫か？」

「いや、大丈夫じゃねーよ…」

放っておくわけにもいかないので、電柱に突っ込んで悶絶している彼に声をかけた。彼はついてないといわんばかりの表情で立ち上がった。

首のところにヘッドフォンがあることから、音楽でも聞きながら自転車に乗っていたのだろうか。

「とりあえず、サンキューな」

「俺は声をかけたただけだけどな」

「ん？お前、文月の生徒か？」

「今日からここに転校することになったんだ」

「なるほどな。おっと、自己紹介が遅れたな。俺の名前は花村陽介っていうんだ」

「俺は鳴上悠という。学年は2年だ」

「お、それなら俺と同じだな。じゃあまた学校であおうな!!」

そんな感じで会話は終わった。  
どうやらこれで何事もなく…。

ガシヤン!!

スポツ…

「うわ、つとと、誰か助けてくれ!!」

やはり何事もなくという言葉は禁句なのだろうか。

花村はまた自転車でふらついて、転んだ拍子にゴミ出しのバケツに突っ込んだよう  
だ。

「初めて顔をあわせるのがバケツ脱出じゃなかったただけよかったとおもうぞ、花村」  
「いや、わりいわりい」

とりあえず、彼には運がないようだ。

花村がここを立ち去ってすぐに文月学園に着いたのだが…

「またヘッドフォンを持ってきおって。没収させてもらうぞ」

「やべえ、鉄人の存在忘れてた!!」

「誰が鉄人だ!!西村先生と呼べ」

ゴン!!

「いってー!!」

やはり花村には運がないらしい。

「おはようございます。西村先生でよろしかったでしょうか?」

「ん?ああ、この前来た転校生か。ちよつと待っていてくれないか。花村の不要物をチェックしている」

「そうなんですか、わかりました」

「まっつてくれ、鉄人!!そのウオー○マンだけは!!」

「不要なものを持ってきてきているお前が悪いんだ。しっかり反省しろ!!」

花村は必至に懇願しているが、返却する気配はない。

「それで、西村先生。俺はどこに行けばいいんですか？」

「ああ、それなら花村に案内させよう。それと花村、受け取れ」

「ウォー○マンか？」

「没収されたものを返すわけがないだろう」

「そんな馬鹿な!!」

「答えはクラス分けの結果が乗ってる紙だ」

「そつすか。まあどうせ結果はわかってるんつすけどね」

さらっと花村に案内をさせるつもりみただが、花村は気づいてないようだ。

「つてか、俺が案内するののか？」

いや、気づいていたみたいだ。

「クラスがわかっているのはお前が原因だ花村。それに、短い時間とはいえ、お前からおそらく知り合いだろうか？」

「まあ、そうっすけど」

「それじゃあよろしく頼む、花村」

「わかったぜ、鳴上」



陽介 side

俺と鳴上は学園長室へと向かってるんだが、そんなことより…

「くっそー!!せつかく買ったばかりのウォー○マンとヘッドフォンがあー!!」

学期始めでクラス分けの紙を配ってるのがまさか鉄人だったとは…。

バイト代が水の泡じゃねーか!!

「時期がたてば返ってくるんじゃないのか?学期末とか月末とか…」

「ああ、鳴上は知らねーのか。ここ、没収されたものは返ってこねーんだよ」

「そうなのか…。だからそんなに嘆いてたんだな」

どうするかな、鉄人に殴り込み…は勝てる気がしねーし、隙を見てダツシユ…も鉄人

に隙なんてありやしねーし…。

「何か考え事してるところ悪いが、早く学園長室のほうへ行きたいんだが…」  
「え？あ、わりいな」

どうやら考えすぎて足が止まっていたらしいな。

「こつちだ、ついてきてくれ」

「ああ」

悠 side

俺と花村は今、学園長室の前にいる。

コンコン

「誰さね？」

「本日よりこの学園に転入する鳴上です」

「ああわかった。入んな」

「失礼します（しまゝす）」

「もう一人のほうは呼んだ覚えはないんだが」

「あ、妖がこんなところに!!」

「誰が妖さね!!」

「学園長、彼は案内役でついてきてもらっただけです」

「はあ、まあいいさね」

花村の発言に学園長が呆れている。

「さて、アタシはこの学園長の藤堂カヲルというものさね」

「俺は鳴上悠です」

「俺は花村陽介です」

「なるほど、転校生と驚くほど運が無いガキかい」

「俺は運が悪いで通ってるのか!?!」

「その話はさておき学園長。クラスのことを教えてもらってもいいでしょうか?」

「ああ、そのことさね」

「俺をスルーするな!!」

やっぱり花村には運が無い。

「この封筒にクラス分けの紙と、いろんな書類が入ってる。まあクラスはわかってると思うが、運のないガキと同じさね」

「テストに受けられなかったので仕方ありません」

「…」

「どうした、花村？」

「…なんでもない…」

運が無いという言葉がかなり精神面なダメージになったようだ。

あつた時のようなハツラツさがなくなっていた。

そつとしておこう。

「とりあえず、花村は教室に向かいな。鳴上、アンタはここで担任を待つといい」

「ういーっす」

「はい」

10分後

コンコン…

「福原です。入ってよろしいでしょうか？」

「ああ、入んな」

「失礼します」

入ってきたのは、すこし冴えない風貌の男性だった。

「初めまして、鳴上君。私はFクラス担任の福原慎です」

「鳴上悠です。1年間よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします。それでは鳴上君。私についてきてください」

「はい。失礼しました、学園長」

「さて、鳴上君はここで待っていてください」

福原先生に指示されたところは廊下だった。

いや、ただの廊下ならいい。

そこは、山小屋に近い何かの前だった。

しかしプレートを見ると真ん中で折れた木のプレートに2―Eと書かれている上から紙でFと貼ってある。

どうやらここが教室みたいだ。

「鳴上君、入ってください」

先生に呼ばれて教室に入る。

「それでは鳴上君、自己紹介をお願いします」

「はい。今日からこの学校に転校してきた鳴上悠だ。一年間だがよろしく頼む」

「ありがとうございます。それでは、その空いている席へお願いします」

指示を受け、その席へと向かう。

「それでは、ほかの方も自己紹介をお願いします」

## 05

## 悠 side

転校してきたばかりで自己紹介をされても誰が何を言おうがどうでもよかったので、適当に聞き流すことにしたが、聞き流していても印象に残ったものをいくつかあげてみる。

「木下秀吉じや。演劇部に所属しておる」

「こゝまではいたつて普通だ。

しかし…。

「「秀吉!!付き合ってください!!」」

「ワシは男じゃ!!」

「「なあにー!!」」



この部分が大きく印象に残った。

確かに容姿は女子に近いとはいえ、服装を見ればわかるだろう。

「…土屋康太。趣味は盗s…なんでもない。特技は盗c…なんでもない」

なんでもなくない発言をしていた小柄な男子。

犯罪一歩手前、いや、間違いなく犯罪だろうことを日常的にやっているのだろうか？

「島田美波です。1年の時にドイツから帰ってきたので、日本語の読み書きが苦手です。趣味は…」

「…(ま)までは(く)く平凡だ。

「吉井明久を殴ることです」

冗談なのか本気なのか、バイオレンス宣言をしている女子がいた。  
近くの男子の顔を見ると少し苦笑いをしていた。  
おそらく彼が吉井なのだろう。

「花村陽介だ。趣味は音楽を聴くことや自転車に乗ることだ」

いたってシンプルな自己紹介だっただろう。

あの朝の出来事さえ知らなければの話だが。

「それと、ここの近くのジュネスっていう店でバイトしてるんで、よかつたらきてくれよ  
!!」

店の宣伝までしていた。

今度行ってみようか。

「吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでください」

おそらくボケたんだろう。

「「「「ダーリーーーン!!!」」」」

しかしそれで済まないのがこのクラスなのだろう。

野太い声の大合唱を生で聞いてしまった。

「失礼、忘れてください」

吉井もまた、気分を悪そうにしていた。

「それでは、最後n」「すいません、遅れました」「ちようどいいですね。今自己紹介を  
していたので、皆さんもよろしくお願いします。」

「はい、姫路瑞希です」

「天城雪子です」

「里中千枝です」

「「よろしくお願ひします」」

三人仲良く遅刻してきた。

そして三人同時に自己紹介をした。

「質問です。どうしてここにいらっしゃるんですか？」

もう少し質問の仕方を工夫しないと人を平然と傷つけそうな発言をした男子は今は放っておくことにしよう。

「えっと、その、試験中に熱が出てしまいました…」

「私も同じです」

「私は雪子の介抱をしてたので」

どうやら彼女たちは理由があつてこのクラスに来たようだ。

そのあと、花村達が話しているのを注意して教卓をたたくとなぜか粉碎されたり、よく見たらチョークがなかつたりと、この教室の設備に少しおどろいていた。

「それでは最後に坂本君。君は代表でしたね。自己紹介をお願いします」

代表といえども形だけ、どうせシンプルに終わるだろうと思つていた。

「さて、皆に一つ聞きたい。このかび臭い教室、汚れた上に綿すらろくにない座布団、ところどころがたの来てる卓袱台。Aクラスは冷暖房完備、椅子もリクライニングシートらしいが…

不満はないか？」

「「「大有りじゃあぁーっ!!」」」

まさか二回も野太い叫び声があると思わなかった。

「そこでだ、これは代表としての意見だが、FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

このクラスの代表はなにか動くらしい。

## 06 キャラ設定

はじめに

この小説のテスト、召喚獣について

現代国語

古典

数学

化学

物理

生物

地学

日本史

世界史

現代社会

地理

英語

保健体育

この13教科を基本教科とし

音楽

美術

情報

家庭科

この4教科を特殊教科とする（あくまで予定）

単教科400点、基本教科総合5200点、全教科6800点を超えると腕輪を使用  
 することができるとする。

クラス概算

A	2	9	0	0	〽
B	2	0	0	0	〽
C	1	6	0	0	〽
D	1	2	0	0	〽
E	9	0	0	〽	1
F	8	9	9	〽	8



P4 キャラ

鳴上悠

両親が海外に転勤になってしまったため、文月市にいる母方の叔父の堂島遼太郎のところ引越してきた。

この小説では、少し積極性があるようにするつもり。

今は菜々子とはあまりかかわりがないが、いずれ…。

明久と親戚同士なのだが、お互いそのことを知らない。

得意不得意なく点数も完璧

召喚獣

武器 太刀（長巻）

防具 膝辺りまである黒いジャケット、黒いズボン

花村陽介

「ジュネス文月店」店長の息子。

悠の半年前に父親の転勤で引越して文月市にきた。

誰でも分け隔てなく接する面倒見の良い性格を持っているが、発言に遠慮がないため、あまり好印象を持たれない。

そしてとにかく運が悪い。

勉強は面倒くさがつてあまりやるそぶりは見せないが頭の回転が速いため、勉強すれば点数は上がる。

得意

現代国語

日本史

世界史

苦手

数学

召喚獣

武器 クナイ2本

防具 胸に黄色のV字の装飾、裾の先が迷彩模様の白い服、迷彩柄の手袋、赤いマフラー

里中千枝

カンフー映画が大好きで、実践的な足技を繰り出す（足技を放つ時点で実践すべきでない）身軽な少女。

雪子とは昔から親友である。

普段は緑のジャージを着用している。

強気な性格とは裏腹に、雷や虫、幽霊が大の苦手。

料理は壊滅的である。

得意

現代国語

保健体育

苦手

英語

生物

数学

家庭科

召喚獣

武器 両薙刀

防具 黄色に黒のラインが入ったタイツ、腰から下は鎧

天城雪子

老舗高級旅館「天城屋旅館」の一人娘で次期女将。

普段は赤色の服を好んで着用している。

大和撫子という言葉をそのままにしたような外見をしているのでよく告白されるが、すべて断っているため、文月学園で雪子を口説き落とすことは「天城越え」と呼ばれている。

千枝と同じく料理は壊滅的（それでいいのか次期女将!!）

千枝と親友である。

また、翔子と家柄つながりで関係がある。

得意

ほとんど

苦手

家庭科

召喚獣

武器 鉄扇子

防具 浴衣姿、桜の模様に近い長い鎧が両手首に繋がっている、また、その鎧でも攻

撃可能

バカテスキャラ

はじめに

バカテスキャラの召喚獣は基本的に変更しません

腕輪のみ後日追記

吉井明久

雄二から勉強を手伝ってもらったため、原作より頭がよくなっているが、少し抜けているため、時々バカな発言をする。

自らを犠牲にして他人を救うほどのやさしさを持つ。

FFF団に入っていない。

悠と親戚同士であるが、お互いそのことを知らない。

得意

日本史

世界史

家庭科

苦手

古典

数学

坂本雄二

神童としての実力は残っている。

Fクラス阻止のために明久たちに勉強を教えていたが、明久が途中退席したこと、また、自分自身やりたいこともあり、Fクラス代表まで点を落とした。

また、康太や秀吉も誘ったため、この2人もFクラス程度に点数を抑えた。

翔子に対して好意はあるが、事情もあり距離をとっている。

原作に比べて明久への態度が軟化している。

得意

数学

家庭科

苦手

特になし

土屋康太

盗撮、盗聴は控えるようになったが、それでもよくやっている。

しかし、裏工作を阻止するために使っているだけである。

ムツツリ商会の販売は、学校と販売する写真の人物に許可を取っている。

原作より勉強はできるが、得意と苦手の差が激しい。

得意

保健体育

情報

生物

家庭科

苦手

それ以外

木下秀吉

原作より少し男らしくなっているため、男として見られるようになってきた（FFF団を除く）。

それでも演劇の際に女装をすることがあるので、混乱する人はいる。

康太と同じく勉強はできるが、得意と苦手の差がある。

得意

古典

現代国語

日本史

音楽

美術

苦手

数学

化学

物理

姫路瑞希

明久に対しての攻撃が緩和（ほぼない）している。

しかし、必殺料理人は健在である。

振り分け試験中に明久に助けてもらって、改めて好意を抱く。

得意

数学

苦手

化学

物理



家庭科

島田美波

明久に対して攻撃はするが、原作より少なめ。

攻撃するときは千枝とのコンビネーションがすごいらしい…。

原作より頭はよくなったが、やはり日本語になれなく、現代国語や古典が壊滅的に苦手である。

得意

数学

苦手

現代国語

古典

## 07

陽介 side

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

おつ、坂本のやつ高らかに宣言したな。

ただ、DやEならともかく、Aとなると…

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて御免だ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

「天城さん、付き合ってください!!」

ほらこんな始末だ。

つてか最後のラブコール何だよ!!

混乱に乗じて天城越えでもしようとしてんのか？

「そんなことはないぞ。必ず勝てる」

「何を馬鹿なことを」

「出来るわけがない」

「何の根拠があつて…」

確かにその意見には賛成だな。

坂本、こんなクラスでなんでそんなに自信があるんだ？

「根拠か？それならもちろんあるさ。今から説明してやるからおとなしくしてろ」

いきなりすぎていまいち信用できんが、坂本のことだ。きっと何かある。

おとなしく聞いてみるか。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路と天城のスカートを覗いてないでこっちにこい」

「…!! (ブンブン)」

「は、はわっ」

「えっ？」

相変わらず変わんねーな、土屋。

つと、畳の跡が残ってるな。もしかしてずっと見てたのか？

少しはそういうのなくなったと思っただんだが…。

「土屋康太。これだけだと誰のことかわからないだろう」

確かに、土屋って聞いても誰もパツとしないだろうな。

有名な二つ名を持っているが。

「こいつはあの有名な寡黙<sup>ムツ</sup>なる性識<sup>リ</sup>者<sup>ニ</sup>だ」

「…!! (ブンブン)」

もともと無口な上に平気で盗撮をしてたからな。

今は許可もとってるみたいだし、盗撮とかは控えるようになったらしいが、でもさ土

屋、その行動は誤解を受けるからな？

「ムツツリーニだと…」

「馬鹿な、こんなところにいるとは…」

「姫路や天城のことは説明する必要もないだろう」

「えっ、わ、私ですか？」

「私もなの、坂本君？」

「ああ、このクラスのツートップだからな。期待してるぞ」

確かに姫路も天城も学年で一ケタに入れるくらいの実力を持つてるからな。  
イレギュラーとはいえ、とんでもない顔ぶれだよな。

「そうだ。俺たちには姫路さんと天城さんが」

「彼女たちならAクラスにも引けをとらないぞ」

「ああ、姫路さんさえいれば誰もいらさない」

「天城さん付き合ってください!!」

やっぱりこうなるのかFクラス。

相変わらずラブコールしてるやつもいるな、つてか同じやつかよ!!

「木下秀吉や島田美波、里中千枝だっている。こいつらは単教科のみだが突出して高いはずだ」

たしか、秀吉は古典と現代国語、島田は数学、里中は現代国語と保健体育だったか？よくこんな人物が集まったもんだな。

「当然俺も全力を尽くす所存だ」

坂本も何かと頭が回る。

小学では神童と呼ばれ、今もその実力は健在だな。

こういう形の説明でさえ士気を上げる統率力もあいつならではだからな。いい感じで士気が上がってきたじゃねえか。

「それに、吉井明久、花村陽介だっている」

——シン……。

「ちよつと待てい!!」

流石に声を上げた。せつかく上げてた士気をなげ下げるようなことをすんだよ、あい  
つは!!

「僕たちを呼ぶ必要なんかないよね、雄二?」

「なんで俺たちをオチ扱いにすんだ、坂本!!」

「誰だ、吉井明久って」

「花村ってやつも知らないぞ」

少しずつ士気が下がりはじめてやがる。

俺や吉井のせいではなく、坂本のせいなんだが、何か理由でもあるのか?

「知らないなら教えてやる。こいつらの肩書きは『観察処分者』だ」

これいう必要あったか？

こんな調子でどうやって士気を上げる？

「…それって、バカの代名詞だったよな？」

「確かにそう言われてるが、こいつらは事情があつて観察処分者なんだ」

一応救済はしてくれるんだな…。

「あの、坂本君。その観察処分者っていったいどういうものなんですか？」

「簡単に言うと教師の雑用係だな。時々呼び出しが来てその度に召喚獣を操作して雑用してるんだ」

「でも、召喚獣って物に触れないんじや…」

「たしかに里中の言う通りだ。しかし、それが可能なのが観察処分者だ。さらに言うと、こいつらはその雑用のおかげで召喚獣の操作がとても上手い」

そこに関しては少しばかり感謝してるな。



「おい、明久に陽介、今まででどのくらい召喚獣を操作したか覚えてるか？」

「えーっと、100はこえてると思うよ」

「俺もそのくらいか？」

「このように、ほかのだれよりも召喚獣を使っている分、誰よりも召喚獣を操ることができてる」

俺と吉井の唯一の利点だな。

まあ問題があるとすれば。

「フィードバックがなくなれば最高なんだけどね…」

そう、フィードバックなんだよ。

まあ逆にこれのおかげで雑用もできるし、操作しやすいんだけどな。

「ということは、そう簡単に召喚獣とやらを出すこともできないんじゃないのか？」

「そうでもないぞ、鳴上。疲れは感じるだろうが、操作性が上回っている分、回避行動も

うまく取れるだろう。そうすれば攻撃だってあまり受けずに済むはずさ」

「なるほどな。参考になった。ありがとう、坂本」

「ああ。まあとにかくだ、まずは力の証明としてDクラスを征服するつもりだ」

なるほど、ここから最高潮まで持っていていくつもりなんだな。

「この境遇は大いに不満だろう？」

「「「当然だ!!」」」

「ならば全員筆<sup>ペン</sup>を執れ!!」

「「「おおーっ!!」」」

「俺たちに必要なのは卓袱台なんかじゃない。Aクラスにあるシステムデスクだ!!」

「「「うおおーっ!!」」」

「お、おー…」

「えっと、おー？」

「おーー!!」

姫路と天城はなんか対応に困ってたな、里中、なんでお前はノリノリなんだよ。

まあ、こうして火ぶたは落とされたってわけか。  
これからどうなるか楽しみだぜ!!

## 08

## 悠 side

「さてと、Dクラスへの使者なんだが、だれにするか…」

Dクラスに対して試験召喚戦争というのを仕掛けることは決まったが、どうも坂本は何か考えているようだ。

「よし、それじゃあ明久と陽介。お前ら2人に任せていいか？」

「別にいいけど、下位勢力の使者つてひどい目にあうって聞いたことがあるんだけど」

「大丈夫だ。と言いたいが、正直心配だ。だからお前らなんだがな」

「どういふことだ、坂本？」

「お前らなら襲われても問題ないだろ？」

「それならほかの人たちでも問題ない人はいるんじゃない？」

「いや、有名な人物はできる限り隠しておきたい。それに、ほかの男どもは使者すらまと

もにできないだろう」

結構辛辣だな、坂本。このクラスのほとんどの男子から一気に殺気が出たぞ。

「それじゃ仕方ねーな。いくぞ、吉井」

「あつ、待つてよ陽介」

花村と、それを追うように出ていく吉井。彼らは大丈夫だろうか？

明久 side

はあく、とんだ貧乏くじだよ。

なんで僕たちが行かなくちやいけないのさ。

「ため息ばかりついてても仕方ねーよ、吉井」

「いや、了承する気はあまりなかったけど、陽介の発言も一つの原因だからね」

「ん、俺なんか言つたっけ？」

「いや、忘れてるならいいや」

もうどうでもよくなつてきちやつたし、手つ取り早く済ませちやうのが得策だよな。

「それじゃ、俺から入るぜ。失礼しまゝす」

「えっと、失礼します」

「[[[「えっ?」]]」

まあ、そりや驚くよね。いきなり教室に違うクラスの人が来たら。

「このクラスの代表はどこだ？」

「それなら俺だ。吉井、花村」

「あれ、平賀君なんだ。久しぶりだね」

「そうだな。もともとクラスも違つたし、話す機会だつて少なかったから仕方ないさ」

「それで平賀、俺らが来た理由は察してゐるだろ？」

「ああ。大方試験召喚戦争の宣戦布告じゃないか？」

Dクラスの代表が平賀君でよかった。これなら何事もなく帰れるかな。

「まあ、形だけでも言うべきだよね？」

「そうだな。それじゃ…」

「我々FクラスはDクラスに宣戦布告をする!!」

「時間はいつからだい？」

「今日の午後だな」

「まあ、俺たちは受けざるを得ないからな。了承した」

よし、これで帰れr…

「何言ってるんだあいつら!!」

「Fクラスの分際で、馬鹿にしゃがって!!」

「鎮まれ、お前たち!!」

すんなり帰れないか…。

平賀君、なんかごめんね…。

「つていうかこいつら確か観察処分者だよな？」

「そういえばそうだったな」

「んじやこいつらに何しても問題ないだろ？」

問題大有りだよ。ただの暴力行為じゃん。

「んじや俺たちもう行くわ」

それをどうでもいいという感じで出ようとする陽介もすごい…つて!!

「陽介、危ない!!」

「ん？」

「おらっ!!」

「よっと」

「え？」



背後からDクラスの人が物理的攻撃を仕掛けてきたのに軽々躲した。

「ほくらよつと!!」

「うわあ!!」

そして放り投げた。

なんだろう、憂さ晴らしにしか見えないのは僕だけ？

「まったく、里中のお陰で上手く躲せたぜ」

なんだろう、その発言にはいろんな意味がありそうだね…。

「なあ、平賀」

「なんだ、花村？」

「正当防衛ってことでもいいか？」

「ああ。防ぎきれなくて済まない」

「別に気にするなよ、お前が謝る必要無いしな。それじゃ吉井、行くぞ」  
「あ、うん。失礼しました」

少し騒ぎが起こっちゃったけど、大丈夫かな？

雄二 side

しばらくすると、明久たちが戻ってきた。  
やっぱりあいつらに任せて正解だったようだな。

「どうだった、Dクラスは？」

「襲われたことを除きや何の問題もなかったぞ」

「やっぱり襲われたか」

「それと、Dクラス代表は平賀君だったよ」

「なるほど、そこは思わぬ落とし穴だな」

まさか代表が平賀とは。下手したら明久と陽介の戦力の大きさを知っているかもし

れないな。

「まあ何はともあれよくやった。それじゃ、これから屋上にでも行ってミーティングをするぞ。メンバーは俺の言った戦力メンバーと鳴上だ」

「俺もか？」

「ああ。まだここに来たばかりでお前のことをあまり知らないからな。それに、召喚獣や戦争のことも教えておくべきだろう」

「それは助かるな」

「それじゃすぐに向かうぞ」

## 09

悠 side

「そういえば鳴上、お前テスト受けられなかったんだよな？」

階段を登っている最中、花村は俺に質問をしてきた。

「そうだな。それがどうかしたか？」

「いや、ここって点数で召喚獣の強さが決まるから、ちよつと気になってな」

「そう言われても、自分の実力は自分ではあまりわからないから何とも言えないな」

「そうか」

「それに、ここの採点方法は他と違うみたいだから余計にわからない」

「そりやそうか。つと、そろそろ屋上だな」

陽介 side

「それじゃ、ミーティングを始めるとするか」

「なあ坂本。一つ質問していいか？」

「なんだ、花村？」

「なんで最初に攻めるのがDクラスなんだ？順を追うならEだろ？」

「そのことか。簡単に言ってしまうえば、Eクラスは戦うまでもない」

「なるほど」

「鳴上はなんかわかったのか？」

「簡単な予想だが、さっきの根拠に意味があるんだろう。単教科突出している人、事情があつてFクラスに入った人、誰よりも召喚獣をコントロールしている人がいるんだ。だからEクラスと戦う意味はないつてことであつてるか、坂本？」

「流石だな。まさにその通りだ」

へえ。鳴上つて坂本と同じくらい頭が回るんだな。

「坂本君、少し問題がないかな？」

「どうした、天城」

「確かに坂本君や鳴上君は正しいかもしれないけど、さつき挙げた人たちの半数以上は今点数を持ってないわよ」

「そういえばそうだな。」

吉井、姫路、天城、里中、それと俺もか。

途中退席やらで今の点数は0だったな。

「そういえばそうだったな。まあ、問題はない。点数のない奴は試召戦争がはじまったらすぐに点数の補給をしてもらおう。ほかの人たちは前線に出てもらう。まあ、補給にもあまり時間は取れないから注意しなきゃだな」

「それに、さつきの口ぶりからしてDクラスと対戦するのは……」

「ああ、正直確実に勝てるとは言えないな」

「一応考えてはいるんだな」

「陽介、俺だつて何も考えずにことを進めるつもりはない。それに、初陣だしな。いい感じの景気づけにもなるだろ?」

「たしかにそうだな」

「しかし雄二よ。ほかにも問題が無かろうか?代表は平賀だったのであろう?」

「それに関しちや今は大丈夫だ。運がいいことに面が割れているのは明久と陽介だからな。おそらく代表だから俺も割れているだろうが、ほかのやつらは大丈夫だろう」

それに関しては不幸中の幸いだな。

「ただし、知り合いではあるからな。観察処分者だつてことは知っているだろうし、その利点もわかつているはずだ。平賀がDクラスにこのことを伝えていれば、明久たちにとつてかなりの強敵になるだろう」

「こればかりは坂本も想定外だつたんじゃねーか？」

「確かにちよつとした誤算だな。まあ、その程度じゃ狂うことはない。いいか、このクラスは——

——最強だ」

何だろうな。

単純な言葉を聞いたただけだが、そんな気がしてくる。

「いいわね。面白そうじゃない」

「ワシも役に立てればいいがの」

「…きつと勝てる」

「勝てるといいですね」

「きつといけるよね!!」

「俺もやってやるかな」

「大丈夫かな、千枝？」

「きつと大丈夫でしょ、雪子」

「俺もできる限り善処しよう」

俺も含めてみんなが意気込んだのを確認し、坂本が口を開けた。

「それじゃ作戦といこう……つとその前にだ。鳴上に試召戦争とかについて説明しなくちゃだな。」

「すまない、よろしく頼む」

「まずは……」



とまあこんな感じでミーティングは進んでいった。  
午後からはDクラス戦か。

まあ、坂本の言うこと信じてやってみるかな。

## 10 Dクラス戦1

悠 side

屋上で一通り説明を受け、ミーティングも終わり、開戦の時間となった。俺は点数が無いため、Fクラスでテストを受けていたんだが…。

「さあ来い！この負け犬が！」

「いやだ、補修はいやだ!!」

「黙らんか！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補修室だ！たつぷりと指導してやろう」  
「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問は…」

「拷問だと？そんなことはしない。これは立派な教育だ。終わるころには趣味は勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう」

「そ、それは教育じゃなくて洗脳…」

「口答えをするな。さあ、補修だ!!」

「イヤアアア!!」

廊下でそんな会話が聞こえた。

なんだろうか、試験召喚戦争とは恐ろしいものだ。

今廊下には木下、島田、その他Fクラスメンバーがいる。

前衛部隊は木下、中堅部隊は島田が部隊長をしているらしい。

土屋は諜報に回っているらしい。

なんで諜報？

「前衛より伝令!!」

どうやら前衛からの使者みたいだ。

「何とか持ちこたえられているが、徐々に戦力が落ちている。どうすればいい?」

「そうだな、前衛は中堅と交代。中堅には……………」と伝える」

「了解した」

そういうと使者は部隊に戻っていき、十数秒後…

「全員突撃よ!!」

「「うおお——!!」」

一気に謎の士気が上がっていた。

「ねえ、雄二」

「なんだ、明久」

「ものすごい士気だけど、なんて言ったの？」

テストを一時的に終わらせていた吉井は坂本に質問していた。

「それなら、逃げたらクロスって伝えたんだ」

「そ、そうなんだ…」

攻めて戦死しても逃げ帰っても幸福がないってことは、戦場に赴いて相手を蹴散らす

しか策はなさそうだ。

そんなことを考えていると木下が戻ってきた。

「どうした、秀吉？」

「点数がかなり厳しくなっちゃってしまつての。点数の補給じゃ」

「そうなんだ、お疲れ様、秀吉」

「うむ」

「それじゃ、そろそろ俺たちも出るぞ、吉井」

「そうだね。陽介」

「えっ、吉井君たち、もうテスト終わったんですか？」

姫路がテストの回答の早さに驚いていた。

「うん。点数を少しずつとただけだからね」

「俺たちは観察処分者だ。他人からバカだつて思われてるからこのほうが都合がいいんだよ」

「そうなんですか…」

「…通達」

「うおわっ!!」

天井裏から土屋が出てきた。

諜報活動は天井裏からやっていたのか。

花村の真上から出たせいか、花村は尻餅をついていた。

「…相手は数学と化学でまとめている状況」

「了解した。助かった、康太」

「それなら俺も行こう」

「鳴上くんまで行くの?」

今度は吉井が質問してきた。

「ちようど数学と化学は採点が終わった。時間が短かったのと、召喚獣の操作は初めてだが、いないよりはいいんじゃないか?」

「それなら鳴上も頼む。3人とも頼むぞ」

「「ああ（うん）（おう）!!」」

陽介 side

廊下に出て少し経つと、中堅、前衛混合の部隊がDクラスと対峙していた。

「吉井、フィールドはわかるか？」

「えーつと、布施先生だから化学だね」

「鳴上、操作の仕方は大丈夫か？」

「教えてもらったただけだから何とも言えないな。まあ、大丈夫だ」

Dクラスが向かってくる。

あつちも3人みみたいだ。

「Fクラスから増援だ!!」

「あつ、あいつら2人は宣戦布告してきた観察処分者じゃないか」

「あと一人は知らないな」

「一応あの2人は代表曰く要注意人物らしいが…」

「どうせ気のせいだろ」

「あと一人もFクラスなんだからどうせ俺たちには敵わないだろうぜ」

流石は観察処分者とFクラスのレッテル。

言われ方が尋常じゃないな。

「Fクラス花村陽介」

「同じくFクラス吉井明久」

「Fクラス鳴上悠」

「Dクラスの彼らに勝負を挑む!!」

「承認します!!」

「やるぞ、お前ら!!」

「おう!!」

「試験召喚獣、サモン召喚!!」



そう唱えると、俺たちの周りを魔法陣みたいなものが取り囲み、俺たちをデフォルメした召喚獣が現れた。

鳴上の召喚獣は、長巻のような太刀を持っていて、膝辺りまである黒いジャケット、ズボンを着ている。

そこまではよかつたんだ。

「なんでこんなに軽装なんだあ!!」

吉井の召喚獣は改造学ランに木刀、俺の召喚獣は胸に黄色のV字の装飾、裾の先が迷彩模様 of 白い服に同じく迷彩柄の手袋、赤いマフラー、手にはクナイが2本。

そして、どちらも服の厚さは無かった。

「ほらみる、やつぱり観察処分者はこんなもんじゃないか」

「なんで代表はこいつらを要注意になんてしたんだ?」

「一気に畳みかけて倒してやる」

おっと、点数が出たようだ。

Fクラス 花村陽介

化学 33点

Fクラス 吉井明久 Dクラス モブA〜C

化学 27点 VS 化学 平均97点

Fクラス 鳴上悠

化学 196点

「「なんだ、あの点数は!!」」

「30分だとこのくらいか」

「やるじゃねえか、鳴上!!」

30分でこの点数だと、60分テスト受けると400も出せるんじゃないか？  
だとするとかなりの切り札じゃないか!!

「一人一殺だ、行くぞ!!」

「「うん（ああ）」」

「怯むな、俺たちも行くぞ」

「おう!!」

俺の相手はつと、モブAか。

よく見たらさつき襲ってきたやつだな。

「さつきの宣戦布告の時はよくも…」

「お前が勝手に襲ってきただけだろ?」

「問答無用!!覚悟!!」

そう言いながら、刀を突き出してくる。

「よつと」

「え?」

とりあえず躲し、

「ほくらよつと!!」

「うわあ!!」

放り投げた。

あれ、さつきもこんなことなかったか？

「よくもまた同じことを…」

「単純な動きはわかりやすいつてことよ」

「次こそは…」

今度は刀を振り下ろしてきた。

俺は召喚獣をわずかに横に横にずらし、すかさず背後に回り込み、首に向かつて一閃した。召喚獣も結局のところ、弱点は人間と同じみたいだから、相手の召喚獣はいなくなつた。

周りを見ると、ほか二人も終わったみたいだな。

Fクラス 花村陽介

化学 33点

Fクラス	吉井明久	Dクラス	モブAとC	
化学	27点	V S	化学	戦死
Fクラス	鳴上悠			
化学	178点			

鳴上は若干点数を削られたみたいだが、問題はなさそうだ。

「戦死者は補修!!」

「助けてえええ——!!」

こうならねえように気をつけねえとな…。

## 1 1 Dクラス戦2

悠 side

さっきの3人を倒して少し進むと、中堅部隊と合流した。

簡単に見た限りだとFクラスが不利な状況だ。

少し押され始めている。

部隊長の島田は…

「嫌あつ!!補修室は嫌あつ!!」

「補修室?…フフツ、お姉さま、この時間なら保健室には誰もいません!!ベッドも空いているはずです!!」

「それはもつと嫌あつ!!」

島田をお姉さまと慕って、ベッドに連れ込もうとしている百合の女子と一緒にいた。部隊長だからここから連れていかれるとまづいな。

「島田、勝手だがフォローしに来た」

「え？」

「殺します…。美春とお姉さまの邪魔をする人は、皆殺しです…」

フォローしに入ってよかったのだろうか？

入ると同時に真っ黒い感情を真正面から浴びた。

「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚!!」

Fクラス 鳴上悠 VS Dクラス 清水美春

化学 178点 VS 化学 41点

おそらく島田との戦闘で点数が減っていたんだろう。  
簡単に刀を振ったが、すぐに倒すことができた。

「助かったわ、鳴上。アンタって頭いいのね」

「いや、そうでもないんじゃないか？」

「戦死者は補修!! たつぷりと勉強漬けにしてやるから覚悟しろ!!」

「お、お姉さま!! 美春は諦めませんから!! このまま無事に卒業できるなんて思わないでくださいね!!」

何とも危険な捨て台詞だ。

もし補修室に連れていかれたら島田はかなり危ないな。

「島田、点数を消費しただろうから補給して来い」

「え、でも、ウチは部隊長だし…」

「それなら違う人に指揮を任せる。それに、補修室に運ばれたらさっきの女子か」 「すぐに点数を補給してくるわ!!」

そういうとすぐに教室へと向かった。

「鳴上、お疲れさん!!」

「操作に慣れておきたかったからな。結局力任せに振っただけだったけどな」



「でも、だれが部隊長をやる？」

「そこは吉井か花村じゃないか？」

「なんで（だ）？」

「二人とも操作技術があるからな」

「関係ないよ（だろ）!!」

なんでそんなにハモるんだ…。

「いや、この部隊で一番生き残れそうな人を部隊長にして、的確な指示をするべきだと思うんだ」

「だったら鳴上君でも…」

「いや、俺は数教科しか点がないから、違う教科に移った時に困る」

「なるほどな、そんなじゃ、俺に任せとけ!!」

「え、陽介がやってくれるの？」

「そういうのやってみたかったからな」

「じゃあ、花村、部隊長は頼んだ」

「おうよ!!」

さて、花村の指示を…。

「野郎ども、突撃だ!!」

「うおおおー!!」

どこが的確な指示なんだろう…。

「なんだ？突然士気が上がったぞ!!」

「押されそうだ、助けてくれ!!」

いや、的確な指示だったようだ…。

この指示でなぜか戦力が均衡になったようだ。

「花村、一回教室に戻る」

「どうした、鳴上？」

「ほかの教科の点の補充をしたい」

「了解、部隊は任せろ!!」

さてと、他のテスト組はどうなっただろうか。

千枝 side

初めてのあたし視点ね。

ってそんなことはいいか。

さつき、美波ちゃんが戻って来て、戦況は芳しくないっていつてたっけ。

点数を補充しに来たってことは、召喚獣を使ったってことだよな？

そろそろあたしも召喚獣出したいなあ。

「坂本くん、ある程度だけ補充終わったよ」

「どんな感じだ？」

「得意教科はとれるだけとって、それ以外はある程度かな」

「わかった。それじゃ行ってくれ。少し進むと明久たちと合流するはずだ」

「OK。それじゃあ行ってくるね、雪子」

「気を付けてね、千枝。点が補充できたらすぐに向かうから」  
「うん!!」

やっとあたしの出番ね。

Dクラスなんかには負けないよ!!

陽介 side

「陽介、戦況はどんな感じ?」

「何とか五分五分だな」

突撃の指示をしたはいいが、今は均衡を保つのがやつとの戦力だからな。  
うかつに動けない。

そういえば、先生が大島先生に、教科も保健体育に変わったな。

お互いの男子の点が上がったかのように見えたのは錯覚か?

「花村!!補充終わったよ」

「おつ、里中か。今は保健体育だが、いけるか？」

「大丈夫。あたしに任せて？大島先生!!」

「承認する!!」

「試獣<sup>サモ</sup>召喚!!」

Fクラス 里中千枝 VS Dクラス モブD

保健体育 273点 VS 保健体育 89点

「なによ、あの点数は!!」

「やるじゃねーか、里中!!」

「ちよつとは戦力にならないとね」

千枝 side

さて、召喚獣の確認ね。

あたしの召喚獣は武器が両薙刀、黄色に黒いラインの入ったタイツ、腰から下には鎧みたいなものを装備してる。

変わった装備ね…。

「まずは少し操作に慣れないとね」

相手が剣で攻撃したのを薙刀を使ってつばぜり合いみたいな感じにする。  
点数のおかげでうまくはじき返せるからね。

「隙だらけよ!!」

はじいたところを薙刀…ではなく一発蹴りを入れた。  
うん、こつちの方があたらしい気がする。

Fクラス	里中千枝	VS	Dクラス	モブD
保健体育	273点	VS	保健体育	戦死

蹴りの一撃で一気に点数を削っちゃったみたいね。

「戦死者は補修!!」

「いやあああ!!」

そして鉄人が拉致していく。  
補修、頑張ってね…。

## 12 Dクラス戦3

明久 side

里中さんが来てくれたことで一時的に均衡を破ってくれたんだけど、まだ相手の戦力がすごい。

「大変だ!!」

「どうしたの、須川君？」

「Dクラスの奴ら、数学の木内と船越を呼んでいるらしい」  
「なんだと!!」

木内先生は採点が早い。

船越先生はフィールドの展開のためかな。

「陽介、何かいい方法ないかな？」



「なら、偽情報でどうだ？」

「偽情報？」

「ああ。偽情報を使って錯乱させるんだ。それも、対象はDクラスじゃなくて先生だ」

「なるほど、ほかの場所に向かうように呼びかけるんだね」

「ああ」

「よし、それなら俺に任せろ」

「ん？須川君がやってくれるの？」

「ああ。流す偽情報とかは何となく思いついてるからな」

「わかった。それじゃあ頼んだぜ」

「任せとけ!!」

そういうとすぐに走って行った。

少しだけ不安な気がするのは気のせいかな？

陽介 side

須川がどこかに行ってから少し経った。押してた戦力はまた拮抗した状態へと戻っていた。

ピンポンパンポーン『連絡いたします』

おつ、これは須川の声だな。

放送室を使うとは思わなかったが、いい方法じゃねえか。

『船越先生、船越先生。吉井明久君と花村陽介君が体育館裏で待っています』

…ん？空耳か？

『もう一度繰り返します。船越先生、吉井明久君と花村陽介君が体育館裏で待っています』

…え、マジかよ。

『なんでも、生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

さりげなく隣を見てみる。

吉井の顔がまるで血の気が引いたかのように真っ白だ。

「なあ、吉井…」

「なに、陽介…」

「俺たちって、運悪くねえか？」

「奇遇だね、僕も同じことを考えてたんだ」

船越先生（四十五歳♀独身）、たしか、仕事に熱心になりすぎたせいで婚期を逃し、単位を盾に交際を迫ってるって話だったな。

「んじや、せつかく息もあつたことだし、一緒に叫ぼうぜ」

「そうだね、陽介。それじゃ…」

「須川あああー！！」

おいおい、どうすりゃいいんだ？

何か打開策が…

『再び繰りk（ビリビリ）ぎゃああああ!!』

ん？なにがあつた？

『…先ほどの放送を訂正します』

この声は、土屋か？

『船越先生、先ほどの放送はこの生徒の照れ隠しです。至急放送室に来て、彼の気持ちを受け止めてあげてください』

「た、助かったぜ…」

「一回人生の墓場を想像しちゃった…」

雄二 side

さてと、戦況の確認だな。

いまだ廊下ではかなりの接戦になっているらしい。

「姫路と天城はあとのくらいで終わるだろうか？」

そんなことを考えていると、

ピンポンパンポーン 『連絡いたします』

なんだ？突然放送が、戦況が危うくて放送を使ったのか。

なかなか…

『船越先生、船越先生。吉井明久君と花村陽介君が体育館裏で待っています』

は？

いや、聞き間違いだろう。

『もう一度繰り返します。船越先生、吉井明久君と花村陽介君が体育館裏で待っています』

聞き間違いではないらしいな。

それにしても、どうにやって焚き付けるんだ？

『なんでも、生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

いや、さすがにまずいだろう。

でも、明久たちの指示か？

それならいいが…

「須川あああ——！！」

勝手に言ったらしいな。

「康太!!」

「任せておけ（シュツ!!）」

頼むぞ、康太!!

『再び繰りk（ビリビリ）ぎゃああああ!!』『…先ほどの放送を訂正します』

うまくやったらしいな。

ナイスだ、康太!!

『船越先生、先ほどの放送はこの生徒の照れ隠しです。至急放送室に来て、彼の気持ちを受け止めてあげてください』

今回ばかりは須川の自業自得だな。

これであいつも懲りるだろう。

「坂本君、終わりました（終わったわ）!!」  
「丁度いい。それじゃあ、けりをつけに行くぞ!!」

明久 side

さっきの騒動から少したって、なんとか落ち着きを取り戻せた。  
一時はどうなることかと…。

「明久!!」

「雄二?どうしたの」

「一気に終わらせるぞ!!」

「うん、わかったよ」

「フィールドの状況はわかるか?」

「ここは今は現代国語になってるよ。Dクラスは数学かな?木内先生が入って行ってたし」

「わかった。天城、ここを任せてもいいか?」



「ええ。任せて」

やっと援軍が…。

少し休もう。

「細井先生、召喚許可をお願いします」

「承認します!!」

「試験召喚獣、サモン召喚!!」

千枝 side

「試験召喚獣、サモン召喚!!」

この声は雪子ね!!

「雪子、こつちこつち!!」

「ごめんね、千枝。おそくなっちゃった」

「大丈夫、一緒に戦おう？」

「うん!!」

雪子の召喚獣は鉄でできた扇子を持っていて、浴衣を着ている。

それと、桜みたいいな形がたくさん連なった長い鎧が両手首につながっている。

ただ…。

「リーチが狭いね…」

「仕方ないと思うよ」

扇子だけあつてリーチがね…。

「まあ、いつか」

「実際はあまりよくないんだけどね…」

「それじゃ、いこっか!!」

「うん、千枝!!」

さてと、点数は…

Fクラス 里中千枝

現代国語 237点

Fクラス 天城雪子

現代国語 349点

「やっぱり雪子頭いいねー」

「そんなことないよ。千枝だって点数いいじゃない」

「でも雪子に負けちゃってるし」

「よそ見してるな!!」

「え?」

召喚獣ごと雪子が振り返った時だった。

長い鎧が相手の召喚獣の首の部分に鋭く入った。

「「え?」」

Fクラス 天城雪子 VS Dクラス モブE  
現代国語 349点 VS 現代国語 戦死

驚いた、その鎧武器にもなるんだ…。

「戦死者は補修!!」

「うわああああ!!」

そして、西村先生につれていかれる…。

「(愁傷さま…)」

「千枝、このまま道を広げるよ!!」

「わかった!!坂本君、先に進んで!!」

「わかった。明久と陽介もついてきてくれ」

「うん(ああ)」

坂本くん、あとはよろしくね!!

雄二 side

明久がDクラスのドアを開けると、Dクラス代表の平賀が待っていた。

「なに、もう来たのか？坂本直々にお出ましたとは思わなかったけどな」

「別に、俺自身問題なかったからな」

俺は平賀と対峙していた。

「そうか。それなら、いけ、お前ら!!」

「行くぞ!!」

「させるか、試獣<sup>サモ</sup>召喚<sup>シケン</sup>!!」

明久が俺に向かって攻めようとした相手を抑えた。

取り敢えず、ここまでは予想通りだな。

Fクラス 吉井明久 VS Dクラス モブFとH  
 数学 13点 VS 数学 平均113点

「雄二、ここは任せて」

「わかった」

「そんじや、俺が平賀に……」「やらせはしない!!<sup>サ</sup>試<sup>モ</sup>獣<sup>ン</sup>召喚!!」「

陽介は攻めようとしたが、生憎まだ残っていたDクラスの奴らに阻まれたな。

Fクラス 花村陽介 VS Dクラス モブIとK  
 数学 11点 VS 数学 平均107点

「ちっ!!」

「それじや、坂本、俺と勝負」 「あ、あの……」

さっきのやりとりの最中に姫路が後ろに回り込んでいた。

「え？あ、姫路さん。なんでDクラスの教室に？」

予想通り、現状を把握できてないようだ。

「えっと、その…。Fクラス姫路瑞希がDクラス代表の平賀君に数学勝負を申し込みます」

「は、はあ。どうも」

「あの、えっと、試獣<sup>サモモン</sup>召喚です」

Fクラス 姫路瑞希 VS Dクラス 平賀源二  
 数学 396点 VS 数学 124点

「え？あ、あれ？」

「ごめんなさい!!」

姫路の無情な一撃で、平賀の召喚獣は何もできないまま倒れた。

予想通りに立ち回ったはいいんだが、それにしても姫路、よく後ろに回り込んだな…。



# 13

雄二 side

「まさか、姫路さんがFクラスにいるだなんて…信じられん」

俺は平賀と戦後対談をしていた。

「その、さつきはすいません…」

さつきの平賀の眩きに反応したのか、姫路が来て謝っていた。

「いや、謝る必要はない。俺たちがFクラスを甘く見ていたんだ」

いや、こつちも謝る必要はある気がするな。

事実だまし討ちみたいなものだったからな。

「まさか、こんなジョーカーがいるとはな。坂本や吉井、花村のことを大きく考えていたせいで、他の人物に頭が回らなかつた。まあ、そんなこと言っても仕方ないな。ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、時間も遅くなってしまったし、作業は明日でいいか?」

「いや、その必要はない。Dクラスの設備を奪う気はないからな」

そう言った途端、周囲の視線を一気に浴びた気がするが……まあいい。

「俺たちにとってありがたいことだが……。それでいいのか?」

「まあ、条件は付けるがな」

「その条件は?」

「大したことじゃないが、俺が指示を出したら、窓の外にあるあれをうごかなくしてくれ。それだけだ。方法は任せる」

「Bクラスの室外機だな」

「ああ」

「でも、本当にいいのか?いくらなんでも破格すぎる条件だと思うが……」

「ああ、大丈夫だ。次にBクラスに攻めるから、そのためにな」

次のBクラスの作戦の一つだ。

そううまくいくかわからないが、なんとかなるだろう。

実際は他の理由が大きいかな。

「なるほどな。じゃあその条件を呑ませてもらう」

「タイミングはまたあとで話す。それじゃ、対談はここまでだ」

「ああ。お前らがAクラスに勝てるよう願ってるよ」

「無理して言うなよ、平賀。勝てっこないと思ってるだろ？」

「いや、そうでもないと思うよ。Fクラスにはジョーカーがいる。それに、点数を操作能力で補えば十分Aクラスとも戦えるんじゃないか？」

「そうであってほしいもんだ」

「そうか。じゃあ、またな」

そう言つて、平賀は去つて行つた。

「さてと、皆!!今日はご苦労だった」

「なあ、坂本」

「どうした、陽介?」

「一応気になるから聞いてみるだけなんだが、設備を交換しない理由を言ってもらっていいか?」

「そのことか。さつき平賀と話していたように、Bクラス戦に必要なことだ」

「本音は?」

「さつきの理由もそうだが、設備を変えたらそこで満足する奴が出て、士気が落ちたり、反対してくる奴らがいると思っただけ」

そういうと、一部の連中が顔を背ける。

単純だなこいつら…。

「まあ、そういうことだ。お前ら、明日は消費した点数を補給するから、今日は帰って勉強するなり休むなりしてくれ」

そういうと、Fクラスの奴らは帰る支度を始める。

ま、勉強をする奴なんかいるわけないか。

明久 side

Dクラス戦が終わって帰り道、僕は雄二、陽介、そして鳴上君の4人で一緒に帰っていた。

鳴上君も偶然同じ方向らしい。

「そういえば坂本、気になったことがあるんだが」

「どうした？」

「この試験召喚戦争を始めるきっかけって何だったんだ？」

「そういえば知らなかったのか。1つは、まあ下剋上のようなものだな。もう1つは、姫路とかのFクラスにいるべきではない人のため…だったか、明久？」

「え、そこで僕に振るの？まあ、確かにそうだけどき」

時は遡って今日の朝、僕は雄二と話をしていた。

「話って何だ？」

「こんなこと言うのは失礼かもしれないけどさ、なんで雄二はこのクラスに来たの？雄二なら普通にもっと上のクラスに行けたでしょ？」

「そのことか。なに、俺にもやりたいことがあつてな」

「そうなんだ。ところでさ、『試召戦争』に興味はある？それも、Aクラス相手に」

「一応聞いてはみるが、何が目的なんだ？」

「…姫路さん達のためかな。途中で退席してこのクラスに来ちゃったんだし」

「恥ずかしいけど、素直に本心を言った。」

「ほう。やつぱり優しいな、お前は」

「ん？そうかな？」

「ああ。まあ、俺もAクラスに試召戦争をするつもりだったから丁度いい」

「そうなの？」

「ああ。くだらないかもしれないが、下剋上をやってみたいくてな」

「あ、さっきのやりたいことってもしかして」

「そういうこつた。そんなじゃ、先生も戻ってきたことだし、教室に戻るとするか」  
「うん」

「とまあ、こんな感じかな」

「なるほどな」

一応話したけど、やっぱりなんか恥ずかしいな。

「要するに、姫路、天城はもともとAクラスの実力者だから、いるべきクラスで授業を受けさせたことによってあつてるか、吉井？」

「そうだよ、陽介」

「だが、それには1つ問題点がないか？」

「なにかな？」

「例えばAクラスに勝つたとして、設備を入れ替えたとする。そうしたら、Aクラスの人にはFクラスの教室で過ごすことになる。そこまではあつてるか？」

「ああ、なるほどな」

「ん？何か分かったの、雄二？」

「簡単に言うと、もし設備を交換すると、Aクラスにいる人物が今度はいるべきクラスで授業を受けることができなくなるってことだな」

「そっか!!」

姫路さんたちのためを思っていたせいで、他のことをまったく考えてなかった…。

そうだよ、Aクラスの人のことを考えてなかったや…。

「だが、そのことなら大丈夫だ」

「「え?」」

雄二の発言に、僕たちはそろって驚いていた。

「通るかはわからないが、Aクラスに勝った時の報酬を変えればいい。たとえば、再度振り分け試験を行う…とかな」

「なるほど。理にかなっているな」

「そうだね。Aクラスの人は設備を変えることがなく、姫路さんたちもAクラスで授業を受けられるなら」



「そういうことだ。それじゃ、家に帰って少しでも知識を蓄えておけよ」  
「「うん（ああ）（おう）」」

悠 side

皆と別れた後、俺はジュネスにいった。

場所はあらかじめ菜々子から聞いていたので、はじめてだったがすんなりと行くことができた。

ちなみに、何故突然ジュネスに行ったかというところ、夕飯は普段俺が作るのだが、食材がなくなりかけてたため買い出しに行かなくてはならなかったからだ。

そして、見覚えのあるついさっきまで話をしていた人物を見かけた。

「花村か」

「ん？その声は鳴上だな。どうしたんだ？」

「夕飯の買い出しでな。そういえば、バイトやってるんだったな。今日のおすすめとかないか？」

「そうだな…。今日は魚が安かったか？」

「そうか、ありがとう」

「つと、バイト中だからまた今度な」

「ああ。…すっかり勉強しておけよ？」

「…バイトが終わって時間あつたらな…」

そんな他愛もない会話をして、買い物続けた。

「ただいま」

「お帰りなさい。買い物行ってきてくれたの？」

「ああ」

この家に来て数日たち、今では人見知りだった菜々子も今では普通に会話できるようになった。

「少ししたら夕飯を作るからな」

「うん、楽しみ!!」

さてと、何を作ろうか…。

夕食を終え、俺は菜々子と話をしていた。

「新しい学校ってどんなところなの？」

「なんて言えばいいか…。テストを受けて、その点を使って勝負するところかな」  
「へー」

菜々子には少し難しい気もしたが、あまり気にしないことにした。

「その学校、楽しい？」

「ああ、楽しいよ」

「そうなんだ!!」

そんな感じで、俺は菜々子と俺の行ってる学校のことを話した。  
流石にクラスの惨状は伝えてないが…。

## 14

悠 side

Dクラス戦から一夜明け、今日は点を補給するためにテストを受けている。  
今は4教科終わったところだ。

「おつかれ、鳴上」

「ああ。まだ4教科だけだな」

そういえば、1限で船越先生が入ってきたときに須川が逃げ出そうとしていたな。  
失敗に終わったみたいだが…。

「よし、昼飯でも食いに行くか。今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな  
「坂本、どこにそんな量が入るんだ？」

「別に気にするな。そんじゃ、食堂に行くぞ」

「あ、待って。あたしたちもいいかな？」

「里中か。別に構わないぞ」

「あと、なんだか瑞希が用があるみたいだよ」

視線を向けると、姫路がもじもじとしていた。

「あ、あの。じ、実はお弁当を作ってきたんですけど、ちよつと多く作りすぎたので、迷惑でなければ皆さんでどうですか？」

この学校の生徒は積極的なのだろうか？

坂本は積極的に試召戦争をはじめたし、この学園は積極性まで鍛え上げられるのか？

「そんな、迷惑じゃないよね、雄二！」

「ああ、むしろありがたい」

「そうですか？それならよかったです」

「そうと決まれば、こんな教室ではなく屋上にも行くかのう」

「…（コクコク）」

たしかに、このクラスは何かと問題がありそうだからな。

衛生面が特に…。

「それならお前らは先に行っててくれ。飲み物でも買ってくる」

「それならウチも行くわ。一人じゃ大変でしょ？」

「悪いな、それじゃ頼む」

「それじゃ、先行ってるぜ!!」

「きちんと俺たちの分もとっておけよ」

「遅くならなけりや大丈夫だぜ」

そんな会話をして、俺たちは屋上へ向かった。

「いい天気だな」

「ここなら気持ちよく食べれるわね」

姫路はビニールシートを広げ、ピクニックみたいな状態になった。

「あんまり自信はないですが…」

そう言いながらお弁当の蓋を開けると…

「！！！！！！」  
「！！！！！！」  
「！！！！！！」

揃って歓声をあげた。

から揚げ、エビフライなどの定番のおかずが所狭しと並べられていた。

「それじゃ、お先に…」

「いや、俺が先に…」

「…（ヒョイ）」

「あつ、ずるいぞ康太（土屋）！！」

土屋がすばやくエビフライを取り、そのまま口に運び…

「…（パク）」

バタン、ガタガタガタガタ

顔から地面に崩れて、突然震えだした。

「わわっ、土屋君!!」

呼ばれたことに気付いたのか、土屋が起き上がり、

「…（グツ）」

姫路に向かって親指を立てた。

姫路を安心させたいのはわかるが、足がずっと震え続けている。

いったい何が…。



「お口に合いましたか？それなら安心して皆さんに差し上げられますね。よかつたらど  
んどん食べてくださいね」

姫路を安心させたことはよかつたが、土屋の虚ろな目を見ると、とても不安になつて  
くる。

そう考えていると、隣から花村が小さな声で話しかけてきた。

「なあ、鳴上。あれ見てどう思う？」

「正直、今の土屋の状態を見てると不安になるな」

「だよな…。どうするか」

「とりあえず、里中と天城はここにいないほうがいいんじゃないか？」

「そうだな。それじゃ…」

という、花村は里中に向かって小声で…

「まったく。里中は姫路と違って女子力ないな。ちゃっかり姫路から弁当を貰おうと

してr「おらあー!!」うごおお!？」

里中の蹴りが花村の鳩尾にヒットした。

「何? あたしが女子力ない? 確かに自覚してるけど、面と向かって言われたら流石に怒るわよ!!」

「つてえ…。自覚してるならいいじゃん」まだ何か言うつもり?」「いや、何でもありません」

「あくもうイライラしてきた。行こう、雪子」

「えっと、ごめんね、瑞希」

そう言っついていなくな…

「最後に一発!!」

「ぐはあ!!」

…らずに花村の顎に一発蹴りを入れた。

なんとかか一人の犠牲で二人救われた。

花村？花村は気絶している。

顎へのクリーンヒットが響いたらしい。

「…なんかすごい表情で里中が階段をおりて行ったんだが、何かあったか？」

そんなことを思っていると、いつの間にか坂本が到着していた。

「雄二、遅かったね」

「島田はどうしたのじゃ？」

「二人の分の飲み物を持って里中たちを追いかけていったな。にしても旨そうだな。どれどれ…」

「あつ、やめろ、坂本!!」

制止するが間に合わず、卵焼きを口に放り込んだ後…

バタン——ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

飲み物の缶を落としながら、土屋と同じように顔から地面に落ちて、小刻みに震え始めた。

「ど、どうしました？」

姫路がまたしても心配になっている。

「お、おい明久。この料理は？」

「姫路さんの実力だよ…。康太もこの通り…」

小声で吉井達が話しながら土屋のほうを見る。

「さ、最近運動してなくてな。と、突然階段を走ったから足がつってな…」

「だ、大丈夫ですか？」

「あ、ああ。問題ない。少し休めば何とかなる」

あくまで心配をかけてはならないとばかりに振舞う。

「それにしても、どうするかのう…」

「よし、俺が行こう」

「え、大丈夫なの？」

「大丈夫ではないと思うが、誰かが行かないと始まらない」

「む、無理はするでないぞ」

「ああ。吉井」

「なに、鳴上君？」

「何とか数秒姫路の気をそらしてくれ」

「わかった」

小声での作戦会議を終え…

「姫路さん!! 後ろのあれはいったい何だ？」

「え、後ろですか？」

今だ!!

「いただきます（ボソツ）」

俺は二人を戦闘不能に陥れた弁当に手を出した…。

そこから昼休みが終わるころまでの記憶はない。

明久 side

鳴上君が一気に弁当をかけこんだ後、まったく動かなくなった。

「……」

「鳴上君？」

「……（グラッ）」

そして地面に倒れた。

大丈夫か心配だけど、今は姫路さんを安心させなくちゃ!!

「ごめんね、姫路さん。僕の見間違いだっただよ」

「あ、そうだったんですか。あれ、鳴上君は？」

「料理がおいしくつてたくさん食べて、満腹でそのまま倒れちゃったみたい」

言ってることがおかしいけど、気にしちやだめだよな。

「お弁当ご馳走様。おいしかったよ」

「なかなかいい出来じゃったのう」

「それならよかったです!!あと、実は…」

そう言いながら何かを取り出した。

「デザートも作ってきたんです!!」

何か果物とヨーグルトを混ぜたようなものだった。

「でも、スプーンを教室に忘れたので取りに行ってくださいね」

そう言つて屋上から出て行つた。

「どうする、秀吉？」

「どうするも何も、今いる誰かが食べなければいけないからのう」

「雄二は？」

「あの料理を食べた後だ。正直言つて不安でしかない」

「やっぱりそうだよね…」

「よし、ワシがいこう!!」

「秀吉!!」

「安心するがよい。こう見えても胃袋には自信があるからのう」

そう言つてそのヨーグルト（のよくなもの）を一気に口にかけてこむ。

「ん？明久よ。これは割と普通に食べゴパアツ!!」



そして、秀吉は散って行った。

「康太、動ける？」

「…ああ、問題は少ししかない」

「雄二は？」

「なんとか大丈夫だ」

「みんなを連れて教室に戻ろっか」

「(…) ああ」

こうして、楽しくなるはずだった昼食は終わった。

## 15

## 悠 side

気が付くと、Fクラスの教室で横になっていた。

どうやら、誰かが教室まで運んでくれたみたいだ。

「おっ、気が付いたようだな、鳴上」

近くにいた花村が俺に気付いた。

「ああ。ところで、あれからどうなったんだ？」

「えつとな、俺が聞いた話だと…」

まさか、あの弁当の後にデザートまであるとは思わなかった。

結局被害は抑えきれなかったみたいだ。

「それじゃ、鳴上も目が覚めたみたいだからな。次の試召戦争の話をしよう」

「そんなじゃ、俺から質問だ」

「なんだ、陽介？」

「次の相手は昨日の話から察するにBクラスなのか？」

「ああ。そうだ」

昨日の話とは、Dクラスに指示していたことだろう。

「あれ、目標はAクラスだよな？なんでBクラスと対戦するの？」

「それなら正直に言おう。どんな作戦でもこの戦力ではAクラス相手に勝つことはできないだろう」

坂本がここまで言うとなると、Aクラスはやはりずば抜けて点数が高いみたいだ。

「それじゃあ、目標はBクラスに変更するの？」

「いいや、そんなことはしない。Aクラスをやる」

「坂本君。言ってることが矛盾してるわよ」

「どんな作戦でも、クラス単位じゃ勝てないだろう。だから、一騎打ちに持ち込もうと思う」

「一騎打ち？ どうやって？」

「そのためのBクラスだ」

いまいち話についていけない。

「わかりい、坂本。どういう意味か教えてくれ」

どうやら俺以外にもわからない人物がいたようだ。

「簡単に言うと、Bクラスの設備を使つての交渉だ。下位クラスが上位クラスに負けると設備のランクが1つさがる。逆に、上位クラスが下位クラスに負けると設備を交換することになる。このシステムを利用して、交渉する。設備を交換しない代わりにAクラスに攻めるように交渉すれば、まず間違いなく乗るだろう」

「なるほどな。交換してFクラスの教室になるよりはマシだからな」

「そういうことだ」

「じゃが、Bクラスの交渉がうまくいったところで、Aクラスとの一騎打ちにはならないんじゃないかのう？」

「安心しろ、秀吉。それに関してはまた違う考えがあるからな。とにかく次はBクラス戦だ」

「それで、また宣戦布告に行かなくちゃだろ？今度はだれなんだ？」

「前はDクラスの代表が花村達の知り合いだからよかったものの、結局襲われていたみたいだからな。」

「そうだな…。里中と陽介でどうだ？」

「…ねえ。坂本君」

「な、なんだ？」

「どうしてあたしと花村で宣戦布告をさせようとしてるの？」

「あ、ああ。それならな…」

そこまで言うと、突然小声で話し出した。

陽介 side

小声になって数十秒後

「わかったわ。いつ行けばいいの？」

「放課後に頼む。昼休みももう終わる」

どうやら話が終わったようだが、なんかすっげー冷汗が…。

「お、おい里中。いったい坂本と何を話してたんだ？」

「なんでもいいじゃない。それじゃ、そろそろテストだから席にもどるね」

「おい!!」

それから2時間のテストは、冷汗や寒気のせいか、いまいち出来が良くなかった気がするな。

そして、放課後となった。

「それじゃ、頼んだぞ、2人とも」

「うん!!」

「あ、ああ…」

千枝 side

教室を出てから少したつて、Bクラスの前に着いた。

「失礼します!!」

「おい、里中。なんでそんなにいきなり突っ込むんだ!!」

「Bクラスの代表はいますか?」

「なんか、里中が敬語って違和感…」

花村のやつ、散々言つて。

でも、ここはこらえて…。

「このクラスの代表なら俺だ。俺に何か用でもあるのか？」

さてと、言いますか。

「あたしたちFクラスはBクラスに宣戦布告をします!!」

確か、坂本君はこういえば誰かしら暴れるって言ってたっけ？

「なんだ、あいつら!!」

「Dクラスに勝ったからって調子に乗るな!!」

おー、盛り上がってるね!!

「それだけだから。それじゃ」

といいながら、花村の腕をつかむ。



「お、おい。何をやろうとして…」

「身代わりおいてくから好きにしていよいよ!!」

そう言つて花村の腕を引つ張り、よろけたところを蹴り飛ばした。

丁度良くBクラス代表に当たつたし、これでBクラスの怒りをすべて花村が引き受けてくれるでしょ。

「じゃあね、花村」

「おい、待つてくれ。昼のことは謝るから…」

「ぎゃあああああつ!!」

雄二 side

叫び声が聞こえて少してから里中が戻つてきて、それから数分してボロボロな陽介が戻つてきた。

「大丈夫か、陽介？」

「大丈夫に見えるか、坂本？」

「まあ、昼の仕返しだと思つとけよ」

「なんでだよ!!俺痛めつけられてるだけだぞ!!」

「そんなことより、明日もテストだから遅刻するなよ」

「そんなことで済ますな!!」

まあ、こうなるとは思っていたんだが、里中がこわすぎた…。  
すまない、陽介。

## 16 Bクラス戦1

悠 side

花村達が宣戦布告をしてきた日の翌日、午前中に残りの教科を受け終わり、いよいよBクラスとの試召戦争が始まろうとしている。

「さて皆、総合教科テストご苦労だった。午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

「「おおーっ!!」」

Dクラス戦を終えてもなお衰えないモチベーションに若干引いてはいるが、このクラスの武器の一つだろう。

「今回の戦争はいかにBクラス陣を教室に押し込めるかが重要になる。開戦直後の渡り廊下戦で絶対に負けてはならない。そこで、前線では姫路に指揮を執ってもらおう」

「はい、頑張ります」

「野郎ども、死んでも勝利を勝ち取るんだ!!」

「うおおーっ!!」

そして、チャイムの音と同時に開戦の火ぶたが落とされた。

「よし、行って来い。目指すはシステムデスクだ!!」

「サー。イエッサー!!」

じつにクラスの約8割が一斉に渡り廊下へと向かった。

俺や花村、吉井、木下、島田もその中のメンバーだ。

里中、天城は坂本の護衛、土屋はやはり諜報らしい。

開始早々かなりの勢いで渡り廊下に向かっているのはいいんだが…。

「ま、まっってくださいっい」

指揮官の姫路が遅れている。

運動が苦手だから仕方がないのだろうか。

「いたぞ、Bクラスだ」

「高橋先生を連れてくるぞ」

こちらと違い、余裕そうにゆっくりと近づいてくるBクラスの面々。  
あくまで様子見程度なのか、人数はそれほどいない。  
どうやら先に着いた人同士で召喚しようだ。

Bクラス 野中長男 VS Fクラス 近藤吉宗

総合 1943点 VS 総合 764点

Bクラス 金田一裕子 VS Fクラス 武藤啓太

数学 159点 VS 数学 69点

Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 君島博

物理 152点 VS 物理 77点

文字通り桁違いな差となっている。

これだけの差があると簡単に一人、また一人と削られていく。

「お、遅れ、ました、ごめん、なさい」

少したつてから姫路が到着した。

「来たぞ、姫路瑞希だ!!」

やはり情報はすでに広まっているらしく、警戒されているようだ。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子がFクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます!!」

「あ、長谷川先生。よろしくお願いします」

「律子。私も手伝う!!」

Bクラスとしては早く戦死させておきたいのだろう。

姫路相手に2人がかりで挑むらしい。

「「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>ン</sup>!!」」

そう言つて3人の召喚獣が顔を出す。

「あれ、姫路つて前の召喚獣は腕輪してたか？」

「いえ、今回の数学は結構解けたので…」

腕輪が何か関係してるのか？

「腕輪？そ、それって…」

「私たちが勝てるわけじゃないじゃない!!」

なにやらBクラスの2人は焦っている。

いったいどういうことだ？

「それじゃ、いきますね。『熱線』!!」

キュボツ!!

「きゃあああーっ!!」

いきなり姫路の召喚獣の腕輪から光線みたいなものが飛び出し、相手の召喚獣にあたって炎に包まれた。

そういうえば、400点をこえると腕輪が付くっていう話があったな。

Bクラス 岩下律子

Fクラス 姫路瑞希 VS 数学 189点

数学 412点 VS Bクラス 菊入真由美

数学 151点

「い、岩下と菊入が戦死したぞ!!」

「な、なんだと!!」

「噂以上に危険な相手だ、気をつけろ!!」

「「おう!!」」



すごい威力だな。

あとは姫路の指揮にかかっている。

「みなさん、頑張ってください!!」

いや、その指示は違う気がする。

「やったるでー!!」

「姫路さんサイコー!!」

花村といい、姫路といい指示らしくない指示でなぜうまくいくのだろうか。  
いや、これがFクラスなのか？

「姫路、いったん下がれ」

「あ、はい」

確か、腕輪を使うと点数を消耗するという話だった。

ここは引かせて温存させるべきだろう。

「中堅部隊と入れ替わりつつ後退しろ。戦死だけはするな!!」

どうやらこちらが優勢のようだ。

このまま相手を後退させつつBクラスまで行ければいいが…。

「すまぬ、ワシと明久は一旦Fクラスに戻ろうと思う」

突然木下が話しかけてきた。

「どうした？」

「Bクラスの代表があの本のようでの」

「ん？」

「ああ、あれだろ？カンニングの常連、球技大会では相手に一服盛った、喧嘩に刃物は  
デフォルト  
当然装備ってやつだろ？」

「うむ。雄二に何かあるとまずいからのう」

「どうやら、根本という人物は話を聞く限りだとかなり危険な気がするな。」

「それなら俺も一緒に行こう」

「当然俺もな」

「それはうれしいのじゃが、なんでかのう？」

「危険なら人数が多い方がいいだろうからな」

「そうじゃな。それでは行くかの」

「ああ（おう）」

そして、姫路に一声かけて、教室に戻った。

## 17 Bクラス戦2

悠 side

教室に近づくにつれ、なにやら戦闘している音が聞こえる。

「くそつ、遅かったか？」

「まだ戦っている最中だから大丈夫じゃろう」

「急ぐぞ!!」

教室に着き、すぐさまドアを開ける。

そこには、里中とBクラス何人がいた。

「え、花村達どうしたの？」

「いや、坂本が心配で来てみたんだが、これはどういう状況だ？」

花村がそういうのも仕方がない。

教室の卓袱台は何個か破壊され、シャーペンや消しゴムはへし折られている。

他にも、一部の人物の鞆が荒らされていることもあり、このBクラスの連中は何かしら妨害をしたらしい。

「チツ、増援か」

「こいつだけでも苦勞してんのに…」

フィールドは現代国語か。

「俺たちも出さずぞ!!」

「[[試獸<sup>サ</sup>召喚<sup>モン</sup>!!]]」

Fクラス 里中千枝

現代国語 176点

Fクラス 花村陽介

現代国語 218点

Fクラス 木下秀吉 VS Bクラス モブA〜E

現代国語 152点 VS 現代国語 平均143点

Fクラス 吉井明久

現代国語 45点

Fクラス 鳴上悠

現代国語 344点

一人だけ2桁がいるのは気にしてはだめだろうか。

「つていうか花村!!なんでそんなに点数が高いの?」

「いや、一応得意教科だからな」

「秀吉もすごいね。Bクラス並みじゃないか」

「ワシも得意な方の教科じゃからのう。明久はもつと努力せんか」

「うっ…」

「……いや、鳴上つてやつのは点数は驚かないのか?」「……」

Bクラスの人物が俺の点数に何か言いたかったみたいだが、あんまり気にしないこと

にした。

「くそよ!!」

「「ああ（おう）（うん）（うむ）!!」」

先手を切ったのはまさかの吉井だった。

吉井は観察処分者という立場で授かった操作能力を活かし、敵を翻弄させるみたいだ。

「くそっ、こいつちよこまかと!!」

大振りで攻撃する敵を避けつつ、急所の部分に的確に木刀を入れていく。

Fクラス 吉井明久 VS Bクラス モブA

現代国語 45点 VS 現代国語 117点

しかし、吉井の点数が低く、対してダメージは与えられない。

「隙あり!!」

そんな攻撃をし終わった吉井を狙って一人が攻撃を仕掛ける。しかし、その攻撃は花村によって防がれる。

「チツ」

「お前らだけじゃなく、こっちも複数いるっての」

今回の花村は、操作技術だけでなく点数も高い。おそらくこのBクラス相手では問題ないだろう。実際、他の奴らもまとめて2対5で戦っている。

「くそ、まだあつちは2人なのに」

「怯むな、攻めろ!!」

今回は花村と吉井以外は対戦する必要がなさそうだ。



吉井は相手の攻撃をするりするりと避け続け、隙ができたところを花村が急所にクナイを差し込むことで倒している。

はじめは5体いた相手の召喚獣も、あっという間に残り1体になった。

「こいつらなんだ？なんて強さなんだ!!」

「まあ……」

「そりゃ……」

「観察処分者だからね（な）」

そして無慈悲の一撃が入り、Fクラス教室の決着がついた。

「戦死者はほs……どうした、この教室は……」

「すいません、戦争が終わってから説明するので」

「わかった。さあお前ら、勉強の時間だ……」

「「「……」」」

西村先生に対する恐怖なのか、さっきの戦いの恐ろしさなのか静かなままBクラスの

5人はいなくなつた。

「花村、吉井、大丈夫か？」

「問題ないぜ。少し疲れたけどな」

「本当だよ。ただでさえ点数低いから避け続けなくちゃだからね」

「それに関しては明久が点数を上げればいいだけのはずなのじゃが…」

「そういえば、里中はなんで一人でここで戦つてたんだ？坂本もここにいないが…」  
「俺ならここにいますぞ」

俺の言葉に反応した人物に向かって全員で振り返る。

「坂本、どこに行つてたんだ？」

「Bクラスから協定を結びたいと申し出があつてな。まさか教室がこうなつてるとは思わなかつたが、作戦に支障はない」

「その協定とは？」

「4時までには決着がつかなくなつたら、戦況をそのままにして続きは明日の午前9時に持ち越し。その間は試召戦争にかかわる一切の行為を禁止する。って内容だ」

「承諾したのか？」

「そうだ。姫路は体力がないからな。体力勝負に持ち込むと若干分が悪い。それなら後日姫路が万全の状態で戦える方が優位に立てる」

「ねえ、坂本君」

「なんだ？」

「それ、どう考えてもこつちに得がありすぎない？」

逆に言うと、Bクラスにはたいして得などない。

Bクラスこそ耐久戦に持ち込んだ方が優位に事を運べるはずなのだが…。

「何か裏があるのか？」

「かもしれないな。とりあえず、前線メンバーは引き続き作戦の続行を、天城、里中はまた俺の護衛を頼む」

陽介 side

会話が終わると、俺たちはすぐに前線に戻った。

「吉井、花村、戻ってきたか!!」

焦った様子で須川が話しかけてくる。

「なんでそんなに焦ってるんだ？」

「島田が人質にとられた」

「はっ（えっ）？」

破壊の次は人質か？

「おかげで相手は残りは2人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

「とりあえず状況を見たいかな。陽介は？」

「先に行つててくれ。あと、合図を出したら気をそらせてくれないか？」

「わかった」

「それじゃ、ちよつと行つてくる」

そういつて俺は鳴上のところへ行つた。

「鳴上!!」

「どうした、花村」

「どうやら島田が人質にとられたらしくつて、うまく不意打ちをしようと思つてゐるんだが、手伝つてくれないか？」

「わかつた。すぐに向かおう」

「総員突撃用意いーっ!!」

島田が人質に取られているところに到着すると、そんな声が聞こえた。

「隊長それでいいのか!？」

コントジミたことをやっていたが、俺は吉井に合図を送る。

吉井はなんとかそれに気づいてくれた。

「あーっ、あつちで霧島さんのスカートがめくれている!!」

「「「なっ、なにいいっ!!」」」

「いくぜ、鳴上!!」

「ああ、花村」

「「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚!!」」

Fクラス 花村陽介 VS Bクラス 吉田卓夫

英語 79点 VS 英語 18点

Fクラス 鳴上悠 VS Bクラス 鈴木次郎

英語 317点 VS 英語 33点

気をそらしたBクラス2人を不意打ちで仕留めた。

「戦死者は補修!!特にお前らは人質なんていう行動をしたんだから念入りに講義してやろう…」

「ぎゃああああ!!」

「助けてえええ!!」

こうして、島田の人質事件は幕を閉じた。

そのあとも問題なくBクラスに押し込むことに成功し、午後4時となり休戦となった。

## 18 Bクラス戦3

悠 side

4時を回り少し経つと、土屋が教室に入ってきた。

「康太か。何か分かったことはあるか？」

「Cクラスの様子が怪しい」

「なるほど…。漁夫の利を狙っているのか」

「どうするの、雄二？」

「そうだな…。Cクラスと協定を結ぶか」

少し考えた後、そんな決断をした。

しかし

これには問題がある。



「坂本君、それだとBクラスとの協定を破ることになるわよ」

そう、天城の言う通り、Bクラスとの協定である、試召戦争にかかわる一切の行為を禁止するというものを破る。

「それもそうだが、BクラスとFクラスにしか知られていないはずだ。こんな内容Cクラスが知っているわけ…」

「いや、知っていると思うな」

坂本の言葉に花村が返事をした。

「なんでそう言い切れるんだ？」

「なんでってそりゃ…」

そして、花村はこうつぶやいた。

「Cクラスの代表である小山と根本は付き合っているんだ」

## 雄二 side

花村の発言から少しして、俺は作戦を練っていた。

「…これでいいか。これからいうメンバーは俺たちに着いてきてくれ。明久、姫路、島田、花村、里中、この5人だ。ほかのメンバーは各自指定した場所に行くように」

「ワシは行かなくてよいのか？」

「もしものことがあるといけなからな。秀吉には教室で待機しておいてほしい

「うむ、承知した」

「それじゃ、行くか」

「失礼する」

作戦開始だ。

「Fクラスの坂本雄二だ。Cクラスの代表はいるか？」

「私だけど、何か用かしら？」

俺の呼びかけに対して、小山が反応した。

「簡単な話だ。ここに協定違反している奴らがいてな」

「えっ、な、何のことかしら？」

「とぼけるなよ、そのカーテンの後ろにいるんだろ、Bクラス代表さん」

俺がそう言うと、焦った様子で根本が現れた。

「な、何を言っている。俺が協定違反をしているだと？」

「そうだ。じゃあ質問をしようか。なぜCクラスにいる？律儀に教師まで連れて」

「教師に勉強を教わろうと思ってるな」

「勉強ならBクラスでもできるだろ？」

「そ、それは…」

さて、この次は…。

「次にCクラス代表に質問だ」

「な、なにかしら」

「根本がここにきてお前に何か言わなかったか？」

「言うな、友香!!」

「ほう、なんでそんなに隠そうとするんだ？」

「うっ…」

「それで、どうなんだ？」

「別に、Fクラスが協定を結ぼうとするはずだから、断れって言われたのよ」

さてと、材料がそろったな。

「最後に、長谷川先生。あんたはどうしてここにいるんだ？」

「それはですね、根本君にここで待ってればFクラスが協定違反をするって言われてきたんですよ」

「それじゃ、今の現状をどう見る？」

「そうですね、協定違反の件ですが、BクラスがCクラスと試召戦争についてかかわって

いると見えますので、協定違反をしているのはBクラスと考えられますね」  
「くそっ!!」

そういつて根本は逃げ出そうとする。

「逃がすな、追え!!」

「長谷川先生、召喚許可を!!」

「承認します!!」

しかし、そのころには根本の影はない。

その扉を開けた先には…。

「頼んだ、康太」

大島先生と康太が待っている。

「…大島先生、Fクラス土屋康太がBクラス代表根本恭二に…」

「芳野が受ける!!」

「…くっ」

「試獣召喚!!」

結果からいうと、どうやら根本を討つことには失敗したようだ。

しかし、相手の戦力は少なからず減少した。

本当なら決着をつけたかったが仕方ない。

「…すまない、雄二」

「気にするな。仕方ないだろう」

「それで、作戦はどうする?」

「正直、今回わかったのは、Cクラスも敵であるということだな。それと、康太の面が割れた以上、作戦に少し変更点がある」

「なるほど…」

「明日は姫路が作戦の要だ。頑張ってくれ」

「…」

なぜか姫路が無言だ。

「姫路？」

「え、あ、はい…」

いつもよりなぜか暗い。

いったい何が？

「Cクラスに関しては明日の朝に違う作戦を練っておく。とりあえず今日は解散だ」

全員がいなくなってから、俺はとある人物に電話をした。

「もしもし、——か？」

「……どうしたの、雄二？普段は電話なんて掛けてこないのに」

「明日の朝Fクラスに来てもらえないか？すこし話があつてな…」

「……告白？」

「なんでだよ!!それに俺のことはもう気にするんじゃない」

「……それで、本当の内容は？」

「それは——」



# 19 Bクラス戦4

悠 side

BクラスによるCクラスとの共謀は坂本によって阻止することができた。

そしてその翌日、普段より早い時間に登校し、これからの作戦を説明してもらおうことになっている。

「明久が来てないな。また遅刻か？」

「ごめん雄二、遅くなった」

「気にするな。お前の遅刻はいつものことだから想定内だ」

「なんだとっ!!」

「言い返せるか？」

「……………くっ」

吉井はよく遅刻をするらしい。

それを軽くからかう坂本に吉井は若干反抗しようとしたが、結局反抗できなかつた。事実なのだろう。

「それじゃ、今日の作戦についてだ。今回は一人助っ人を呼んでいる」

坂本がそういうと扉から一人の女子が入ってきた。

「……霧島翔子。よろしく」

なぜかメンバーの大半が驚いたような表情をしている。

「花村、いったい何があつてこんな表情をしてるんだ？」

「そうか、鳴上は知らないんだつたな。霧島はAクラス代表だ」  
「なるほど、しかしなぜこの手伝いをするんだ？」

「それを今から坂本が説明するんだろ？」

「そうだなと一言いい、坂本の方を向いた。」

「まずはCクラス相手にどうやってこちらを攻め込ませないようにするかだ。そこで、翔子と秀吉にはCクラスへの使者として、宣戦布告をしてもらう」

「……Aクラスのみんなからは既に了承してもらった」

「それは助かる」

「しかし、AクラスがCクラスに対して宣戦布告をするのになぜ霧島だけでなくワシも行くことになっておるんじゃない？」

木下の言い分もごもつともだ。

しかし、そのことは坂本もわかっていたのだろう。

「秀吉には木下姉のふりをして翔子に付き添ってもらおう予定だ。翔子はもともと無口だからそういうことが苦手でな……」

「気が進まんが、まあ仕方あるまい」

「すまないな。それじゃ、これが着替えだ」

そう言って、女子用の制服を木下に渡す。

「こんな質問すると変かもしれないけど、坂本君、どこでその制服手に入れたの？」

「……私が渡した」

「そ、そうなんだ……」

「それじゃ、着替えるかのう」

そう言ってなぜかその場で着替えを始める。

一応わかっているとは思うが、周りは男子だけではなく女子もいる。

あまり気にしないタイプなのか？

「よし、着替え終わったぞい。ん？なぜみな呆然としておるのじゃ？」

ただわかってなかったただけみたいだ。

「翔子と秀吉はCクラスに宣戦布告をした後、簡単に挑発をしてもらいたい。ただ宣戦布告をしても断られて終わりだろうからな」

「いったいどんな挑発をすればいいんじゃない？」

「そうだな、自信がないのか的なのを言ったり、あとはその場の状況に任せる」  
「一つ質問していい？」

「どうした、天城？」

「なんで翔子に手伝ってもらったの？」

「出来る限り信憑性を帯びさせるためだ。はじめは秀吉だけにしようと思っていたんだが、Bクラスと関係がある以上、心配事はできる限り減らしたいからな」  
「なるほどね」

かなり凝った作戦だな。

変なミスさえしなければいいことはないだろう。

「そんじや。Cクラスの前に行くぞ」

翔子 side

私は雄二たちに連れられてCクラス前に行った。

「さて、ここからは2人で頼むぞ、翔子、秀吉」

「(……) うん(うむ)」

心配だけど、きっと大丈夫。

そう考えて、Cクラスの扉を開けた。

「……失礼します」

入るとすぐにCクラスの代表である小山と目が合った。

「どうしたの、霧島さん？」

「……私たちAクラスはCクラスに試召戦争を申し込む」

私は簡単にそういった。

「それは却下させてもらおうわ。そもそも、なんでこのクラスに戦争を申し込むのかしら？」

「それはアタシから説明させてもらおうわ」

そう言つて、優子の真似をしている木下が言葉をつづける。

「まず1つ目に、今はいろんなクラスで試召戦争が行われている。2つ目に、Bクラスが試召戦争をしている。となると、Aクラスに攻め込まれるのは時間の問題になってくる。そこで、Aクラスも試召戦争をすることで召喚獣の操作に慣れておこうと思つたの」

「そういうことならほかのクラスと、たとえばEクラスとすればいいじゃない」

小山の言うことは確かに間違つてない。

「……でも、Eクラスとの戦争の場合、たとえば行うことができたとしても、力任せの一方的な試合になってしまう可能性がある」

「その点、Cクラスとの戦争なら、考えながら細かい操作の練習にもなるの」

「へえ。でもこちらは断るつもりよ」

「ふうん。このクラスの代表はそんなに腰抜けな代表なのね」

「なんですつて?」

木下が小山に挑発を仕掛け始めた。

「だから、あなたが腰抜けだつて言ったのよ。もしかして自信がないのかしら?」

「い、言わせておけば…。アンタたちなんか私たちで十分倒せるんだから!!」

「それならアタシたちと試召戦争するかしら? ちようどあなた達は準備しているみたいじゃない」

「のぞむところよ!! アンタたちになんか負けないんだから!!」

少しひどいことをしている罪悪感にかられるが、雄二のためだから仕方ない。

「……失礼しました」

とりあえずすぐにCクラスの教室をでて雄二のもとに向かった。

雄二 side



「……雄二、これでいい？」

「ああ、ぼつちりだ。翔子に秀吉、ありがとな」

「うむ。ワシもなんだかすつきりしたのう」

あえて秀吉がすつきりした理由を聞かないでおこう。

「……優子にはあとでこのことは話しておく。いろいろ誤解を与えると悪いから」

「わかった。昨日突然あんなこと頼んで悪かったな」

「大丈夫。夫のためなら何でもする」

「ば、馬鹿なことを言うな!!」

さつきの発言にこの場にいた連中が全員反応していやがる。

「な、なあ、坂本」

「なんだ、鳴上？」

「結婚は両親の同意を得たうえで18歳以上だぞ」

「誤解だああーっ!!」

翔子のせいでいらぬ誤解を与えることとなってしまった。

「つてかおまえら。そんなことよりBクラス戦の会議だ!!」

強引に話をBクラス戦に持っていくことにした。

それに対して他のみんなは温かい目や羨むような目、嫉妬が含んだような目を向けてくる。

しかし、依然として姫路が無表情というか心ここにあらずみたいな状況だが…。

本当にどうしたんだ？

## 20 Bクラス戦5

悠 side

「ドアと壁をうまく使え！Bクラスの奴らをここから出すな!!」

花村が指示を出し、他のみんなはそれに応えるように攻め入る。

今回の作戦は単純である。

敵を教室に閉じ込めろということらしい。

今のところは順調に事を進めている。

しかし、一つ気がかりなことがある。

それは、昨日の放課後あたりから姫路の様子がおかしいことだ。

「左の出入り口の戦力が足らぬ。誰か援軍を頼むぞい!!」

左の出入り口は古典、右の出入り口は数学となっている。

秀吉は古典が得意だったと思うが、Bクラスには文系が多いらしく、抑えるのはなかなか厳しいのだろう。

「姫路、援護に行ってくれ!!」

「あ、そ、そのっ…」

やはり様子が変だ。

ん、花村が古典の先生に何か言っている？

「少々、席をはずします!!」

古典の先生は突然頭を押さえていなくなる。

「姫路さん、どうかしたの？」

「そ、その、なんでもないですっ」

近くで姫路と吉井が話をしている。

姫路は吉井に対し何もないと否定はしているが、動作が大きい分何かがあったことを示しているだろう。

「右側の教科が現国に変わった!!」

「数学教師はどうした？」

「Bクラスに拉致られた!!」

破壊、人質に続いて拉致か。

これは本当の戦争にしか見えなくなってきたな…。

「私が行きますっ!!」

そういうと姫路は右側の出入り口に行った。

「さも……っ!!」

そして召喚しようとして、何故か止まった。

姫路を見ると、Bクラスの教室の奥を凝視している。

吉井と花村が覗き込んだので少し気になり、俺もその視線の先を見た。

そこには、一つの封筒を持った生徒の姿があった。

おそらく、それが姫路にとって大切なものなんだろう。

物を使つての脅迫か。

Bクラスの協定の目的はこれだったのか。

「姫路さん」

「は、はい……?」

「調子が悪いなら早くいってくれないと。他のみんなも心配しちゃうから、あまり戦線に加わらないようにして休んでて」

「……はい」

「じゃあ、僕達是用があるから行くね」

そう吉井が言って、吉井、花村、俺が動く。

「まずは坂本に報告だ」

「そうだね」

そうして、俺たちはすぐにFクラスの教室に行った。

「坂本、話がある」

「ん、どうした鳴上？」

「俺だけじゃない。吉井と花村もいる」

「そうか。それで、お前らはどうしてここに戻ってきたんだ」

「単刀直入に言う。姫路を戦線から外すように頼みに来た」

「…理由は？」

「…どうしてもか？」

「いや、ならいい」

なにか感じたのか、あまり追求はしないでくれた。

「それじゃ、姫路を戦線から外す代わりに、一つの条件を出す」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役割をお前たちがやるんだ。成功するなら何をしてもいい」  
「わかった」

「任せろ!!」

「絶対に成功させて見せる」

「お前らにはタイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛けてもらう。科目はなんでもいいが、Bクラスの出入り口はあのままだからな」

そして、少しの話し合いの末、作戦を実行した。

陽介 side

「3人とも、本当にやるんですか？」

「はい、もちろんです」

「こいつらとは一度決着をつけねえといけないんで」

「俺も、彼らのことを知るためにこうしたかったので」

俺たちは今Dクラスの教室で三つ巴のように三角形で立っている。



近くには英語担当の遠藤先生がいる。

「でも、なんでDクラスでやるのですか？」

「吉井と花村は『観察処分者』なので、Fクラスで行うと教室を壊しかねないので」

そう言っているが、本当の目的は違う。

本当の目的は、不意を衝くための作戦だ。

「もう一度考え直した方が…」

「いえ、もうやると決めましたから」

「——わかりました。お互いを知るために喧嘩をするというのも、教育としては重要なかもしれませんね」

そう言いながら召喚フィールドを展開する遠藤先生。

それを見た俺たちは揃ってこう言った。

「「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>ン</sup>!!」」

## 雄二 side

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこのうえないっての」

Bクラスの奥で根本がそういつてくる。

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

「はあ？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？それにしても、Dクラス戦の時は姫路を使って代表を討ち取ったと聞いているが、今回は姫路を使わないのか？」

「……お前から相手じや役不足だからな。今回は休んでもらってるさ」

「ほう。Dクラス相手に使って俺たちBクラスに使わないとは、なめてるのか？どうせ、後ろに控えてもらって攻めるんだろ？」

その一言に疑問を感じた。

俺は姫路に何かをしたのはてつきり根本だと思っていたのだが、なぜそのことをあいっは知らない？

「どうだろうな」

ドン、ドン

DクラスとBクラスの境にある壁から音がする。

おそらく明久たちが何かやっているのだろう。

「さつきからドンドンうるせえな。何かやってるのか？」

「さあな。人望のないお前に対する嫌がらせか？」

「まあいい。そろそろ決着だ。一気に押し出せ!!」

「一旦引くぞ。立て直してもう一回攻める」

「どうした、散々ふかして逃げるのか？」

あとは任せた、明久、陽介、鳴上。

陽介 side

召喚してからどのくらいたっただろうか、俺たちはずっと喧嘩をしてるように見せながら作戦を実行している。

「そろそろだ」

「わかってるよ」

「一気に決める」

「君たちいったい何を!!」

怪しむ遠藤先生をよそに、俺が壁にクナイを突き立てる。

そしてそこに向かって鳴上は思いっきり太刀の峰を当てる。

この短時間の操作で慣れることができたようで、正確に当てるとそこに罅が入る。

「いけ、吉井!!」

「だああーっしやあーっ!!」

吉井の叫び声と同時に壁が壊れる。

作戦ははじめから教室の壁を壊し、不意打ちを仕掛けることだった。

「んなっ!!」

流石の根本も予想できなかったのだろう、その表情はかなり驚いているように見える。

「遠藤先生、Fクラス花村が…」

「Bクラス山本が受けます! 試獣<sup>サ</sup>召喚<sup>モン</sup>!!」

「くっ、近衛部隊か…」

「は、ははっ、残念だったな。お前らの奇襲は失敗だ」

もちろんこうなることは予想していた。

そして、2つ目の作戦が実行される。

Bクラスに鳴る2つの足音。

そう、これは1人の教師と1人の生徒である。

「…Fクラス土屋康太、Bクラス代表に」

「Bクラス真田が受けます」

「甘いな。前回のことがあった以上、これも予測済みだ」

これも破られた。

しかし、これもまた想定内のことだ。

教室を壊し攻め入った俺と吉井、窓から入った土屋。

ん、鳴上はどうしたかって？

それなら…。

「Fクラス鳴上、Bクラス代表根本に保健体育勝負を申し込む」

普通に教室のドアから入ったみたいだ。

ドアのところにいたBクラスの連中はどうやらみんなして坂本のほうに向かったら

しく、入口が完全にがら空きになっているみたいだ。

近衛部隊は俺たちや土屋が引きつけているので、1対1になった。

Fクラス 鳴上悠 VS Bクラス 根本恭二

保健体育 378点 VS 保健体育 203点

鳴上の操作技術の向上と点数の差で、すぐに決着がついた。

鳴上は召喚獣の太刀を使い、動揺して隙だらけの急所に一閃し、根本の召喚獣は消えた。

そして、同時にBクラス戦はFクラス勝利で終わった。

## 21

## 悠 side

「それじゃ、嬉し恥ずかし戦後対談といくか」

Bクラス戦が終わり、今は戦後対談を行っている。

「まず、根本、お前に聞きたいことがある」

「…なんだ？」

「俺たちと協定を結んだ理由は何だ？」

坂本は一番気になることを質問した。

「…Cクラスを使って協定違反を告発しようとしたことだが」

「ほかにはないのか？」



「動揺させることが目的だったからな。それ以外に何かある?」  
「そうか。それなら、これを見てどう思う?」

そうやって坂本が見せたのは壊れたFクラスの設備。

「これはお前らと協定を結んでいるときに起こったことだ。Bクラスの連中が設備や道具を壊して回ったらしい。幸い里中が教室に行ったことで被害は僅かで済んだが…」

「待て!!俺はそのことを知らない!!」

「嘘をつくな!!破壊した連中もお前が指示したと「待って、坂本君!!」どうした、里中?」

「そのことで鉄じ…、西村先生も交えて話があるの」

「里中、今、鉄人と言いかけなかったか?」

「き、気のせいです…」

そして、1日目の出来事を振り返ることになった。

千枝 side

雪子と一緒に坂本君の護衛をしていた時、お腹が痛くなっちゃってトイレに行った。そのちようどあたしがいなくなかった時にBクラスから協定の話が来たらしい。トイレを済ませて教室に戻ってみると、なにやら不穏な影が見えた。

「なあ、本当にやるのか？」

「なに、この壊れかけの教室を少し壊すだけだ」

「ばれたら大変だろ？」

「そこは根本が指示したとでも言っておけば回避できるさ」

「こればかりは根本が代表だったことに感謝だな」

そう、教室に来た連中は設備を壊そうとしていた。

実際ならそのまま教室に入って壊す前に止めるんだけど、物理攻撃はまずいと思って細井先生を呼んでから向かった。

改めて教室に着くと壊す音が聞こえてきて、そこですぐに教室に入った。

「な、なんでFクラスの奴がここに？」

「協定で出払ったはずじゃなかったのか？」

その時の連中は6人いて、卓袱台を壊す、鞆をあさる、筆記用具を壊すことをしていた。

「逃げるぞ!!」

「逃がすか!!細井先生、召喚許可を!!」

「承認します!!」

そして召喚フィールドを展開してもらった。

でも、1人取り逃がしてしまった。

そして、その1人がおそらく姫路が動揺してしまうきっかけを作ったんだと思う。つまり…。

「根本君は教室の破壊に関与してないと思うよ」

悠 side

そういうことだったのか。

そうすると、影から誰かが声をあげた。

例の教室を破壊した人物たちだ。

「な、何を言っている!!」

「俺たちは根本に脅されたんだ!!」

「大体、証拠なんてあるのか?」

「土屋君!!」

「…確認済み、これが証拠」

そう言うと、スピーカーから里中の発言通りの音声流れる。

反発していた生徒も顔を青ざめ静かになった。

「そうか、なるほどな。教室の破壊はお前たちが原因だったのか」

「い、いや、これは…」

「貴様らにはしつかりと補修をする必要があるな」

「「「「「きいやあーっ!!」」」」」」

そして西村先生は彼らを連れて行こうとした。

「つと。その前に、その男子」

「は、はい!!」

「盗んだものはどこにあるの？」

「こ、これだ!!」

そして先ほどの便箋を渡す。

「それじゃ、あたしは瑞希のところに行ってくるね」

そうやってBクラスの教室からいなくなつた。

「つてことは、根本、お前は何も悪くなかつたんだな」

「はじめからそういつてるだろ!!」

「あー、なんか、その、すまなかつたな…」

近くでは坂本が根本に謝っていた。

誰だって間違いはあるが、仕方ないだろうな。

「それじゃ、話をもどそう。設備の交換のことだが、本来ならそのつもりなんだが、条件さえ何とかしてくれば免除しようと思う」

「その条件はなんだ？」

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備ができていると宣言するんだ。ただし、宣戦布告はするな。あくまで、戦争の意思があるとだけ伝えるんだ」

「それだけでいいのか？」

「ああ。本当ならもつとひどい罰ゲームを用意していたんだが、別にお前が原因で姫路がああなったわけではないからな。それは無しにした」

「それって何なんだ？」

「…女装させてAクラスに行つてもらつて、そのあとその姿で写真撮影を…」

「…もう言わないでくれ」

坂本は何がやりたかったのだろうか。

気にしても仕方ないか。

「それで、交渉はどうする」

「その交渉は受けよう。どう考えてもこちらにしか得がないように感じるが……」

「なに、こつちにも考えがあるんでな」

「そうか」

そして、戦後対談が終わった。

もちろん、壁を壊したことは職員室で叱られたが、俺は初犯、吉井と花村は言っても仕方ないということですぐに終わった。

職員室から出て少し歩いていると、近くで話をしていた生徒の声が聞こえた。

「ねえ、知ってる？今年の入学生でやばい奴いるらしいぜ」

「らしいな。あの有名な不良だろ？」

「よく染物屋のあたりにうろついているって噂だな」

そんな話を聞いた後に花村達のほうを見ると、なぜか顔を青ざめさせていた。

「どうしたんだ？」

「い、いや。今日の壁壊す時にフィードバックで血が出ちゃって…」

「服について落ちねーから染物屋でしみ抜きに行こうと思ってたんだが…」

何ともついてない2人だ。

「それなら後日でもいいんじゃないか？」

「それはそうなんだけど、早いうちのほうがいいかなって」

「そうだ、坂本にでも用心棒になってもらおうぜ」

「いいね!!」

そして教室にもどったんだが…。

「なんでまだお前らは帰ってないんだ？」

そこにはいつものメンバーが残っていた。



「まあ、いろいろあつてな」

「そうか」

「ねえ雄二」

「なんだ、明久？」

「これから陽介と染物屋に行こうと思つてたんだけどさ、妙な噂を聞いたからさ、用心棒になつてほしいんだ」

「ああ、あの噂か。別に気にすることは無いと思うんだが…」

「そこを何とか!!」

「……ああ、わかつたよ」

真面目に頼んでるからなのか、はたまた今回功績をあげたからなのか、しぶしぶではあるが着いていくことを了承したようだ。

「そんじやとつとと向かうか。ほかに行くやつはいるか？」

「俺も吉井と同じ用があるから行くぞ」

「俺も今回原因を作った1人だからな。行くぞ」

俺や花村はすでに行くつもりだったため行くことは決まっていた。

「あたしも興味あるからついていこうかな」

「わ、私は…」

「私もちよつと…」

「きつと大丈夫よ。危なくなったらウチと千枝が助けるつて」

女性陣は里中と島田が天城と姫路を引つ張つていく形で同行。

「ワシもついていこうかのう。今日は部活も休みだしなのう」

「…なにか役に立つ情報が手に入るかもしれない」

木下も土屋もついてくるようだ。

「結局いつものメンバーだな」

「んじゃ、いくぞ」

そういうとみんなで目的地に進み始めた。

## 22

## 悠 side

学校を出て歩くこと十数分、そこに老舗の染物屋である異屋があるらしい。

ただ、このあたりに来てから、何か天城が考え事をしている。

「どうした、天城？」

「えっと、染物屋の付近にうろついている不良ってところに疑問があつて。もしかして…」

「おい、着いたぞ」

「そうみたいだな」

中に入り周りを見渡すと、さまざまな染め方をした布が飾られていたり、他にもスカーフや浴衣も飾られていた。

話し声があるので部屋の中央付近を見ると、ここのお店の人と、なにやら探偵みたいな恰好をしている少年がいた。

「それじゃあ、僕はこれで。興味深い話ありがとうございました」

「いえいえ、あんまり役に立てなくてごめんね」

「そんなことはないですよ。それでは」

そういつて、少年は立ち去ろうとした。

「ちよつと待ってくれんかのう?」

——のだが、なぜかその少年を木下が引き止めた。

「どうかしましたか?」

「いや、少しばかり気になったことがあってのう。ちよつと外で話でもせんか?」

「:別に構いませんが」

そして、木下と少年は出て行った。

「どうしたんだろう、秀吉？」

「まあ、あんまり気にしなくてもいいだろ」

「あら、雪ちゃんいらつしやい。相変わらずキレイねえ。今日はどうしたのかしら？」  
「ちよつと友達がここに用があつたみたいで」

そして、吉井と花村が服を渡す。

「あら、血で染まつちやつただけなのね。それならすぐに落としてきてあげるわ」

「あんまり、驚かないんですね」

「なに、完ちゃんが喧嘩ばかりするから気にしなくなつちやつてねえ」

なんだか物騒な言葉を聞いた気がする。

「や、やつぱり物騒だね…」

「な、なんか心配だな…」

「ところで…「すまぬ、遅くなつたぞい」」

天城が店の人と話をしようとしたところ、木下が帰ってきた。

「さつきは突然どうした、秀吉」

「いやのうち、少しばかり気になることを話してきただけじゃ。それより、今文月の制服を着た新入生がここに向かってきてるのじゃが…」

「そ、それつてもしかして…」

「…噂の不良」

「うち、少しこわくなってきたわ…」

そして、足音が近づき、ついにその扉が開かれ…。

「ただいま…なんだこの大所帯は？」

噂の不良が現れ…。

「あれ、完二くん？」

「ん、吉井先輩？」

吉井の間の抜けた声とそれに驚いた不良が顔をあわせていた。

明久 side

ここに入ってきた噂の不良はなんと完二くんだった。

「どうしてここに完二くんが？」

「どうしても何も、ここ俺ん家っスよ」

「そうだったんだ。だからあんなに手先とか器用なんだね」

「…できればその話はしたくないんスけど」

「なあ、吉井。説明を頼んでいいか？」

「う、うん。完二くんは僕の小学校の時の友達なんだ」

『え？』

ほとんどみんなが驚いたような声をあげた。



「そんなに驚くことかな？」

「そりや驚くわ!! 噂の不良が実は知り合いでしたーとか普通ないわ!!」

「なあ、吉井。どんな経緯で知り合ったんだ？」

「たしか、僕が小学2年の時に、その時使ってた布の入れ物が壊れちゃって、それで裁縫が得意だっっていう友達がいるって教えてもらって、それからかな」

「そうっスね」

「正直見た目とか声とか全然違ったけど、やっぱりわかるものなんだね」

「そういう先輩はあまり変わってないっスね」

「そうかな？」

「そうっスよ。てか、1つ聞いていいっすか？」

「なにかな？」

「なんでこんなに大所帯で『お前(きみ)(あんた)の噂が原因だ(よ)(じゃ)!!』俺のせいっすか？」

どうでもいいけど、なんでうまくハモったんだろう？

「まあ、原因を作ったのはその明久だけだな」

「吉井先輩っすか？」

「この不良っていうのがちよつと心配で…。まさか完二君だったとは…」

「い、いやいや。俺こそ噂のせいですまないっす。つと、ん？なんだか見覚えのある先輩が…」

そう言って、完二くんは雄二を見る。

「もしかして、悪鬼羅刹？」

「久しぶりだな、巽。中学以来か？」

「雄二も知り合いなの？」

「ん？ああ。知り合いとはいっても、ただの喧嘩だ」

「お袋がそんな時悪鬼羅刹のことを気にしていたんで、得意の喧嘩で止めようとしたんすよ。まあ、悪鬼羅刹の行動はあくまで正当防衛みたいなもんで、誤解だつてわかったんすけど、そのあと不良グループの乱入があつたりしてめんどくさかつたっす」

「もしかして、雄二があまり心配することじゃないつて言つた理由つて…」

「簡単に言えば、人は見かけによらないつてことだ。巽も話せばいい奴だからな」

まっ、噂も解決したし、いろいろと結果オーライだね。

「お待たせしたね。シミは落ちたよ」

「ありがとうございます」

「完ちゃんや雪ちゃんの友達みたいだし、お代はサービスしてあげるよ」

「本当ですか？」

「ありがとうございます」

そういうえば、お金のことを考えてなかったや。

「それでは、もう行きますね」

「そうかい。またいつでもおいでね」

「完二くんも時には僕たちのクラスにきてね」

「うっす。いける時は邪魔させてもらうっす」

そんな感じで、噂の不良は僕や雄二の知り合いだったということが終わった。なんか、皆にとっても迷惑かけちゃったや。

…まあいつか。

「明久」

「なに、雄二？」

「付き添いしてやったんだから、陽介と一緒に皆になんかおごつてくれよ」

「『そんな話聞いてないよ（ねえぞ）！！』」

「いいだろ？ さんざん心配と迷惑かけたんだからよ」

「確かにのう」

「…もちろん賛成」

「ウチは何貰おうかな？」

「簡単に飲み物でもお願いしましょうか…」

「フイレ、フイレ！！」

なんだかもうおごる雰囲気…。

「吉井」

「なんだい、陽介」

「もう、腹くるしかねえな」  
「そうだね」

その日、僕の所持金は底をついた。

## 23

悠 side

「まずは皆に礼を言いたい。俺たちFクラスがDクラス、Bクラスと勝ち進むことができたのは、他でもない皆の協力があつてのことだ。感謝している」

昨日の染物屋の件から二日後の朝、壇上の坂本はFクラスに対して礼を言っていた。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

確かに、学力の低いFクラスが、Dクラスはおろか、Bクラスに勝とうとはほとんど  
の人が思わないだろう。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればい

いってもんじゃないうという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

「おおーっ！」

「そうだーっ！」

「勉強なんていらなんだーっ！」

最後の人物には勉強は必要だと言いたいが、士気が上がっている中でそんなことを言う勇氣はない。

「次に、Aクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと思っている」

「どういうことだ？」

「誰と誰が一騎打ちを？」

「やるのは当然、俺と翔子だ」

その言葉に、クラス内はどよめく。

「お前らも知っている通り、確かに翔子は強い。正直不安がるのはわからなくもない。だが、Dクラス、Bクラスと、自分たちより上のクラスに勝ち続けることができた。そ

「して今回も同じだ」

坂本は一拍おき、

「俺は翔子に勝つ！俺たちの勝利は揺らぐことはない！！俺を信じて任せてくれ。神童と言われた俺の力、今皆にみせてやろう！！」

「おおおーっ！！」

すごい士気の上がりようだな。

このままでいればいいんだが…。

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「この前のCクラスへの牽制の時に霧島さんと呼んでた時も気になったんですけど、霧島さんとは、その……仲がいいんですか？」

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」



坂本の発言にFクラスのほとんどの男子が立ち上がって上履きを構えた。

「なっ!?!なぜ須川の号令でみんなが急に上履きを構える?」

「黙れ、Aクラス戦の前にお前を殺す」

なにやら物騒な雰囲気…。

Fクラスはなぜこんなにも嫉妬深いんだろうか。

「なあ、お前ら」

「なんだ、花村。お前は坂本が憎くないのか?」

「俺は別にどうとも思わないが…。それよりお前ら、暴力をふるう男子を女子が見て  
いったいどう思う? 少なくとも、二度と女子と仲良くなれないぞ」

「「なにいいいいーっ!!」」

その暗い雰囲気を花村がたった一言で打ち消した。

勇気が出なかった自分が少し情けなく感じる。

「まあ、いろいろあったが、Aクラスに勝つぞ!!」

「「おおおーっ!!」」

場所は変わってAクラス

「失礼すr」……受けてもいい」って早いなおい！まだ何の話もしてないだろ!!」

Aクラスの教室に入ると同時、霧島が声をだして坂本が驚いていた。

「……雄二の考えていることは大体わかる」

「それなら、何を考えてここにきたか言ってもらおうか」

「……Aクラス対Fクラスの一騎打ち。対戦相手は雄二対私」

「本当に当てるやがる……」

「ここは流石学年主席とも思えばきなのだろうか。」

「……ただし、条件がある」

「なんだ？」

「……一騎打ちは5回行う。科目の選択権は2つはAクラス、残り3つはFクラス。そして、負けた方はなんでも1つ言うことを聞く」

「いいだろう、交渉成立だ」

「……勝負はいつ？」

「そうだな。10時からでいいか？」

「……わかった」

そして話は終わり、教室を出る。

「よし、それじゃあ、学園長のところに行くぞ」

「えっ、急にどうしたの？」

「お前、この前のことを忘れたのか？ Aクラスに勝った時の報酬を変えるためだ」

「あ、ああ、そんな話あったね…」

ということ、学園長のいるところへ向かった。

「失礼しまーす」

坂本はノックもせず、学園長室へと入って行った。

「確かに失礼な奴だね。ノックもせずに入ってくるとは思わなかったよ」

「学園長。突然ですがお話があつて「却下さね」だからまだ何も言つてないだろう!!」

確かに、問答無用で却下する気持ちはわからなくもない。

失礼な行動と突然の要求は厳しいものがある。

「まあ、話だけなら聞かせてもらおうか」

「俺たちはこれからAクラスと試召戦争をする」

「ほお。それはまた気楽なものさね。それで、話はいったい何だい？」

「もしAクラスに勝てたら、その時の報酬をAクラスとの教室の交換ではなく、Fクラス  
のみの再度振り分け試験にしてほしい」

「なるほどね。でも、アンタらはそれでいいのかもしれないけど、他のガキたちはどうな

んだい」

「それに関しては説得をするから問題ない」

どんどんと話が進む。

そして、話はついた。

「どうせAクラスには勝てないだろうからね。報酬くらいなら別に變えてやろう」  
「ありがとうございます」

当初の目的は達成された。

あとはAクラスに勝つのみだ。

「失礼しました」

「失礼するならもう来るんじゃないよ」

そう言つて学園長のもとを去る。

「さて、Fクラスに戻るか。作戦会議をするぞ」

いつの間にか、時間は9時を過ぎ、開戦予定の10時まで残り1時間を切っていた。

ここまで来たからには、Aクラスに勝つ!!

…俺はこの一騎打ちに出るのだろうか？

## 24 Aクラス戦1

悠 side

「では、両名共準備はいいですか？」

ついに、FクラスVS Aクラスの対決が始まろうとしていた。

「ああ」

「……問題ない」

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行かせてもらおうわ」

そう言って、木下に似ている女子が出てきた。

「木下、あの女子は誰だ？」

「ん？ワシの姉上のことか？」

「そうなのか」

つまり、木下とその女子は双子ということか。

「Fクラスからは俺だ」

対するFクラスは花村。

「科目はどうしますか？」

「そっちが決めていいぞ」

花村には教科を選択しないように言っているらしい。

おそらく操作技術だけで勝ちにしているらしい。

「あら、それなら数学でお願いします」

「それは困るな……」



「アタシには得意な教科ってないから、あなたの苦手な教科にして、確実に勝ちに行くつもりよ」

「やっぱりそんな考えか…。それじゃ、いくぜ!!」

「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>ン</sup>!!」

木下の姉の召喚獣は西洋の鎧にランスを装備している。  
対する花村はクナイのため、リーチにはかなりの差がある。

Fクラス 花村陽介 VS Aクラス 木下優子

数学 96点 VS 数学 327点

点数を見る限りでは3倍以上の差があるため、どうやっても不利だ。

「先手必勝よ!!」

そう言つて、木下の姉の召喚獣はランスで突っ込み始める。

「そんな簡単な突っ込みじゃ、わかりやすいぜ」

花村は簡単に躲し、すれ違う瞬間にクナイを振り下ろす。

しかし、それは鎧に当たったたらしく、あまり点数を削ることができなかった。

Fクラス 花村陽介 VS Aクラス 木下優子

数学 94点 VS 数学 313点

しかも、鎧に当たった衝撃で花村の点数も減っている。

「つち、いってーな!!」

「そういえば、アンタ観察処分者だったわね」

「悪いか?」

「別に、何でもないわ」

「そうかよ。そんじゃ、今度はこっちから行くぜ!!」

花村の召喚獣はジグザグに動き出した。

対する木下の姉は動きが読めずあたふたしているようだ。

「そこだっ!!」

そして、少しの隙間を狙ってクナイを突き出す。

木下の姉はうまく反応できなかったのか、それを避けきれず当たった。

Fクラス 花村陽介 VS Aクラス 木下優子

数学 94点 VS 数学 277点

しかし、それでも40点程度しか減っていない。

「やっぱり点数の差がありすぎるな」

「それでも結構いいの貰っちゃったわね…。でも、負けないわ」

「それはこっちのセリフだ!!」

「またアタシから行くわ!!」

そう言ってまた突っ込み始める。

「だからバレバレだつて…っ？」

さつきと同じように避けて反撃しようとしたのだろう。

しかし、避けたと同時にランスを花村の召喚獣の方向に倒し突っ込んだため、先端の鋭利な部分ではないが、花村の召喚獣に命中した。

Fクラス 花村陽介 VS Aクラス 木下優子

数学 13点 VS 数学 277点

あまり強くヒットしたようには見えないが、点数の差が激しく、かなりの点数が持つていかれたようだ。

「何度も同じことすると思ったら大間違いよ」

「ぐっ…。もろに命中しちゃった…」

「どうやらここまでみたいね」

「いや、まだあがかせてもらおうぜっ!!」

直後、花村の召喚獣は持っていた2本のクナイを投げる。

突然の行動に反応が遅れた木下の姉の召喚獣は避けようとするものの、1本は頬をかすめ、もう一本は腕の部分に命中する。

Fクラス 花村陽介 VS Aクラス 木下優子

数学 13点 VS 数学 249点

しかし、点数が低いのが影響し、あまり点数を与えられなかった。

「まだやるかしら?」

「いや、降参だ」

「そこまで、勝者Aクラス!!」

1戦目はAクラスの勝利となった。

「すまねえ、負けちまった…」

「気にするな、花村。こういう時もある」

「続いて、二回戦の方、どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

そう言って出てきたのはボブカットの女子だった。

「Fクラスからは私が出ます」

Fクラスからは天城が出るようだ。

「<sup>サ</sup>試<sup>モ</sup>獣<sup>シ</sup>召喚!!」

Fクラス 天城雪子 VS Aクラス 佐藤美穂

物理 427点 VS 物理 389点

佐藤の召喚獣はネイティブアメリカンのような恰好をしており、手には鎖鎌を持って

いる。

対する天城は400点を超えており、腕輪を持っている。

「400点超えですか、厄介ですね…」

「たまたま調子が良かっただけよ。それじゃ、すぐに決めさせてもらうわ。腕輪発動!!」

そういうと、佐藤の召喚獣を中心に、炎が取り囲み始めた。

それは、徐々に迫っているように見える。

「に、逃げ場がない!!」

「私の腕輪の能力は焰舞よ。炎が舞をするかのように相手を囲っていくわ。その分消費が激しいんだけどね」

Fクラス 天城雪子 VS Aクラス 佐藤美穂

物理 277点 VS 物理 戦死

囲っていた炎が消えると、佐藤の召喚獣の点数はもうなくなっていた。

「そこまで、勝者Fクラス!!」

Fクラスから雄叫びが聞こえる。

これで一勝一敗となった。

「やったよ、千枝」

「やっぱり雪子ってすごいね」

「よくやった、天城。これで立て直せる」

「どういたしまして、坂本君」

「あと3回戦だ。相手は強敵だが、倒してやろうぜ!!」

「「おおおーっ!!」」



## 25 Aクラス戦2

悠 side

「続いて、三回戦の方、どうぞ」

現在の状況は1勝1敗、科目選択権はAクラスが早期決着を狙い2回使ったので、Fクラスが3つ残っている。

つまり、有利な状況になっている。

「…俺が行く」

「任せたぞ、康太」

Fクラスからは土屋が出るらしい。

「じゃ、ボクが行こうかな」

出てきたのはライトグリーンでショートヘアの女子だ。

「1年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

どうやら工藤というらしい。

俺と同じ転入生のようだ。

「科目はどうしますか？」

「…保健体育」

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？でも、僕だつてかなり得意なんだよっ。」

なるほど、どちらも保健体育が得意なもの同士か。

工藤は軽い口調で話しているものの、やはりAクラスとあつて態度はしっかりと…。

「キミとは違って、実技で、ね」

「…！じ、じつ…ツ!! (ブシャー…ツ!!)」

工藤はAクラスでかなりの変わり者のようだ。

突然の爆弾発言によって土屋は大音量で鼻血を出している。

この量は致死量なんじゃないか？

「康太、大丈夫？」

「…ああ、問題はあまりない」

吉井が土屋を心配して駆け寄る。

実技と聞いて土屋は何を想像したのだろうか？

「どうしたの土屋君、そんなにこつちをジロジロ見ちゃって。あつ!!もしかしてスカートの中でもみたいのかな？」

「…す、スカートの中に興味は…」

「言ってくれば見せてあげるのに、えいつ!! (チラツ)」

「…わ、我が、生涯に、い、一片の、悔いなし (ブシャーアア…ツ!!)」

「康太あーっ!!」

「土屋君は続投不能のようですね。どなたか土屋君の代わりに出場してください」

「どうやら土屋は血を出しすぎて勝負どころではなくなってしまったらしい。」

花村と木下によつて保健室へと連れていかれた。

「すまないが里中、頼んでいいか？」

「任せといて。保健体育ならあたしも得意だから、精いっぱい頑張ってくるね!!」

代理出場は里中のようだ。

「時間が少しかかりすぎているので、すぐに召喚をお願いします」

「はい、試獣<sup>サモモン</sup>召喚<sup>ン</sup>つと」

「いくよ、試獣<sup>サモモン</sup>召喚<sup>ン</sup>」

Fクラス 里中千枝 VS Aクラス 工藤愛子

保健体育 402点 VS 保健体育 446点

工藤の召喚獣は、セーラー服に召喚獣の背丈以上ある大きな斧だった。そして、お互い400点を超えているため、腕輪を装備していた。

「やった、400点超えた!!」

「へえー。キミも保健体育すごいんだ。でも、ボクも負けないよ」

工藤の召喚獣は巨大な斧を持つてると思わせないようなくらの速度で詰め寄っている。

さらに召喚獣の腕輪が光り、斧に雷光をまとわせている。

「それじゃ、一気に行かせてもらおうよっ!!」

その言葉と同時に斧をふるった。

里中の召喚獣は間一髪その斧を避けるが、まとっていた雷光を避けきることはできず、里中の召喚獣に電気が走る。

Fクラス 里中千枝 VS Aクラス 工藤愛子  
保健体育 336点 VS 保健体育 416点

「あちゃーつ、雷までは避けきれなかったか…」

「それでも今の斧の一振りを避けるとは思わなかったよ。思った以上にすごいね」

「まあ、伊達に2回試召戦争しているわけじゃないからね」

「やっぱり経験の差みたいだね」

「そうそう。それじゃ、あたしもいくよ!!」

そういうと里中の召喚獣の腕輪が光る。

すると、里中の召喚獣の足元に突然氷が現れ、地面を伝って工藤の召喚獣の方に向かって行く。

「うわっ!!」

そして、その氷が工藤の召喚獣の手につく。

「ありや、当たっちゃった。…えっ、徐々に凍ってる？」

「あたしの腕輪は氷結よ。相手を凍らせて徐々に点数を減らしていくんだって」  
「うわっ、それは厄介だね…」

Fクラス 里中千枝 VS Aクラス 工藤愛子

保健体育 286点 VS 保健体育 377点

少しずつ凍っていき、同時に少しずつ点数が減っていく。

「でも、やられっぱなしじゃないよっ!!」

工藤はそういうと、斧によって氷を砕き、周囲を走りまわる。

「ちよつと、待ってってば」

「誰だつて凍らされたくはないとおもうよ…」

里中の召喚獣は氷を使って工藤の召喚獣を追いかける。

すると、突然工藤の召喚獣は里中の召喚獣の方向に走ってきた。

「後ろから氷、前には標的だね。いくよっ!!」

「いや、また避けさせてもらおうよ」

里中の召喚獣の蹴りは惜しくも横に避けた工藤を掠めるだけだった。

「それと、ボクの後ろには何があったっけ？」

「えっ?」

そこにあつたのは自分の腕輪の氷。

そう、里中は自分自身の攻撃に突っ込んでしまった。

Fクラス	里中千枝	V S	Aクラス	工藤愛子
保健体育	144点	V S	保健体育	341点

工藤も凍らされた部分があつたため、少しずつ点が減っていたが、里中はかなりの部



分が凍り付いたこと、そして腕輪を長時間使っていたため、大きく点が減った。

「う、腕輪解除っ」

なんとか腕輪を解除し、氷が溶けていく。

同時に、工藤の召喚獣の手についた氷も溶ける。

「予想以上にやられちゃった、けど、まだ…」

「いや、これで終わりだよ」

工藤は一言だけ言うと、雷光をまとった斧を水たまりへと差し込む。

雷は水を伝い、里中の召喚獣を襲う。

Fクラス 里中千枝 VS Aクラス 工藤愛子

保健体育 戦死 VS 保健体育 311点

溶けた氷が水となり、それが服や体についていた里中の召喚獣は、一瞬にして点数を

刈り取られてしまった。

「そこまで、勝者Aクラス」

3回戦はAクラスの勝利となった。

これにより、Fクラスには後がなくなった。

「ごめんね、坂本君」

「いや、これは仕方がない。少しばかり相性が悪かったな」

「そうですよ、千枝ちゃん。頑張ったんですから、気にしちやダメですっ」

「うん、ありがと、瑞希!!」

## 26 Aクラス戦3

雄二 side

「続いて四回戦の方、どうぞ」

三回戦まで終わり、今のFクラスの戦績は1勝2敗。  
つまり、危機的状况となっている。

「どうするの、雄二？」

「少し考えさせてくれ」

俺はこの状況を打開するのにどうしたらいいか考えていた。

次の試合はおそらく今年の次席の久保だろう。

姫路を出し、点数で勝負に行くか、明久を出し、操作技術で勝負に行くか…。

いや、待てよ…。

幸いなことに、科目の選択権はこちらにある。  
ということとは…。

「明久、行つてくれ」

「えっ、僕が行くの？」

「ああ」

「でも、行くのは姫路さんのほうが点数も上だし…」

「科目の選択権があるんだ。お前の得意な科目と操作技術を組み合わせれば、姫路以上にやれるさ。」

「…うん、わかった。がんばるよ」

「負けたら承知しないからな」

「行かせておいて酷くない!？」

お前ならいけるさ、明久…。

明久 side

今回の戦争は参加しないだろうと思ってたんだけど、まさか呼ばれるとは…。仕方ない、僕にできることをしっかりとやらなきゃね。

「それでは、Aクラスからは僕が行こう」

Aクラスからは久保君が出てきた…って、ええ!?

「待って、雄二!! やっぱ僕を出したのは間違いだって!!」

「大丈夫だ。お前自身を信じろ!!」

とは言ってもね…。

相手は学年次席、対する僕は**バカの代名詞**の**観察処分者**だ。

まあ、**バカの代名詞**の**観察処分者**は理由が理由だけど、それでも大きく学力の差がある。

本当に勝てるだろうか？

「科目はどうしますか？」

そうだった。

今の科目選択権は僕にある。

でも、僕の得意科目って久保君の得意科目と重なるよね？

いや、それでも行くしかない!!

「日本史でお願いします!!」

「やあ、吉井君。久しぶりだね」

「うん。…あのさ、久保君」

「なんだい？」

「油断しないで本気でかかってきてね。僕も自分のできる限り全力で行くからさ」

「勿論さ。こちらも全力を尽くさせてもらうよ」

「サモシ試獣召喚!!」

Fクラス 吉井明久 VS Aクラス 久保利光

日本史 267点 VS 日本史 434点

久保君の召喚獣は袴の上にさらに鎧を着たような容姿をしていて、装備は大きさの異

なる2種類の鎌を持っている。

勿論400点を超えているため腕輪もある。

対する僕は学ランに木刀。

「いろんな意味で絶望だね…」

「それじゃ、さっそく腕輪を使わせてもらおうよ」

久保君は腕輪を使った。

すると、半透明の刃が僕の召喚獣に向かって飛んできた。

「一直線なら、避けられるかな」

僕の場合は観察処分者の仕事で操作してる時間が皆より多いから、難なく避けることができた。

「やっぱり単純に攻撃しすぎたかな？」

「いや、見えにくいし早いから、いい攻撃だったと思うよ」

Fクラス 吉井明久 VS Aクラス 久保利光  
日本史 267点 VS 日本史 404点

点数消費は30点みただね。

「さてと、僕も行こうかな」

そうやって僕の召喚獣を動かす。

あえてまっすぐに。

「そういう吉井君も直線的じゃないか」

「どうだろうね」

久保君の召喚獣は止まったまま僕の召喚獣を待ち受ける。  
そして僕の召喚獣が久保君の目の前に来たところで…。



「よつと」

「なっ!!」

体を横にずらす。

久保君の召喚獣の攻撃は鎌が大きい分ゆっくりなうえ、攻撃を止めることは難しいはず。

これで大きく隙ができた。

「おらおらおらおらあーっ!!」

「くっ…」

頭へ、首へ、急所めがけてラツシユを続ける。

僕の召喚獣の武器は木刀であり、久保君の召喚獣の武器よりかなり軽い。

そのため、短い時間で次々と攻撃することができる。

Fクラス 吉井明久 VS Aクラス 久保利光

日本史 267点 VS 日本史 236点

そして、久保君の点数は元の半分くらいまで下がった。

「流石だね吉井君。まさかここまで操作がうまいとは思わなかった」

「まあ、数少ない取り柄だしね」

「ただ、やはり実践は多くのことを学べるようだ。大体の使い方はわかったよ」  
「…できれば嘘であってほしいんだけどね」

休みのないラツシユのせいで、既にかかなりの体力を消耗してしまった。

ここで使い方がわかってしまったとなると、点差があっても危険だ。

「いくよ、吉井君」

再び久保君の召喚獣は風の刃を飛ばしてきた。

「だから、直線だと避けられるって…」

そう言っつて避けた先には――

――久保君の召喚獣がいた。

「そんなっ!!」

「避けた先のことを考えてみたのだけれど、うまくいつてよかったよ」

そう言っつて鎌を振り下ろす。

勿論隙を突かれたので避けることはできず…。

「ぎゃあぁーっ!!?体の前面を切り裂かれたかのように痛い!!」

Fクラス 吉井明久 VS Aクラス 久保利光

日本史 143点 VS 日本史 206点

激しい痛みと共に半分近くの点数を持っていかれた。

「さつきまでの努力が水の泡だよ…」

「残念だったね、吉井君」

再び久保君が優勢になり、落ち着いて話しかけてくる。

「いや、まだわからないよ…」

僕の召喚獣は再び木刀を構える。

そして、そのまま動かさず待つ。

「君が来ないなら、僕から行かせてもらおうか」

動かない僕の召喚獣を見て、チャンスと見計らったのだろう。

久保君の召喚獣は僕の召喚獣めがけて走り出す。

「…っ!!いまだあ!!」

そして僕の召喚獣の目の前に来た時、僕は木刀で久保君の召喚獣の喉のあたりに精いっぱい突きを入れる。

「…流石だね、吉井君。そんな作戦で来るとは思わなかった。僕の負けだ」  
「逆に言うと、これしか方法が浮かばなかったんだけどね」

Fクラス 吉井明久 VS Aクラス 久保利光  
日本史 143点 VS 日本史 戦死

木刀とはいえ、先端部分は多少なりともがっている。  
久保君の召喚獣のスピードが乗った状況で、反対方向から木刀の突きが急所の一つに入ったため、残りすべての点数を減らしきることができた。

「そこまで、勝者Fクラス!!」

Fクラスから喜びや驚きの声が聞こえてくる。

まあ、僕自身驚いてるから別にいいけど、信じてなかったのかな？

「よくやった、明久」

「どういたしまして、雄二」

「これで、あとは俺と翔子の試合を残すのみだな」

「勝てる、雄二？」

「ああ、勝てる。いや——」

——絶対に勝つ!!」

いつになく意気込む雄二。

下剋上が目的だから当然だね。

これで2勝2敗、次が最後の試合だ。

負けないでね、雄二!!

## 27 Aクラス戦4

悠 side

「最後の人、どうぞ」

ついに最終戦となった。

勝負の行方はAクラスとFクラスの代表同士によって決まる。

「……はい」

「俺の出番だな」

「教科はどうしますか？」

選択権はFクラスにある。

坂本はどの教科を選択するのだろうか？

「教科は基本教科総合だ!!」

「「なにいいーっ!!」」

坂本の宣言にFクラスが叫んだ。

「Aクラス代表に向かって基本教科総合とかふざけてるのか？」

「敵うわけないだろ!!」

「「そうだそうだ!!」」

Fクラスからの猛烈な批判が来ている。

「……雄二」

「なんだ、翔子」

「……Aクラス代表として、この勝負、負けない」

「いや、勝つのは俺だ、翔子」

「（……）試獣召喚!!」



霧島の召喚獣は日本刀に鎧、坂本の召喚獣は白い改造学ランに素手…いや、よく見るとメリケンサックがある。

そして、お互いに腕輪があつた。

Fクラス 坂本雄二 VS Aクラス 霧島翔子

基本教科総合 5488点 VS 基本教科総合 5773点

「「「「「はあああーっ!?!」」」」」

Fクラスだけでなく、Aクラスからも叫ぶ声が聞こえた。

「化け物だろ、あいつら…」

「なんであんな点が取れるんだ…」

正直、俺も驚いていた。

基本教科総合で腕輪をするには5200点を超えなくてはいけないが、まさか、ここまで点が高いとは思わなかった。

「ちっ、点数じゃ勝てなかったか…」

「……それでも、そこまで差はない。やっぱり雄二はすごい」

「俺より点数が高いお前に言われるとなんだか少しむかつくが、今はどうでもいい。い  
くぞ、翔子!!」

坂本の召喚獣が霧島の召喚獣めがけて走り出す。

「……甘い、雄二」

霧島は慌てずに霧島の召喚獣を操作し、正面に突っ込んできた坂本の召喚獣を避ける。

坂本の召喚獣は速度で勢いを増そうと考えていたのか、ブレーキが利かずに通りぬけた。

「予想通りだが、やっぱり操作は難しいな。明久や陽介を見ると、自分も簡単に操作でき  
るんじゃないかって思っちゃまう。」

「……それは私も同じ。2年になって初めての操作」

「その割にはうまく避けるじゃないか」

「……これは直線だったからできた。他の動きだところうまくはいかないと思う」

「そうか。なら、これでどうだ？」

「そういうと、坂本の召喚獣は再び霧島の召喚獣めがけて駆け出す。

「……同じことをしても無駄」

霧島は再び避ける。

「それはどうだろうな？」

今度は速度の調整をしたのか、坂本の召喚獣は霧島の召喚獣の横で止まる。

そして霧島の召喚獣めがけて攻撃の態勢に入った。

「おらよっ!!」

「……だから、雄二は甘い」

しかし、また避けられてしまう。

それだけではなく、日本刀によって斬りつけられる。

「ちっ、これもダメか」

Fクラス 坂本雄二 VS Aクラス 霧島翔子

基本教科総合 4917点 VS 基本教科総合 5773点

今の一撃で500点以上削られた。

切れ味はなかなかのものようだ。

「どうやったらあいつに攻撃できるんだ?」

「……雄二の行動パターンは読めてる。だから私には勝てない」

「パターンを読んだだけならまだいけるさ」

「……次は私から」

今度は霧島の召喚獣が動き出した。

「……雄二、覚悟」

「お前も甘いぜ、翔子」

霧島の召喚獣は日本刀を振り下ろすもメリケンサックによつてはじかれ、がら空きになった懐めがけて坂本の召喚獣の一撃が入った。

Fクラス 坂本雄二 VS Aクラス 霧島翔子

基本教科総合 4917点 VS 基本教科総合 5041点

当たり所が良かったのか、700点以上削ったようだ。

「……っ!!油断した」

「パターンを読まれるなら、いつもの動きをしなければいいだけだ」

「やっぱり、雄二はすごい」

「お前も十分すごいだろ」

坂本の召喚獣と霧島の召喚獣は接近したまま攻撃を始めた。

坂本の召喚獣のパンチが入れば、霧島の召喚獣の斬撃が入り、逆に坂本の召喚獣が斬撃を躲せば、霧島の召喚獣もパンチを受け流したりと、ある意味取っ組み合いみたいな感じになっている。

気が付けば、お互いの点数は僅かになっていた。

Fクラス 坂本雄二 VS Aクラス 霧島翔子

基本教科総合 376点 VS 基本教科総合 548点

「お互いあと一撃で終わるな」

「……負けない!!」

「俺だってそうだ」

すると、坂本の召喚獣の腕輪が光り出し、坂本の召喚獣は動きが遅くなる。

Fクラス 坂本雄二 VS Aクラス 霧島翔子  
基本教科総合 76点 VS 基本教科総合 548点

「おい、なんか遅くなつたぞ!!」

「……今ならっ!!」

霧島の召喚獣は接近し斬りかかる。

そして斬られる直前に坂本の攻撃が一気に加速した。

「おらア!!」

「……覚悟!!」

直後、打撃音と斬撃音が同時に起こり、点数が変動した。

Fクラス 坂本雄二 VS Aクラス 霧島翔子  
基本教科総合 戦死 VS 基本教科総合 戦死

「そこまで、この勝負引き分け!!」

何とも腑に落ちない結末となった。

「なあ、翔子」

「……何、雄二？」

「なんで腕輪を使わなかったんだ？」

「……点数があと少しかったから、使わないほうがいいと思った」

「そうか。それで、本音は？」

「……忘れてた」

「おい……」



## 悠 side

霧島との会話を終え、坂本が戻ってきた。

「すまねえ、あと一歩までいったのに勝てなかった」

「仕方ないよ、雄二。むしろ引き分けに持ち込んだんだからすごいよ」

「だが、学園長の条件を満たすことはできなかったからな…」

「また次の機会があるだろ？」

「負けなかっただけよかったよ」

「いい戦いをしたんだ。誰も文句は言わないだろ」

「そうか？それだといいいんだが…」

その後Fクラス集団の中に坂本が行ったが、ほとんどの人物が労いの言葉をかけていた。

一部引き分けたことに対する不満を言う人物もいたが、里中が、

「じゃあ坂本の代わりに出れば勝てたって人はいる？」

と言うと静まり返った。

「Aクラス対Fクラスの一騎打ちは引き分けということになりましたので、あとは双方の代表者で話し合いをお願いします」

しばらくして戦後対談が始まった。

「どうするの、雄二？」

「待ってくれ、いま考え中だ……」

「ねえ、坂本君」

「なんだ、天城？」

「少し提案なんだけど、聞いてくれるかな？」

「別に構わないが」

そういうと、2人で話し出した。

数分経って2人が戻ってくると、戦後対談が始まった。

「Fクラスから提案したいことがある。聞いてほしいんだがいいか？」

「……大丈夫」

「わかった。まず1つ目だ。Fクラスは今から3か月試召戦争をしないことにする」

「……雄二はそれでいいの？」

「いや、俺自身はまだ続けたいが、今やっても特にメリットはない。むしろ、Aクラスに勝てなかったことで士気が落ちてる今、やったところで得どころか損しかない」

やはり士気は落ちたか。

まあ、単純な考えで始まった戦争だったような気もしたから仕方ないだろう。

「2つ目に、不本意だが、Aクラスに命令権を譲渡する」

「ちよ、なに言ってるんだ坂本!!」

「いいの、そんなことしちやって？」

「だからさつき言っただろ？不本意だつて」

おそろく天城に言われたことなんだろう。

「……雄二」

「なんだ？」

「……なんで譲ってくれるの？」

「これで3回目だが、不本意だが、こつちから攻めておいて引き分けて何もなしにさようならだと、ただの迷惑なだけだからな。迷惑料としてだ」

「……そう」

「次に3つ目だ。まあ、これはお願いってことなんだが、Fクラスの設備を変えないでほしい」

確かに今でさえ酷い環境の中だ。

これ以上設備を下げられたらどうしようもない。

「……それは別に構わない」

「それは助かる。こっちからは以上だ」

「……Aクラスはその提案を承諾する」

対談は滞りなく済みそうだ。

「……それじゃ、私からの命令」

「ああ……。は？私だと？Aクラスじゃないのか？」

「……雄二、私と付き合って」

霧島は突拍子もなく発言した。

まあ、Bクラス戦の時の発言から、何となくそんな気はしてたが。

「いきなり告白とは驚いたな。見せつけるじゃないか、坂本」

「うるさいぞ鳴上。翔子、お前諦めてなかったのか？」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「つてか、それより、Aクラスの奴らのことを考えずにこんな告白して……」

「……大丈夫、戦争が始まる前に許可をもらってる。それに……」

「それに？」

「もしものことがあつたら手伝うって、雪子に言われたから」

おそらく、坂本はAクラスに命令権を譲渡せよになかったことにしようとしていたとおもう。

しかし、天城はこれをけじめとして譲渡するように言った。  
簡単に予想すると、坂本は天城に嵌められたな。

「天城!!」

「坂本君、お幸せに!!」

「おいおい……。翔子、これに拒否権は？」

「ない。だから、今からデートに行く」

そして、坂本と霧島はいなくなった。

その後、数秒なのか数分なのかわからない沈黙が訪れた。

「さて、Fクラスの諸君。お遊びの時間はそこまでだ」

沈黙を破ったのは補修担当の西村先生だった。

「あれ、西村先生、僕たちに何か用でも？」

「ああ、今から我がFクラスに補修についての説明をしようと思つてな」

その言葉に疑問があつた。

何故我がFクラスなんだ？

「福原先生から直々にお願ひがあつてな。先生では手におえないということで俺がFクラスの担任になつた。よかつたな、これで1年間、死に物狂いで勉強できるぞ」

「なににーっ!?!」

「とりあえず、明日から通常の授業とは別に補修の時間を2時間設ける」

「「なんだとっ!?!」」

「この補修ははじめの方はつぶれた授業を補う。それ以降は点数によつて判断する。そうだな、3教科以上Aクラス並みの点を取つたら免除でもいいだろう」

「「おおおーっ!?!」」

「勿論、自主的に参加しても構わないが」

「「それはいやだあつ!!」」

何故Fクラスのほとんどが叫ぶのかわからないが、授業の遅れた分を取り返せるならよかつた。

それにしても、この西村先生の補修はそんなに叫ぶほど嫌なのか？

まあ、それは補修を受ければわかるだろう。

そう考え、俺は家に帰ることにした。

「へえーつ。そんなことがあつたんだ」

夜、菜々子と食事をしながら、今日学校であつたことを話していた。

「結果はどうだったの？」

「残念ながら引き分けだ」

「そうなんだ。でも、一番強いクラスに引き分けつてすごいね」



「そうか？」

「うん!!」

菜々子は純粹にすごいと言ってくれる。

実際俺は出ていないが、何だかその事について口に出すことがもうできない気がする。

「そういえば、そろそろ文化祭の時期だな」

「文化祭？」

「ああ。学校で店とか展示とかするところだよ」

「へえ。菜々子も行きたいな」

「そうか？それなら叔父さんが帰ってきてから話でもしてみよう」

「本当？」

「ああ」

その後、夕食を終え、菜々子が眠ってから叔父さんが帰ってきた。

「なんだ、起きてたのか」

「はい。叔父さん、少し話があるんですけど」

## 29 林間学校

悠 side

「今から配布資料を配る。各自、しっかりと確認するように」

西村先生がFクラスの担任となつてから数日たった。

補修も数回受けたが、過酷ではあるが、その分身に付いている気がする。

まあ、それはいいだろう。

今配られた資料を確認すると、林間学校のお知らせとある。

「林間学校か…」

「今週末が楽しみだな」

と、花村と話をしていたのだが、周りからかなり暗い雰囲気が漂ってくる。

「なあ、坂本。なんでみんなはこんなに暗いんだ？」

「ん？ああ、お前ら2人は知らないのか」

「どういう意味だ？」

「この林間学校の目的は、『若者の心に郷土愛を育てる』ってことですよ」

「やることって言ったら、ここから見えるあの山でゴミ拾いくらいだな」

題材としてはある意味素晴らしい題材だが、ゴミ拾いで郷土愛と言われてもピンとこないな……。

「でも、夜って飯盒炊爨はんこうすいさんとかあるからちよつとは楽しいかもよ」

「班分けてされてるのか？」

「どうやら自分で決めていいみたい。たしか、最大10人かな？」

「そうか……」

……結果からいうと、坂本、吉井、花村、木下、土屋、里中、天城、姫路、島田、そして俺の10人の班となった。

その日の放課後。

俺の班は女子が買い出しをするということなので、荷物持ちとして手伝いに行つた。姫路は用があるらしく、先に帰つたが、当日は隠し味に何かを持つてくると言つていた。

もしかしたらその隠し味が危険なのかもしれないが、今はそのことを考えてはいけな  
いようだ。

なぜなら…

「ねえ、雪子、カレーって何入つてたっけ?」

「人参、ジャガイモ、玉ねぎ、それにピーマン、まいたけ、ふきのとう…?あれ、ふきの  
とうと『ふき』つて一緒?」

「どうかな?あと、カレーに片栗粉つて使うよね?」

「そ、そりや使うんじゃない?」

「使わないととろみつかないよね。じゃあ片栗粉と…、小麦粉もいるかな?」

「小麦粉つて、薄力粉と強力粉、どっちだろ?」

「強い方がいいよ、男の子いるし」

だんだん入れていくものが渾沌となっていくかごを持っている。考える余裕なんてなくなってしまふ。

「なあ、島田…」

「言わないで、鳴上。ウチもちよつと混乱してる…」

同類というと少し違うが、同じ心境の人物がいて少しほつとした。

しかし、このことを言う勇氣は俺にはない。

気が付くと、かごの中にはさっきの食材とトウガラシ、キムチ、コシヨウ(黒、白)チョコ、コーヒー牛乳、ヨーグルト、豊富な魚介類etcが入っていた。

こんな調子で明日の林間学校は大丈夫だろうか。

——林間学校当日、夕方——

「うへー、きつかった…」

「流石に自転車が放置されてるとはね」

花村と吉井がかなり疲れた様子だ。

「…まだ使えそうなカメラが捨てられていた」

「演劇用の小道具として使えるかのう？」

土屋と木下は何かを拾ってきたようだ。

まさか、自分のものにするのか？

「それにしても、夕飯が楽しみだね」

「あの4人の手料理か」

「…（ブルブル）」

「康太よ、なぜ震えておるのじゃ？」

「大方、姫路が料理をしてないか気になってるんだろ？」

「大丈夫だよ、きつと周りがフォローするよ」

「里中はあんま期待してないけど、天城は旅館の跡取りだからな、きつとすつげーのがくるぜ！！」

「それは、楽しみだな」

言いたい。

みんな、本当にすまない。

止められなかった!!

でも、言い出せない…。

しばらくすると、4人がこっちに来た。

「あーと、おまたせ。愛情は入ってるから」

「やったー、久しぶりのカロリーだ!!」

吉井、お前は普段どんな生活をしているんだ。

「それじゃ、いただきます!!」

パクツ…、ドサツ…、シーン……。

「え、ちよつ、吉井君？」



「大変、吉井君が息してない!!」

「え?だ、大丈夫、アキ?」

「吉井君!」

「おい、明久だけじゃなくて康太と花村も息をしてない!!」

「お主ら、大丈夫か!」

嫌な予感が再び脳内をよぎる。

「なあ、島田」

「何、鳴上?」

「もしかして…」

「多分、鳴上の考えはあつてるわよ…。それに、ウチも千枝達を止められなかったし…」

島田は里中たちを止められなかったことに対して罪悪感があるようだ。

俺もなぜ止められなかったのか。

いや、今は後悔している場合じゃない!!

「急いで吉井達の蘇生を!!」

—— 10分後 ——

「し、死ぬかと思つた…」

「なんか、見えてはいけけない景色が見えたような…」

「…川の向こうで誰かが呼んでた」

「危なかつたな、お前ら」

「あと少しで事件になるところだったぞ」

何とか救出に成功し、一息ついている。

例のカレーは仕方なく処分しようとして鍋のあるところに行つたところ、なべの底から穴が開いて、カレーがこぼれていた。

いったい何を入れたらこうなるんだ？

こうして、今年の林間学校は幕を閉じた。

このクラスでまともに料理ができる人物はいるのだろうか？

どうでもいいことだが、毎年水着を持って川に飛び込む連中がいて聞いていたが、

だ。どうやら今年は時期がいつもより早いらしく、そんなことをする人たちはいないよう

## 30

悠 side

林間学校の翌日、俺は菜々子と一緒にジュネスに買い物に行った。元々は一人で行くつもりだったのだが、

「私も手伝うよ」

ということ、菜々子と一緒に行くことになった。

「おっ、鳴上か。どうしたんだ？」

ジュネスに着くと、すぐに花村を見かけた。

「冷蔵庫の中身がもう少しでなくなりそうだから買い物に来たんだが。……なあ、花村」

「なんだ？」

「あのよくわからない着ぐるみはなんだ？」

「ああ、あれか。あれはクマだ。このマススコットキャラみたいなものだ」

「前来た時はなかったような気が……」

「最近できたからな。おーい、クマー」

花村がクマを呼ぶと、その着ぐるみが近づいてきた。

「どうしたクマ、ヨースケ？」

「いや、ちよつと紹介しておこうと思つてな」

「いや、それよりも着ぐるみがしゃべっていいのか？」

「それがクマだクマ」

「いや、そういうものか？」

まあいろいろあつたが、俺は（着ぐるみの）クマと自己紹介をしあつた。  
勿論菜々子も一緒に。

「クマ、そろそろ休憩入れろよ。たたでさえ着ぐるみじゃきついだろ」

「そうクマね。じゃあ行ってくるクマ〜」

「なんか、いろいろとつかみにくいな…」

「おーい、鳴上君、それと花村!!」

クマが戻ってから少しして、偶然なのか、里中が近づいてきた。

「どうした、里中？お前も面白い物か？」

「えーっと、ちよつと違うかな。友達と出かけててここに来たの」

「ちよつと、千枝、先に行かないでよ」

「そうですよ、千枝先輩」

少し遅れて天城、それと後輩が来たようだ。

「なんだ、天城と…え？」

「どうした、花村？」

「いや、だって…」

「うわあ、りせちゃんだ!!」

珍しく菜々子が大きな声を出した。

花村もなにか驚いたような表情をしている。

「なんでりせちーがここにいるんだ?」

りせちー、この愛称をテレビで聞いたことがある気がする。

「菜々子、知ってるのか?」

「うん。テレビに出てたの」

「そうか」

「自己紹介…は外でやるか。ずっとこんな場所じゃな」

『あっ!!』

しばらくして、俺たちは人の邪魔にならないところに集まって自己紹介をした。

途中で金髪の少年が来て、彼がクマで名前もクマだったことに若干驚いた。

最近引越してきたらしく、文月学園に転校してくる予定らしい。里中の後輩の名前は久慈川りせ。

もともと芸能関係にいたらしいが、最近休業をして文月学園の1年として学校に行っているらしい。

自己紹介が終わり、ここに来た目的を思い出した俺と菜々子は、ジュネスで安売りの商品を買ひ、その帰宅途中に木下と前に異屋で会った少年に会った。

「おお、鳴上か。こんな場所で会うとは奇遇じゃのう」

「そうだな。それと…」

「白鐘直斗です。以前異屋で会いましたね」

「そうだな。鳴上悠だ」

「ねえ、お兄ちゃん」

「なんだ、菜々子？」

「かわいいお兄さんとかっこいいお姉さんだね」

菜々子の発言に、俺を含めて3人は驚いた。



「ちよつと待つのじゃ、菜々子よ」

「そうだぞ、菜々子。木下はともかく、白鐘は…」

「なぜワシらの性別を一瞬にして…」

「えっ…」

状況を整理しよう。

菜々子はかわいいお兄さんとかっこいいお姉さんと言った。

木下はどちらかというとかわいいで、白鐘はかっこいいの方だろう。

つまり…。

「白鐘、お前女なのか？」

「……はい」

どうやら俺は白鐘の性別を見抜けなかったようだ。

木下の場合には制服で判断していたからわかったのかもしれない。

「まあいいか。それじゃ、俺たちはこれで行く」

「そうか。それじゃ、また学校での」

「鳴上さん、またお会いしましょう」

「ああ」

なんだか、驚くことが続いた一日だった。

まさか、買い物がここまで大きなことになるとは…。

「ごめんな、菜々子。今日は大変だっただろう？」

「うん。でも、とつても楽しかったよ」

「そうか」

「また一緒にどこかに出かけたいな」

「ああ、そうだな」

明日から文化祭の準備がある。

Fクラスはいつたい何をやるのだろうか。

それより、あの教室でなにかできるのだろうか。

そんなことを考えながら、俺は料理を作った。

## 3 1 清涼祭編 1

悠 side

文月学園に転校して早くも2つ目のイベントが待ち構えていた。  
清涼祭だ。

一般的でいうと文化祭、学園祭のようなものだ。  
今ほどのクラスでも準備が始まっている。

Fクラスはというと…。

「横溝、来いっ!!」

「勝負だ、須川!!」

「お前の球なんか場外に飛ばしてやる!!」

ほとんどの人物が野球をして遊んでいた。

「坂本、あいつら呼びに行かなくていいのか？」

「大丈夫だろ。そろそろ鉄人が動くだろう」

「お前ら、準備は…って、他の連中はどこだ？」

「外で野球を…」

「まったく、あいつらは…」

そう言つて西村先生は教室を出た。

しばらく経つと怒声がして、少ししてから野球をやつてた全員が担ぎ込まれた。

なんというか、ものすごい力だな…。

「さて、はじめに転校生のお知らせだ。入ってこい」

扉を開けて入ってきたのは、ジュネスで会ったクマ（着ぐるみじゃない）だった。

「ドーも、熊田クマクマ。よろしくクマ!!」

クマが転校してくるのは知っていたが、まさかこのクラスに転校してくるとは思わな

かった。

「それじゃ、俺はこれから用があるんでな。しつかりと出し物を決めるように。出し物すら決まってるのはこのクラスだけだからな」

西村先生がいなくなると同時に、坂本が立ち上がり、教壇の上に立った。

「さて。それじゃ、出し物について決めなくちゃなんだが、とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつらに全権を委ねるんで、あとは任せた」

どうやら坂本にやる気はなさそうだ。

遠まわしに全部誰かに押し付けて、自分はなにもかかわらないつもりなんだろう。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田と里中ということでもいいか？」

「え、ウチがやるの？ 召喚大会に出るから、ちよつと困るかな」

「あたしもちよつと…。それなら雪子とか瑞希は？」

「それはだめだな。2人とも全員の意見を聞いていくだろうからそれでタイムアップ

だ」

やる気はなさそうだが、クラスのことはしっかり考えているんだな。

「まあ2人で分担するんだ。何とかなるだろう」

「うーん、しょうがないわね。千枝、手伝ってくれる?」

「まあいいか。それじゃ、誰か候補を挙げて」

結果からしてうまくまとまりそうだな。

そう思っていると、近くで話し声が聞こえた。

「そういえば、柏木先生主催の2大コンテストって知ってるか」

「勿論だ。なんでも、ミスコンの方はこのクラスの女子全員が出るみたいだぜ」

その声が聞こえたのか、花村がそそくさと立ち上がって教室を出ようとする。里中はそれに気付いたのか、すぐさま追いかけていった。

「候補が上がる前に千枝がいなくなっちゃったわね…。アキ、悪いけど、手伝ってくれない？」

「え、僕？でも、僕に皆をまとめる力なんてないよ？」

「大丈夫よ、ウチもサポートするから」

「う、うん…」

「それじゃ、改めて候補を挙げて頂戴」

千枝 side

「ちよつと！待ちなさい花村!!」

「何のことだよ!!」

ミスコンにFクラス女子全員参加？

冗談じゃないっ!!

「逃げるってのは身に覚えがあるってことでしょ？」

「おっかけてくるからだろおお!!」



「どういふことか説明してほしいんだけど？」

「だから、なつ、何がだよ？」

「勝手にあたしらの名前書いたでしょ？」

「お、俺じゃねーって！」

話の直後に逃げ出した時点で誰が犯人だかはほぼ明確なはず。

でも、花村は否定し続ける。

「嫌なら辞退すればいいだろ？」

「今年の主催は柏木だから、申請されたら他薦でも強制なのよ!!」

「えっ…マジ!？」

驚いた時点で確信した。

やっぱり嘘をついてたみたいね。

「そっか…。そう言う細かいレギュレーションは見落としてたな…」

「やっぱりオマエじゃんか!!」

しばらくして、気絶した花村をおいて教室に戻ったら、候補が3つ上がっていた。

【候補1 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補2 ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補3 中華喫茶『ヨーロッパアン』】

なんだろう、このツツコミどころの多そうな候補は…。

「お前ら、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、黒板に書いてある3つです」

「ふむ…。補修の時間を倍にした方がいいかもしれないな」

最終的に、出し物は中華喫茶になった。

あたしもがんばらなきゃ。

悠 side

出し物が決まって、今度は役割分担を決めることになった。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けよう」

立ち上がったのは須川だった。

続いて、土屋も立ち上がった。

「康太、お主料理ができるのかの？」

「…紳士の嗜み」

普段の見た目とは思いつかないようなイメージで、正直驚いた。

「俺も厨房に行こう。家で料理を作る機会が多いから何かと助けになるだろう」

「じゃあ、僕も厨房に行こうかな。…少し前にやったバイトのホールで痛い目見たし」

吉井は以前にこういう仕事で痛い目に遭っているようだ。

一部の人物は苦笑いをしている。

「それじゃ、厨房はアキのところ、ホールはウチのところに集まって!!」

「どうする、千枝?」

「うゝん、まだ迷つてゐる。瑞希は?」

「私は厨房班に…」

「瑞希、千枝、雪子。ウチらはホールにしましよ」

「えっ、でも…」

「このクラスはただでさえ女子が少ないんだから、ウチらで盛り上げていかないと。それに、雪子は接客の経験とかがありそうだしね」

「そう、ですね。じゃあホールで頑張りますっ!!」

「まあ、仕方ないか。雪子、アドバイスよろしくね!!」

「えっ、もう、千枝つたら…」

島田、心の底から感謝する。

これでこのクラスから死人が出ることはないだろう。

何はともあれ、出し物と役割分担は決まった。

清涼祭、絶対に成功させてみせる!!

## 32 清涼祭編2

悠 side

放課後、帰り支度を終わらせ教室を出ようとする、花村に呼び止められた。

「なあ、鳴上。召喚大会に興味はないか？」

「召喚大会？」

「ああ。学園主催の催し物だ。なんでも、優勝すれば何かもらえるらしいぜ」

「そうなのか」

「それで、2人でペアを組んででなくちゃなんだが、一緒にどうだ？」

清涼祭の召喚大会に誘われた。

突然のことで少し驚いたが、俺はこう返した。

「ああ、構わない」

「そうか、助かるぜ」

断る理由もなく、これからの試召戦争に役に立つと思つたから、参加することにした。

「そういうば、島田も出るみたいなこと言っていたな。多分姫路と一緒にな」

名前が出たので島田の方向を向くと、処理落ちしている吉井と、それに戸惑う木下と島田がいた。

「秀吉…、モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい…?」

それだけでなく、吉井からは謎な発言が聞こえてきた。

そつとしておこう…。

「うっす、先輩、お疲れ様っス」

改めて教室を出ようとすると、扉を開けて完二たちが入ってきた。

「おお、完二か」

「りせに直斗もいるのか。どうかしたのか？」

「実は、これについて聞こうと思ひまして」

直斗から見せられたのは「ミス文月コンテスト」と書かれた用紙だった。改めて人数を見ると、やたらと多い。

「花村、なんでこんなに出場者が多いんだ？」

「いや、まあ、いつそのこと知ってる面子を何人か推薦しちゃえて思ってたな」

花村がとんでもない発言をすると、たちまち周りに殺気が現れた。

「花村、そんな簡単に決めたって言うの？」

「ウチも出る事になってるんだっけ？アンタの仕業だったの…」

「え、いや、その…」

「問答無用!!」



「ぎゃああああ!!」

2人がお仕置きという名の暴力を始めた。

非は完全に花村にあるため、フォローはしないことにする。

それにしても、何故里中の蹴りに合わせてうまく島田が関節技をきめるんだ？

「それで、ミスコンに関してはこの通りだ」

「なるほど…」

「ねえ。先輩は私たちに出てほしい？」

「ああ、楽しみだな」

「鳴上君も花村なんかに乗ろうとしなくていいから!!」

俺の発言に里中が反応する。

何か間違ったか？

「それにしても、困ったことになりましたね…。断れないのが確定ならもう議論に意味はないですが…」

「べ、別に問題ねえんじや…ねえか？てか出る！いいから！名探偵だろが!!」

いや、名探偵関係ないだろう…。

「ええっ!!探偵関係あるの？わ、わかったよ…じゃあ、出ます！」

「完二ー、やったね!!」

「う、うるせえ!!」

仲がよさそうでよかった。

これで少しは落ち着いて…。

「えー、連絡いたします。2年Fクラス吉井君、花村君、同じクラスの生徒を1人ずつ連れて学園長室まで来てください。繰り返しします——」

「マジかよ…。仕方ねえ、鳴上、一緒に来てくれ」

落ち着く暇はないようだ。

そのまま花村と一緒に学園長室に向かうことにした。

学園長室に着くと、すでに吉井と坂本がいた。

「……商品の……として隠し……」

「……そこそ……勝手に……如月ハイランドに……」

学園長室からなにやら話し声が聞こえる。

「失礼しまーす！」

それにも拘らず、3人は扉をノックしすぐに入っていく。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

「やれやれ、取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話をつづけることもできません。……まさか、あなたの差し金ですか？」

入っていった3人に対して冷たくあしらう学園長と、眼鏡をかけた教師がいた。

「馬鹿を言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。それに、もともとアタシがこのガキどもを呼んだのさ。とんだ来客はアンタの方さね」

「そうですか。それでは、この場合は失礼させて頂きます」

そう言うと、その教師は去っていった。

「遅かったねえ。さて、話を始めようじゃないか」

「その前に学園長、こちらからお話したいことがあるのですが」

「ふむ、まあ良いだろう。話くらいなら聞いてやるよ」

学園長からの話の前に、坂本が話を切り出した。

「Fクラスの設備について、改善を要求しに来ました」

「たしかに、部屋はボロボロ、窓は割れて隙間風が吹くし、ドアもガタが来てて力任せに開けてるもんね」

「豊ですら腐ったようなにおいを出してるな」

「いろいろ考えると、勉強する施設じゃないぜ…」

「とは言ってもねえ、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針…。もう一回言ってみな」

俺たちの発言が気になったのか、学園長はもう一度聞き返してきた。

「まとめていうと、健康状態を脅かすような設備なので、少しでもいいから改善の余地はないかということですよ」

「アタシが聞いた話だとそんなことは…。竹原、虚偽の報告をしたね…」

クラスの設備はどうやら学園長の管轄ではなかったようだ。

「いいだろう。教育者としてそんな教室では勉強させられないからねえ。時間はかかるかもしれないが少しは協力してやろう」

「「「ありがとうございます」」」

「それじゃ、今回呼び出した理由について説明するさね」

「「なんだババア？」」

「それが話を聞く態度かねえ…。今までの態度はどこへ行っちゃったんだか…」

その話とは、召喚大会についてだった。

なんでも、優勝者に贈られる2つの腕輪のうち1つに問題があるらしく、使用者の設定が観察処分者になっているらしい。

さらに、設定の変更ができないらしく、優勝してもらわなければいけないらしい。

「にしても、てっきり回りくどい言い方でもするんじゃないかと思ってたぜ」

「まあいい。ただしこっちから提案がある」

「なんだい？言ってみな」

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている。もしその対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

「ふむ…。いいだろう。点数の水増しとかなら一蹴してやろうと思っていたけど、それくらいだったらかまわないさね」

「ありがとうございます」

どうやら話は終わったようだ。

「さて、そこまで協力するんだ。当然召喚大会で優勝できるんだろうね？」

「無論だ、俺たちを誰だと思ってる」

「転校生に悪鬼羅刹にバカに運なし男だろ？」

「ああ。その通りだ」

「ちよつとまってええーっ!!」

学園長の発言と坂本の応答に吉井と花村が叫んだ。

まあ、あんなことをいわれたらそうなるかもしれないが…。

「吉井に花村、まだ誰がどれかって言ってるのに反応したってことは、認めたことになっちゃおうぞ」

「しまったああーっ!!」

無駄に叫ばせてしまった…。

そつとしておこう…。

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「「おうよっ!!」」

「はい」

それにしても、なんでこんな態度でいられるのだろうか…。

……俺もテンションを上げてこんな感じにした方がいいのだろうか？



### 33 清涼祭編3

悠 side

夢だと信じたかった。

でも、これは現実。

引き返すことはできなくなっていた。

——遡ること数時間前——

俺は校舎の中の張り紙を見ていた。

そこには「ミス文月女装コンテスト」という張り紙があった。

「女装コンって今年もやんのかよ。懲りねーなあ」

貼り紙を見てると、横から花村が入ってきた。

「そうみたいだね。柏木先生もよくやるよね」

吉井も入ってきた。

気になったので出場者を確認することにする。

「俺（僕）だーっ!!」

確認する前に、2人が叫び声をあげた。

余計気になったのでしっかりと確認することにする。

出場者（まだ募集中）

花村陽介

吉井明久

鳴上悠

坂本雄二

熊田クマ

土屋康太

木下秀吉

異完二

「俺もある…」

そこには俺の名前もあつた。

というか、なぜかものすごい人数が出場するんだが…。

「どういうことか説明してもらおうか!!」

すぐに教室に行き、花村が里中に向かってそう言った。

「なにが?」

「なにが?じゃねーよ!!女装大会俺らの名前書いただろ!!」

「あー、あれか。りせちゃんが「せつかくだからみんな楽しんでもう」って言ったから」  
「でも女装だぞ、女装!!」

「先にやったのはアンタらだろ!!」

確かに里中の言い分は間違っていない。

でも、原因は花村だけだから、どう考えてもとばっちりだろう。

「大丈夫、すっごくキレイにしてあげる」

「私も手伝いますっ!!」

「そういうこと言ってるじゃねーの!」

「あれ、でもそれなら陽介だけで、僕たちは関係ないよね?」

「それなら、千枝が行くって言ったときにウチとクマが推薦しといたわ」

「理不尽だっ!!」

それにしても、女装か…。

「…絶対キレイになるんだな…」

「保証する」

「うっお、マジかよ」

「鳴上君、本気で出るつもりなの？」

「出るからには、咲くしかない!!」

「おー、ユウはやる気みたいクマね〜」

「「お前（君）も原因だからな（ね）!!」」

何はともあれ、決定してしまったことなのでしょうがない。

その日の放課後、他薦されてしまった俺を含めて8人（1人は自薦）は、Fクラスの教室に集まった。

「にしても、これって本当にガチなんスか？」

「里中の奴、勝手なことしやがって…」

「…不愉快極まりない」

「しかし、集まっていったい何を話すというのじゃ？女装するだけでこんな騒ぎをする必要もあるまいし…」

あとあと知った4人のうち木下を除く3人はまともな発言だったが、何故木下だけ価値観が違うのだろうか。

とりあえず、話し合いを進めるために、俺が話し始めることにした。

「みんなにはもう事情が伝わっていると思うが、この女装コンテストは他薦でもキャンセルできない。そこで、俺はこう提案する」

そして、一拍おき、

「こうなった以上、みんなで女装コンテストに花を咲かせよう!!」

なぜか全員黙ってしまった。

しばらくして、花村が声を出した。

「は、ははっ。そうだな、どうせなら楽しくやらねーとな…」

「正直出たくないんだけどな…。決まっちゃってる以上仕方ないや」

「俺や巽の体つきでどうやって花を咲かせろってんだ…」

「決まっちゃってるっすからね、意地でも何かやるしかないっすよね…」

「…撮られるのは、恥ずかしい…」

「今から硬くなっても仕方あるまい。ここは男を見せる時、いや、女、なのかの？」  
「クマはいつでもオツケークマよ!!」

正直テンションにばらつきがあるが、まあ一つにまとまっただろう。

「それじゃ改めて、清涼祭、成功させよう!!」

「「「「「(∴) おう(うむ)(うん)(ああ)(うっす)!!「「「「」」

こうして、話し合いが終わった。

どうでもいいかもしれないが、ミスコンと女装コンの両方の名前があれから増えていた。  
た。

自薦か他薦かはわからないが、清涼祭はいつたいていどうなってしまうんだ？

## 34 清涼祭編4

悠 side

内容の濃かった準備期間が終わり、ついに清涼祭の日がやってきた。

不衛生でしかなかったはずのFクラスの教室は、坂本の統率によつてきれいな中華喫茶に変わっていた。

「支給される物資が少ないこのクラスで、ここまでしつかりとしたものが作れるとは思わなかったな」

「まあ、雄二はやるときはやるからね」

「お前が誇るな、吉井」

俺の一言に反応した吉井の発言に、花村がツッコむ。

「…飲茶も完璧」



「うわっ」

そして土屋によつて驚き尻餅をつく花村。  
いつもの通りだな。

「…味見用」

「美味そうだな」

「そういえば僕も作つてから試食してなかったや」

「土屋君、お上手ですねえ」

「土屋、ウチらももらつていい？」

「…（コクン）」

「それじゃ、いただくとするかの」

そう言いつつ、姫路、島田、木下、里中、天城、クマ、巽、りせ、そして白鐘が手に取る。

「つておい!!なんでお前らがここにいるんだ？」

「暇だったところにいいにおいがしたんで来てみたっス」

「完二と直斗くんと一緒に先輩のところに遊びに来ました!!」

「2人を止めたんですけど、止め切れませんでした…」

「えーつと、直斗くんはお疲れ様としか言えないわね…」

「それより、早く食べようよ」

里中の発言を皮切りに、胡麻団子を手に取った人物は頬張る。

「お、美味しいです!」

「表面はカリカリで中はモチモチね」

「甘すぎないのもまたいいのう」

「土屋君、とっても器用ね」

「普段は大抵静かなだけだったから、ちよつと見直したかも」

「コータは料理の才能があるクマね」

「先輩のところこんなおいしいもの作ってるんだ、いいな」

「確かにおいしい…」

「先輩がうらやましいっス。今のうちにもつと食べておくか」

異が2つ目の胡麻団子を取って食べ始める。

「……」

「どうした、異？」

「いや、さつきと違って、えっと、なんつついたらいいんだか……。不毛の味というか……」

味に不毛ってどういうことだ？

「モチモチした麩を生で齧ったような……」

「うん、わかりやすい説明ありがとな」

「それじゃ、俺も貰おうか」

俺も1つ手に取って齧ってみる。

「……辛い!!」

口に入れたと同時に辛さ、そしてあるはずのない熱さが混ざってまるで溶岩のようだ。

まだ口に入れて僅かのはずなのにだんだんと鉄のような味がしてきた…。  
何故だろう…。

口の中で鈍痛がする…。

これは、店に出してはいけない!!

「辛い？なんで胡麻団子が辛いんだ？」

「…食べてみればわかるぞ」

「ん？（パクツ）…!!」

すごい勢いで花村が汗をかき始めた。

「…あ、ああ、なるほどな。それじゃ、違う胡麻団子もらうぜ」

忘れようとしたのか、違う胡麻団子を取る。

「…うん、なんつーか、普通にまずい」

「ヨースケ、コータに失礼クマ!!」

「じゃあ、クマ、食べてみるよ」

「クマがこの胡麻団子はまずくないことを証明するクマ!! (パクツ)」

「どうだ、クマ?」

「…うん、まずい。おそらくさつき食べた胡麻団子と違うクマ…」

なんだかいろんな胡麻団子が混ざっている。

…こまでくると嫌な予感がするんだが…。

「ううっ、なんだか食べちゃいけないような気もするけど、僕も貰うね」

覚悟を決めたのか、吉井が残り1つの胡麻団子を食べた。

「ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず辛すぎる味わいがありなおかつ刺激のあるにおいがなんとも——んゴパッ」

珍妙な声を上げて吉井が倒れ、胡麻団子は皿の上へと舞い戻った。  
そこに坂本が帰ってきた。

「うーっす、戻ってきたぞー。ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ」

そして帰ってきてきそうそうに吉井の食べかけの胡麻団子（のような何か）を口に入れた。

「たいした男じゃ」

「坂本、お前は今素晴らしく輝いているぜ」

「？何が言いたいのかよくわからんが……。ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず辛すぎる味わいがありなおかつ刺激のあるにおいがなんとも——  
んゴパっ」

ん？

さっきもこんなことがあったような…。

「とりあえず、吉井、坂本、大丈夫か？」

「う、うん。問題ないよ」

「ふっ、何の問題もない」

「あの川を渡ればいいんでしょ（だろ）？」

きつとその川とは三途の川なのだろう。

「あれ、奇遇だね雄二。雄二もここに来たの？」

「ああ、何があったかは知らないが、ここを渡れば楽になるんだろ？」

うわごとまでも一致してしまった。

「急げ、心肺蘇生だ!!」

「あ、あの悪鬼羅刹ですら一撃だと…」

「気道確保、あとは心臓マッサージを!!」

俺と花村はすぐさま心肺蘇生を開始した。

「でも、川を渡るのに六万必要だつて言ってるんだよ」

「六万だと？馬鹿を言え。普通渡し賃は六文だと相場が決まってる…」

「はっ!!」

どうやら蘇生に成功したようだ。

「あれ、僕はいつたいたい何をしてたんだっけ？」

「俺も教室に戻ってきてから記憶がほとんどないんだが…」

「まあいいや（か）」

吉井に坂本、それでいいのか？

「そういえば、雄二はいつたいたいどこに行っておったのじゃ？」

「まあちよつとした話し合いだ」

「坂本、試召大会のトーナメント表はあるか？」

「ああ。これがそうだ」



坂本から渡されたトーナメント表を見てみると、俺と花村はどうやらAブロックのようだ。

吉井と坂本ペア、姫路と島田ペアはDブロックにいる。

「時間もそろそろだな」

「よし、じゃあ行くか」

「残念ながら、勝ち上がっても準決勝で当たるのか。まあ仕方ないか」  
「お互い気を付けようね」

そう言っつて、俺たち4人は動き出した。

この時はまだ、コンテストのことは忘れることができていた。

## 35 清涼祭編5

悠 side

「それでは、試験召喚大会1回戦を始めます。3回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください」

立会の先生は確かDクラス戦で見かけた気がするな。

確か数学の教師だ。

対する相手は2—Eのようだ。

「なんだ、Fクラスが相手なの。1回戦は楽勝ね」

「1人は観察処分者だし、すぐに片付きそうね」

Fクラスという理由だけでここまで蔑まれるものなのか。

文月学園、なんという学校だ!!

「へっ、Fクラスだからってなめてると痛い目見るぜ」

「本気で来い!!」

「それでは、召喚してください」

「「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚っ!!」」

Fクラス 鳴上 悠 VS Eクラス 中林宏美

数学 388点 VS 数学 119点

Fクラス 花村陽介 VS Eクラス 三上美子

数学 103点 VS 数学 113点

「待って、何あの点数!?!」

「花村、もう少し頑張らないか?」

「わりの、数学はどうしてもな…」

さて、相手の召喚獣を見てみよう。

中林の召喚獣はキャッチャー用のプロテクターに武器はバット、盾なのか、ミットを

持っている。

これから野球行ってくる的な雰囲気醸し出しているな。

三上の召喚獣は貫頭衣に本を持っている。

「それでは、始めてください」

先生の合図とともに中林の召喚獣が花村の召喚獣の方につつこんでいく。

三上は本を広げ何かを唱え始めた。

「美子、先に観察処分者の方を倒すわよ」

「2対1に持ち込めればチャンスはあるからね」

なるほど、作戦としては間違っていない。

しかし、花村と中林は点数的に近いが、おおきく異なるものがある。

それは…。

「言っただろ、なめてると痛い目見るってよ」

「嘘!？」

Fクラス 花村陽介 VS Eクラス 中林宏美  
数学 103点 VS 数学 64点

召喚獣の操作技術だ。

花村の召喚獣は中林の召喚獣の振り下ろしてきたバットの攻撃をかわし、隙ができたところに一発クナイで攻撃したようだ。

点数が低いこともあって、おおきく削ることができなかつたが。

「宏美、大丈夫」

「ええ、これからよ」

「いや、終わりだ」

中林の召喚獣が花村の召喚獣に向かって走っていったと同時に、俺の召喚獣は三上の召喚獣の方に走らせた。

「え、ちよつと、このっ!!」

三上の召喚獣は火の玉を出してきた。  
少し掠ってしまったが、点数にあまり変化はなかった。

Fクラス 鳴上 悠 VS Eクラス 三上美子  
数学 365点 VS 数学 103点

なるほど、出す度に少しずつ点が減るようだ。

「っ!!このっ!!」

三上の召喚獣の目の前についた時、なんと三上の召喚獣は本を振り下ろしてきた。  
予想外だったために、反応が少し遅れて本の角が頭に命中した。  
その時隙ができたので、持つてる太刀で一閃した。

Fクラス 鳴上 悠 VS Eクラス 三上美子

数学 302点 VS 数学 戦死

脳天ヒットは予想以上のダメージだったようだ。

「美子!!」

「よそ見すんな!!」

Fクラス 花村陽介 VS Eクラス 中林宏美  
数学 103点 VS 数学 戦死

中林が目をそらした瞬間を見逃さなかった花村は、中林の召喚獣の首めがけてクナイを刺した。

それによって決着はついた。

「勝者、鳴上・花村ペア」

隙をついただけの若干ひどい試合だったが、とりあえず1勝だ。

「よしつ、まずはこんなところか」

「まずまずの結果だな」

「嘘でしょ、Fクラスに負けるだなんて…」

「ああ、プレミアムペアチケットが遠のいていくわ…」

なんだか申し訳なく感じるが、学園長との約束もあるから仕方ないと思っておこう。

「それじゃ、教室に戻ろうか」

「そうだな。勝ったって報告と店の手伝いだな」

それだけ言って、俺たちはFクラスの教室へと向かった。



## 3 6 清涼祭編6

悠 side

一回戦目が終わり、花村と教室に向かって歩いてると、殴り合いをしている吉井と坂本を見かけた。

そういえば、ブロックごとに会場が違ったが、同じタイミングだったのかもしれない。ただ、殴り合いを仲裁する気はあまりないので、そっとしておこう。

見ないフリをして教室に向かっていると、木下が向かってきた。

「鳴上に陽介か、ちょうどいいところに。急いで教室まで来てくれんかの？」

少し小走りで来ていたところから、教室でなにかあったために探していたのかもしれない。

「何かあったのか？」

「喫茶店に少々面倒な客がおつての、それと、雄二と明久はどこじゃ？」

「校庭で殴り合いをしている」

「いったいあやつらに何があつたのじゃ……」

「とりあえず、呼びに行こうぜ」

木下が呆れつつ、吉井たちのところに向かつていくと、未だに殴り合いをしている2人がいた。

「吉井に坂本、ふざけてないで急いで教室に行くぞ」

「え、陽介？それに秀吉と鳴上くんまで」

「喫茶店に面倒な客がいるらしい」

「とりあえず詳しい話は歩きながらするのじゃ」

そう言うのと木下は歩き出したので、俺も後を続いた。

「……営業妨害か？」

隣にいた坂本が目を細めつつそう言った。

「あはは、まさか。学園祭の出店程度で営業妨害なんて出てこないんじゃない?」

「たしかに、何のメリットも存在しないからな」

「いや、それが雄二の言った通りなんじゃ」

吉井と花村は坂本の発言を信じてなかったが、それを一蹴するように木下が肯定した。

まさか、文化祭程度で営業妨害をする奴らが出てくるとは…。

「そうか、相手はどこのだいつだ?」

「うちの学校の三年じゃな」

しかもその営業妨害をしているのは三年生らしい。

「んじゃ、教室についたしちよつくら始末してやるか」

首を鳴らし、教室のドアに手をかける坂本。そしてドアを開けると…、

「なんだ、この机は!!衛生面ちゃんとしてんのか?」

「それなんだ、この胡麻団子。不味すぎてどうにかなっちゃう」

2人の罵声が飛び込んできた。

1人は机について、1人は胡麻団子について文句を言っている。

「ここって、段ボールをクロスでごまかしていたのね」

「食事処でこれはないな…」

このクレームに客が反応してしまっている。

しかし、誰も胡麻団子には文句を言っていない。

どういうことだ?

「秀吉、ちょっと来てくれ」

「なんじゃ?」

坂本は木下に耳打ちをしている。

演劇の小道具でも借りるのだろうか？

「一応用意はできるが、あってもおそろく2つくらいじゃぞ？」

「それでいい。足りない分は他から調達するさ」

「了解じゃ、すぐに戻る」

そう言うと、木下はクラスメイトに話しかけ立ち去った。

「なあ、坂本」

「なんだ、陽介？」

「胡麻団子のクレーマーの方は俺に任せてくれないか？ちよつといい方法があつてな」

「そうか、じゃあ俺は机のクレーマーの方を相手しよう。明久と鳴上は2人の特徴を覚えておくんだ」

坂本に言われた通り、簡単に特徴をとらえておこう。

営業妨害をしているのは2人。

背丈は一般的で机のクレームをしたのが丸坊主、胡麻団子のクレームをしたのが小さめのモヒカン。

非常に覚えやすい髪形で助かる。

「おい、責任者はいないのか？このクラスの代表ゴペツ!!」

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でも御座いましたか？」

「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが…」

「それは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒<sup>ぼうとく</sup>流ですか？」

そんな交渉術は存在しない、いや、坂本にのみ存在するのだろう。

「ふ、ふぎけんなこの野郎!!なにが交渉術ふぎやつ!」

「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後には『プロレス技で締める交渉術』が待っていますので」

起き上がった坊主の人に立て続けにけりを入れる坂本。

少しは客のことも考えるべきではないだろうか？

「わ、わかった！こちらはこの常村を交渉に出そう！おれは何もしないからこれ以上交渉は不要だ！」

「ちよ、ちよつと待て夏川！お前、俺を売ろうというのか？」

「常村先輩、あなたには違う話があるんで、交渉は夏川先輩にお願いします」  
「な、なんだと」

花村があの中に入って行って、夏川という坊主の先輩の顔が青ざめていった。

「常村先輩はあの胡麻団子が不味いといったみたいですが、本当にまずいんだったら返金をします」

「そうか、じゃああれはまずかった。返金してくれよ」

「本当にそうっすか？じゃあ周りのお客さんに聞いてみましょう」  
「んなっ!!」

どうやら花村も胡麻団子のことには気づいていたようだ。

「教室は残念だけど、胡麻団子は普通においしいわ」

「クレームに便乗して違う悪評を広めようとしてるだけツスね」

客に胡麻団子は好評なようだ。

「というか巽、なんでそこにいる？」

「くっ…」

常村というモヒカンの先輩が苦虫を嘔み潰したような表情になる。

「それで、常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？」

「い、いや、もう十分だ。退散させてもらう」

「そうか、それなら——」

そう言って坂本は夏川先輩の腰を抱え込むように持ち、同様に巽も常村先輩の腰を抱え持つ。



「おい、俺たちもう何もげぶるあっ!!」

「これにて交渉は終了だ（ツス）」

そろってバックドロップを決める。

巽、打ち合わせもしてないのになぜそううまく行く？

「お、覚えてろよっ!」

肉体的ダメージの少ない常村先輩が起き上がって夏川先輩を抱えていく。

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れてしまい、暫定的に今のようなものを使っていました。ただいま到着しましたのでご安心ください。また、先ほどのクレームでお騒がせしてしまって申し訳ありませんでした」

入口を見ると、秀吉とその他クラスメイトがテーブルを持っている。

衛生面を改善したというアピールだろう。

「それでは、他のテーブルも到着次第順次入れ替えさせていただきますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりとお寛ぎ下さい」

そう締めると、坂本、花村、巽がここに戻ってきた。

「ふう、こんなところか」

「なれないことすると疲れるぜ」

「お疲れ、雄二、陽介」

「2人とも、お疲れ。だが、巽はなぜそこに？」

「いや、試食させてもらった胡麻団子が美味かったんで、また食べに行ったらちようど遭遇した感じっス」

その遭遇でいきなり坂本に加担したときは少し驚いたが、気にしないことにしよう。

その後、吉井と坂本はテーブルの調達に、俺と花村はウェイターをした。

そういえば、試召戦争は吉井と坂本のペア、島田と姫路のペアともに勝利したらしい。

この後の対戦で勝ち上がって、対戦する時が楽しみだ。

## 37 清涼祭編7

悠 side

Fクラスで騒ぎが起きてから1時間弱、俺と花村は再び会場に来ていた。

「まったく、あの3年のせいであんまり休めた気がしないぜ……」  
「確かにそうだな」

花村は応対したこともあつてか、疲れが取れてないようだ。

「そういえば、次の対戦相手ってどんな奴なんだ？」  
「対戦表を見た限り、2―Dの清水と玉野ってあるな」  
「清水つてのはわかるが、玉野つて誰だ？」  
「わからない。俺は2人ともよく知らないからな」  
「そういえばそうだったな」

しばらくして、対戦相手と面を合わせた。

玉野の方はわからなかったが、清水の方は見覚えがあった。

確か、Dクラス戦の時に島田と一緒にいた気がするな。

「この豚野郎、この前の試召戦争の借りをきっちり返して差し上げますわ」

なんとも威圧感がすごい…。

「なあ、鳴上…」

「どうした、花村」

「俺すっげえ帰りにーんだけどき」

「奇遇だな、俺もだ」

どうにも清水に勝てる気がしない。

それどころか、本人から直接攻撃されそうだ。

だが、大丈夫だと信じるしかない。

今回の立会の先生は英語のようだ。

「「「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>シ</sup>!!」」」

清水の召喚獣は西洋風の鎧を着ており、西洋風の刀を持っている。玉野の召喚獣もまた刀を持っているが、服はなぜかセーラー服だ。

Fクラス 鳴上 悠 VS Dクラス 清水美春

英語 341点 VS 英語 132点

Fクラス 花村陽介 VS Dクラス 玉野美紀

英語 134点 VS 英語 147点

今回は花村も苦手教科ではないらしく、点数もそれなりに取れているようだ。

「それでは、始めてください」

「先手必勝だぜ!!」

開戦の合図と同時に花村が2人に対して突っ込んでいった。

「いくら観察処分で操作が上手いにしても、その戦法を取るのは大間違いですわ」

そう言うと、清水の召喚獣は花村の動きに合わせるかのように、攻撃を受け止めた。

花村は少し驚いた顔をしている。

しかもそれだけでは終わらず、横から玉野によって切り付けられる始末だ。

「ないわー……」

Fクラス 鳴上 悠 VS Dクラス 清水美春

英語 341点 VS 英語 132点

Fクラス 花村陽介 VS Dクラス 玉野美紀

英語 43点 VS 英語 147点

ただでさえ装甲の薄い花村の召喚獣は、すでに瀕死に追い込まれていた。

「これに懲りたら無理して突っ込むのは控えよう」

「そうだな、ただでさえ痛いつてのに…」

そういえば、観察処分者はフィードバックがあるんだったな。

「作戦がある。といつても、難しくはなくて簡単だと思うが」

「どんな作戦だ？」

簡単に説明をした後花村を後ろで休ませ、俺は2人に立ち向かった。

「行くぞ」

「甘いですわ、さっきの戦法をもう一人もしてくるとは」

「もう一人と同じ運命にしてあげます」

俺の場合、点数は高いが操作はあまりうまくいかない。

清水や玉野は点数こそ高くはないが、操作性は少なくとも俺を上回る。

花村は操作技術は極めて高いが、現在は点数が乏しい。

このことから、俺がしなくてはいけないこと、それは。

「んなつ!!」

右から来た玉野の召喚獣の刀を俺の刀で抑え、左から来た清水の召喚獣に刺されたままその召喚獣の腕を掴んで固定した。

Fクラス 鳴上 悠 VS Dクラス 清水美春

英語 263点 VS 英語 132点

Fクラス 花村陽介 VS Dクラス 玉野美紀

英語 43点 VS 英語 147点

もちろん、刺されてる以上点数の減り方は尋常じゃないが、この行動は目的があつてやっていた。

「う、動けないですわ…」

「あ、あと少して押し切れそうなのに…」



俺の目的は相手をその場から動かさせないことだ。

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜ」

そして、操作技術の高い花村によって、2人の召喚獣の急所に向かって攻撃してもらうという作戦だ。

「もしかして、点数の高い方を囿に使って攻撃するとは思いませんでしたわ」

「…まだ、避けれます」

清水の召喚獣は俺が固定していたおかげで倒すことができたが、玉野の召喚獣はあくまで刀で斬られないようにしていたため、寸でのところで避けられてしまった。

しかも、俺の召喚獣は刺され続けていた影響でさらに点数が減っている。

そして…。

「ないわー…」

再び花村の声がした。

見ると、玉野の召喚獣によって一突きにされている花村の召喚獣の姿だった。

ただし、玉野の顔も驚いているということは、自ら突っ込んでしまったのではないだろうか。

Fクラス 鳴上 悠 VS Dクラス 清水美春

英語 239点 VS 英語 戦死

Fクラス 花村陽介 VS Dクラス 玉野美紀

英語 戦死 VS 英語 147点

「花村、あとは俺に任せろ」

「ああ、頼んだぜ……」

「早く終わらせて、女装コンテストの撮影の準備を……」

何やら玉野が不吉な言葉を発している。

「とりあえず決着をつけるぞ」

そうして、俺の召喚獣は走り出した。

玉野の召喚獣に比べて刀のリーチは長いから、安心こそできないが、少しだけ落ち着いて対戦できる。

しかし、玉野もなかなか操作が上手いのか、攻撃に当たってくれない。

弱点もわからず困っていると、上から一枚の紙が玉野のところに落ちていった。

「これは…、アキちゃん!!」

「隙あり!!」

なぜかその紙を見て興奮したようだ。

玉野の召喚獣の動きが止まり、そのまま俺の召喚獣の攻撃が通っていった。

Fクラス 鳴上 悠 VS Dクラス 玉野美紀

英語 239点 VS 英語 戦死

「勝者、鳴上・花村ペア」

勝てたことはよかったが、玉野が見ている紙はいつたい何なのだろう。

「なにをやっているんですか、そんな写真一枚で試合を放棄するだなんて」

「そんな、写真一枚だなんて……。アキちゃんは世界そのものですよ。それをそんなものだなんて」

何やら言い争いをしている。

とりあえず、この場を立ち去ろうとすると。

「あ、鳴上君と花村君、女装コンテスト楽しんでますから!!」

俺だけではなく、花村も寒気が走ったに違いない。

## 3 8 清涼祭編 8

悠 side

寒気の走った2回戦が終わると、携帯電話に1本のメールが届いた。

From 堂島 遼太郎

Sub 菜々子を頼む

菜々子と一緒にいるんなクラスを巡ってたんだが、偶然菜々子の友達に会った。

その時に聞いた話だが、お前のクラスの悪評が広まっているらしい。

ここまでする必要はないかもしれないが、一応聞き込みをして、この学園長にも話をしておこうと思っているんだが、菜々子を連れていくわけにもいかない。

悪いが、お前のクラスのある階段のあたりでもう1人の女の子と一緒にいるはずだ。

合流して一緒にお前のクラスに連れて行ってやってくれ。

「ん、どうした、鳴上？」

「いや、なんでもない。それより、中華喫茶の悪評が広まっているみたいだ」

「マジかよ。つてか、多分あの3年だよな…」

「おそらくそうだろう。それで、花村はいち早くそれをクラスのみんなに伝えてくれ」

「了解。鳴上は？」

「…少し違う用がある」

それだけ言つて、俺は花村と別行動をした。

そして、簡単に叔父さんにメールを送つた。

T O 堂島 遼太郎

S u b 了解です

了解しました。

それじゃあ菜々子を迎えに行きます。

こつちでも何かわかつたら連絡します。

それから数分して、指示された場所にたどり着いた。

「あつ、お兄ちゃんだ」

声が出た方向を向くと、菜々子と菜々子より少しだけ背の高いツイントールの女の子がいた。

「待たせてごめんな」

「大丈夫だよ。葉月ちゃんもいたから」

「菜々子ちゃん、この人が菜々子ちゃんのお兄ちゃんですか？」

「うん、そうだよ」

菜々子と話をしていると、隣の女の子が菜々子に俺のことを聞いていた。

しばらくすると、その女の子は俺の方を向いて挨拶をした。

「初めまして、菜々子ちゃんのお兄ちゃん。葉月ですっ」

「初めまして、菜々子の兄の悠だ。よろしくな」

「はいっ。よろしくです」

こんな感じのほのぼのとした会話が繰り広げられ、少し時間が経ってから教室へ向かった。

扉を開けると悪評が広まっているせいか、教室には客の数が圧倒的に少なかった。

「そういうえば、人を探しているんだったな。何か特徴はわかるか？」

いきなり話が変わったが、あらかじめお兄ちゃんを探していると聞いたが、名前がわからないと言っていたので、家族ではないことはわかった。

そのため、一旦クラスに戻って聞いてみることにした。

「えつと…、バカなお兄ちゃんでした！」

感嘆符がつくくらい大きな声でそう言った。

しかし、それだけでは特徴として不十分だ。

「他に特徴はないか？」

「その…、バカだけどつても優しいお兄ちゃんでした！」



「「俺だな」」

クラスのほとんどの男子が自分だと言いつつ放った。

しかし、葉月は見向きもしないため、おそらく嘘をついているだろう。それにしても、バカであつて優しいか…。

「少し心当たりがある。ちよつとここで待つてくれ」

葉々と葉月を席に座らせて、俺は厨房に行った。

「吉井、おそらくお前にお客さんだ」

「えつ、ぼ、僕？」

吉井を連れて厨房を出ると、それに気づいた葉月が吉井の鳩尾めがけて突進していった。

「バカなお兄ちゃん、お久しぶりですっ！」

「えーっと、確か……。ああっ！あの時のぬいぐるみの子か！」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

吉井と葉月が話をしていると、いつの間にか菜々子が吉井のところ近づいていた。そして、

「久しぶり、お兄ちゃん」

俺にとって少し衝撃的な発言をしたのだった。

「久しぶり、菜々子ちゃん。元気だった？」

「うん、今はもう一人お兄ちゃんがいるから。お姉ちゃんは？」

「姉さんは……。いや、その話はまた今度ね」

「むう……。バカなお兄ちゃん、葉月とも話をするですっ！」

俺が吉井をここに連れてきたのは間違いだっただろうか？

いや、久しぶりの再会をさせたから良しとするべきだろうか？

そんなことを考えていると、吉井がこっちに戻ってきた。

「ありがとう、鳴上くん。それにしても、よく2人が僕の知り合いだってわかったね」

「ああ。それと、そのことについて1つ確認したいことがあるんだが」

「えっ、どうかした？」

そして、一番の疑問を、いや、少しこの答えは出てきているが、聞いてみることにした。

「菜々子とはどういう関係だ？」

「どういいうって言われても……。ただの従妹だよ」

想像している答えであって、できれば違ってほしかった答えが返ってきた。

実際、菜々子は俺のことをお兄ちゃんと呼んでいた。

従兄であり実兄でない俺をお兄ちゃんと呼んでいた。

そのことから確かにこの可能性は考えられ、同時にもう1つの可能性が浮かび上がった。

「それと、もう一つ。お前の母親の旧姓はなんだ？」

「えっ、そんなことも聞くの？まあ、別に隠してるわけじゃないから教えるけど」

そして、その可能性が肯定される返答が来た。

「堂島だよ。遼太郎叔父さんの姉だったか妹だったかは覚えてないけど」

さて、ここで血のつながりについて考えてみよう。

俺の母親と叔父さんが姉弟、そこに吉井の母親もその一人として関係している。

つまり…

「なあ、吉井、結論だけ先に教える。俺とお前も従兄弟みたいだ」

「えっ…。ええーっ！っ!!」

今日この時、俺と吉井は従兄弟であることを知った。

親戚関係なのに知らないとは…。

…俺もだが。

そんな会話をしていると、クラスの男子のほとんどが大声で教室を出ていった。あまりの出来事でどうしようもなかったため、近くにいたクマに話を聞いた。

「突然どうした？」

「どうもハツキチャンの言った言葉が原因で休憩していた男子が全員走っていった。まったクマ。全く、ゆっくり行ってもミニスカで接客してくれるお姉さんは逃げないクマよ〜！」

論点が違う気がしたが、クマのお陰でミニスカートの女子が店員という情報を知った。

情報は少し足りないが、これにたくさんの悪評を広げられそうな場所を考えると、人が多く集まれそうな場所だろうと考えられる。

つまり、少しでも教室が広い必要がある。

そして、一番教室が広いのは2年か3年のAクラス。

次に、女子が接客をしている。

これは、会計とかだけでなく、案内などを含めるとなると、場所としては喫茶店のよ

うな場所でないかと思う。

それを踏まえて考えると、喫茶店をしているのは2年Aクラス。

しかもパンフレットにはメイド喫茶とあった。

一番可能性は高いであろう。

とりあえず、叔父さんに連絡を入れた。

T o 堂島 遼太郎

S u b 犯人の目星

まだ可能性ですが、1つの情報を得ました。

悪評を流しているのは3年Aクラスの男子2人で、その場所はおそらく2年Aクラスです。

これから何人かで一緒に行動をするので、2年Aクラスで合流しましょう。

あとは、叔父さんがこのメールに気付いてくれることを祈る。

その後、俺は坂本のところに行った。

「坂本、場所と犯人の目星はついてるな？」

「ああ。おそらく常夏コンビだろう。いつそのことシバき倒すか？」

いや、これも悪評を広める原因じゃないだろうか？

とりあえず、坂本、吉井、花村、俺、菜々子、葉月、そして、試験召喚大会から戻ってきた姫路、島田を連れて2年Aクラスへと向かった。

余談だが、姫路と島田も2回戦は勝利したらしい。

## 39 清涼祭編9

悠 side

さて、1分かかったかどうか位の時間で2年Aクラスに着いたのだが、俺たちはまだ教室に入っていない。

理由は、叔父さんと合流していないから……ではなく、

「悪いが、お前たちだけで行ってきてくれ」

教室前で尻込みしている坂本が原因だ。

どうやら、教室にいる霧島のが気になっているようだ。

まったく、好きなら好きと「別に好きじゃねえ!!」俺は口にしてないんだが…。

霧島のことになると敏感なのかもな。

「坂本、いい加減素直になっただろうだ?」



「何のことだ？」

「しらばっくれるくらいなら別に教室に入ることくらい容易いだろ」

「言ってる意味がよくわからないな」

「まあとにかく、お前だけ残るのは変だから一緒に行くぞ」

「ちっ、しょうがねえな…」

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

島田が先頭でドアをくぐると、

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

出迎えたのはAクラス代表の霧島だった。

「わあ、綺麗……」

島田と一緒に入った姫路が呟く。

確かにすごく綺麗だ。

「そんじや、俺たちも入るか」

「そうだな」

「お邪魔しまーす」

「お姉さん、とても綺麗…」

「葉月もお姉さんみたいになりたいですっ!!」

「……おかえりなさいませ、ご主人様、お嬢様」

俺たちが入った時も同じように出迎えてくれた。

「ほら、早く来いよ坂本」

「…チツ」

花村の呼びかけに応じた坂本が舌打ちをしながら入ると、

「……おかえりなさいませ、今夜は寝かせません、ダーリン」

謎のアレンジが加えられた出迎えをされていた。

「霧島さん、大胆です……!」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな?」

「気にしちゃだめだよ、葉月ちゃん」

女性陣はそれぞれ変わったリアクションをしていた。

なぜか一番年下の菜々子が一番大人っぽく感じるのは気のせいだろうか?

「………そういえば、先客がいる」

そう言うと、霧島は1つのテーブルを指さした。

「あ、あははー……」

そこにいたのは里中と天城だった。

「あれ、天城さんたちも来てたんだね」

「翔子に会いに行こうと思ってるね。そういう吉井君たちは？」

「ここでFクラスの悪評を広めているっていう話を聞いたから、気になって来てみたんだ」

「そうなんだ。でも、あたしたちが来てからはまだ見てないかな」

「そうか……」

「……お待たせしました。こちらがメニューになります」

霧島がメニューを渡した。

待たせたというより、こっちの会話が終わるのを待ってくれたのだろう。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー!!」

「私も同じものをください」

女子4人はシフォンケーキを。

「僕は『水』で、付け合わせに塩があるとうれしい」

「吉井、お前未だにそんな生活してるのか？ ああ、俺は『ガトーショコラ』で」

「俺は『レアチーズケーキ』で頼む」

「んじや俺は……」

「……ご注文を繰り返します」

まだ坂本が注文してないのに霧島は注文読み上げた。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を4つ、『水』を1つ、『ガトーショコラ』を1つ、『レアチーズケーキ』を1つ、『メイドとの婚姻届け』が1つ。以上でよろしいでしょうか？」

「全然よろしくねえぞっ!？」

なるほど、密かに注文してたのか、これはこれは。

「……では、食器をご用意いたします」

女子4人と花村、そして俺のところ、吉井のところ、塩、坂本のところには実印と朱肉がおかれた。

「しよ、翔子！これ本当にうちの实印だぞ！どうやって手に入れたんだ!？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

そう言うと、霧島は立ち去っていった。

「坂本、やっぱりお前って霧島のことか?」

「違うっ!!普通いきなりこんなことありえるか!？」

まあ確かにそうだな。

「んで、葉月ちゃん。キミの言ってた場所ってここで良かった?」

「はいですっ!ここで嫌な感じのお兄さん2人がおつきな声でお話してたの!」

吉井と葉月の話から察するとやはり…。

「おかえりなさいませ、ご主人様」

「おう。2人だ。中央付近の席は空いてるか？」

そう考えてると聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あ、あの人たちですつ。さつき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言ってたですつ!!」

予想通り、悪評を広めていたのは常夏コンビだった。

「それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！」

「そうだな。さつきいた2ーFの中華喫茶は酷かったからな」

この発言に、吉井は構わず駆け出そうとし、それを坂本が止めた。

「待て、明久」

「なんで止めるのさ雄二!!あの連中を早く止めないと!!」

「落ちつけ吉井。今そんなことをしたらさらに悪評が広まるだけだ」

「じゃあどうしろって言うのさ!!」

「なに、やるなら頭を使えってことだ。おーい、翔子おー!!」

「……何?」

坂本に呼ばれた霧島が一瞬にして現れた。

あまりの速さに実は近くにいたんじゃないのかと錯覚してしまいそうだ。

「あの連中がここに来たのは初めてか?」

「雪子たちが来る前に出て行ってまた入ってきた。話の内容も全く変わらない」

「そうか……よし。とりあえずメイド服を貸してくれ」

坂本は少し考えると恥じらいもなくメイド服を要求した。

「………わかった」



霧島はそれにすぐ返答し、その場で……って。

「ちよ、ちよつと翔子、なにやってるの!？」

「……雄二がほしいって言ってたから」

「そう言う意味でほしいって言ったわけじゃないよ、坂本君は」

「そ、そうだぞ翔子。俺は予備のメイド服がほしいってことだ」

「……すぐ持つて来る」

なんとか坂本と天城によって止めることができたが、霧島は心なしかしよんぼりしているようにも見えた。

なぜだろうか？

「姫路、島田、天城、里中。誰でもいいから櫛を持っていないか？」

「あ、はい。持ってますけど……」

「ちよつと貸してくれ。他にも身だしなみ用のものがあれば」

「はい、わかりました」

姫路は坂本に上着にしまっていたポーチを渡した。

「悪いな。あとで必ず返す」

「……雄二、持ってきた」

「おう、すまないな」

「……貸しーっ」

「だ、そうだ。花村」

「わかったよ。お礼に今度坂本を1日自由にしてやるよ」

「……ありがとう、花村はいい人」

「ちよつと待て！なんで俺が！」

なんとというか、これは坂本の自業自得だな。

「それで、一体これをどうするんだ」

「着るんだ……」

力なく呟く坂本。

それに反応したのは吉井だった。

「だつてき姫路さん」

「え？わ、私が着るんですか？」

「バカを言うな。姫路が着ても攻撃なんてできないだろ？」

確かに、姫路が着たところで、あの2人には攻撃をすることはできないだろう。

「それじゃあ里中か？アイツなら攻撃できるがスタイルが少しくほあつ!!」

「それなら美波？でも美波だと胸が余っちゃうとぶへらあつ!!」

「ツギハ、ホンキテ、ケル（ウツ）!!」

女子2人がものすごい殺気を放っている。

「島田でも里中でもない。それだと面が割れてしまうだろうが」

となると、この状況だと天城でもなさそうだ。

そうになると、いったい誰だ？

「着るのはお前だ、明久」